

うつせみのあなたに

第5巻

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
第1部 09.05.14~09.05.23	
09.05.14 かく・かける (1)	6
09.05.15 かく・かける (2)	19
09.05.16 かく・かける (3)	34
09.05.16 かく・かける (4)	43
09.05.17 かく・かける (5)	56
09.05.18 かく・かける (6)	66
09.05.19 かく・かける (7)	80
09.05.19 かく・かける (8)	86
09.05.20 占い・占う	98
09.05.21 賭け・賭ける	111
09.05.22 書く・書ける (1)	125
09.05.22 書く・書ける (2)	131
09.05.23 こんなことを書きました (その8)	144
第2部 09.05.24~09.06.02	
09.05.24 と、いうわけです (1)	150
09.05.24 と、いうわけです (2)	156
09.05.25 あらわれる・あらかず (1)	163
09.05.26 あらわれる・あらかず (2)	172
09.05.27 あらわれる・あらかず (3)	183
09.05.28 あらわれる・あらかず (4)	192
09.05.29 あらわれる・あらかず (5)	202
09.05.30 あらわれる・あらかず (6)	212
09-05-31 あらわれる・あらかず (7)	223
09.06.01 あらわれる・あらかず (8)	231
09.06.02 こんなことを書きました (その9)	243
あとがき	
あとがき	250

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル 251

奥付

奥付 270

はじめに

はじめに

本書を第5巻とするシリーズは、2008年12月19日から2010年3月11日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第5巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いるという仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「09.05.23 こんなことを書きました(その8)」、そして第2部の最終記事「09.06.02 こんなことを書きました(その9)」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

第 1 部 09.05.14～09.05.23

09.05.14 かく・かける (1)

◆かく・かける (1)

2009-05-14 08:56:02 | 言葉

賭け事や占いが好きか、と尋ねられたとしましょう。好きにしろ嫌いにしろ、答えるさいに、何か気おくれに似た気持ちをいだきませんか？ 就職試験の面接、または、多くの人たちを前にした公の場で、「はい、好きです」と素直に答えられるでしょうか。うーん。仮に好きだとしても、勇気が要りますね。どうしてなのでしょう。賭けは博打（ばくち）、占いは迷信といったステレオタイプ化したマイナスのイメージがあるからかもしれません。

ただ、それだけではなく、もっと深いところに「気おくれに似た気持ち」の源があるのではないかと考えています。賭けと占いとは、多分に似たところがあるように思えます。「好きだと他人に言っても、ぜんぜん、後ろめたさは感じないよ」と、おっしゃる方もいらっしゃるにちがいありません。残念ながら、多数の人に尋ねて回った経験はありませんが、おそらく、大多数の人が、賭け事と占いが好きだと他人に言う場合に、何か気おくれを感じるのではないかと。そういう想定のもとに話を進めてみます。

*

さて、

* 「賭ける」と「占う」の背後＝根底には、「負ける」＝「降伏」と「任せる」＝「服従」がある。

のではないかと考えています。では、何に「負け」、何に「任せる」のでしょうか？「負ける」と「任せる」が語源的につながっているのかどうかは、手元の辞書で調べたかぎりでは、よく分かりません。ただ、「自分の身をゆだねる」という点で、きわめて接近した意味があるように感じられます。というわけで、

*何に、自分の身をゆだねるのか？

と言い換えて考えてみましょう。これは、それぞれの人が何を信仰しているかにも、関係がありそうです。ただし、この国は、一神教が生活・文化・政治などあらゆる面で、強い影響力をもつ濃密な風土にはありません。年末年始に、キリスト教の教会、神社、お寺を平気で「はしごする」という、宗教的には希薄な風土が存在する国です。欧米でも、占いに関しては、自分の信仰する宗教とは違ったレベルで接するヒトたちがほとんどのようですから、賭け、占い、宗教をあまり強く結びつけて考える必要はないかもしれません。

賭けと占いにおいて、何に自分の身をゆだねるか？ ですが、こんな答えが予想されません。

*神、神々、仏、先祖、霊、教祖、超越者、天、イワシの頭、宇宙、宇宙の摂理、人知を超えた力、運命、カルマ、確率、あるいは「無」……。詳しくはないのですが、たとえば、競馬、宝くじ、血液型占い、星占いにおいては、お馬さん、数字、血液型、星の運行自体

に、自分の身をゆだねるというよりも、そうした

*表面に現れている＝表れている現象や物事

そのものではなく、その

*背後にある「何か」

に身をゆだねているという気がします。

背後にある「何か」に、身をゆだねるとするのなら、これは大変なことです。「背後にある」のですよ。「何か」なのですよ。これじゃ、「わけが分からない」ではありませんか？
それこそ、

*背後にある「何か」そのものが、賭けと占いの対象になり得る。

というギャグみたいな状況になるような気がします。いや、ギャグというより、見方を変えれば、

*初めに「負ける」「任せる」ありき。

とも言えそうです。

つまり、

*初めから負けっぱなし＝全面降伏

ということです。圧倒的に「強い・崇高な」存在。こうなると、対処するための切り札は1つしかありません。

*信じるのみ

です。

ありゃー、という感じです。このレベルになると、絶句、つまり、どんなに言葉を重ねても意味はない事態となります。言うことなし。問答無用。出口なし。行き止まり。思考停止。エポケー＝判断中止。ここから先へ侵入するべからず。おしまい。ピリオド。

それくらい、「信じる」という行為は強い。手強い。どうにもならない。なすすべがない。でも、これって、ヒトにとってはなくてはならない「いとなみ」＝行動＝心理ではないでしょうか。計算式を立てるなら、

*ヒト - 「信じる」 = 0 = ゼロ (何も残らない) = ヒトでなし

と表しても、算数のテストで◎をもらえるのではないか、という気がします。

この場合の「信じる」は、かなり広い意味にとってください。宗教的なレベルだけの話をしているわけではありません。無神論者でも、生後間もない赤ちゃんでも、状況は同じです。「意識する」＝「知覚する」に近いレベルまで含むものとして、「信じる」を広く考えましょう。すると、

*生後間もない赤ん坊も、「賭けたり」「占ったり」している。

と言えるように思います。

*

一昨日まで、「信号」と「信号論 or 信号学」というツール＝玩具をつかって、いろいろなことを考えたり、いろいろな現象に当てはめる＝つなげる＝こじつけるという「お遊び」＝楽問＝ゲイ・サイエンスをしていました。慣れない「学問ごっこ」をして、しんどかったことは確かですが、とても面白かったことも事実です。そこで、この「かく・かける」シリーズでも、「信号」という言葉をぜひ使いたいのです。たとえば、

*生後間もない赤ん坊は、さまざまな「信号」を相手に、「賭けたり」「占ったり」している。

みたいに使いたいのです。

そこで、今後このシリーズで使いそうなツールを、ここで説明させてください。お断りしておきたいのは、以下に挙げる3語は、別個のものであるというより、森羅万象を対象にした「切り口」＝「切り分け方」だということです。そして、その「切り分ける」作業に先立ち、「目的」があることが重要な点です。

(1)「表象」:「Aの代わりに「Aでないもの」を用いる」という代理＝代行という働き＝仕組みを利用したい場合に使用する。森羅万象が「表象」になり得る。

(2)「トリトメのない記号＝まぼろし」or「記号」:「そっくりなものがずらりと並んでいる」and「そっくりなものが他の場所にも数多く存在する可能性がある」and「お母さんのコピーとして生まれたものの、お母さんの権威や支配とは無縁で、いわばコピーのコピーとして存在している」という特性を強調したい場合に使用する。森羅万象が「記号」になり得る。

(3)「ニュートラルな信号」or「匿名的な信号」or「信号」:「ノイズと熱が常に存在する環境において、「まなざし＝合図」の発信と受信が、一方的、または双方向的に行われる」というメカニズムを問題にしたい場合に用いる。森羅万象が「信号」になり得る。

以上のツールのなかで、さっそく使いたいものがあります。「表象」です。

半端じゃなく強い存在に、ヒトは太古から気づいていたふしがあります。その圧倒的に強い「何か」(※いろいろなヒトたちがいろいろな名で呼んでいるので、中を取って中立的に「何か」と呼んでおきます) 対して、大昔のヒトたちはどう対処してきたでしょうか？ 歯向かうとか、戦うなんて、馬鹿なことはしませんでした。なかには、そうしたお馬鹿さんもいたでしょうが、ここでは無視します。

*

この問題について、「1カ月前、ひな祭り」2009-02-03 という記事のなかに、「占い」と宗教の発生がらみで書いた部分がありますので、横着をして、自己輸入＝自己引用＝コピーをさせてください。ちょっとおふざけ気味の文体ですが、それは内容のシリアスさを薄めるためです。本気で書いたものですので、そここのところをご理解願います。

★「ひな壇」とピラミッドは、司法・立法・行政には付きもの。代理、代行、代議士、代表、総代が、うようよ。ハンコペタペタのペーパーワーク。このへんが不明の方は、当ブログのバックナンバー、「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16、「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 を参照、願います。面倒な方は、このまま、引き続き、どうぞ。「ひな壇」は「虎の威＝衣」とセットで、クラス分け、棲み分けして、暮らすわけ。これが代々続けば、2世、3世、そして、世襲。仲間うちで譲ったり、譲り合えば、天下り、渡り、渡る天下に鬼はなし。

蛇足ながら、「虎の威＝衣」は「虎の位」であり、ピンからキリまで、枚挙にいとまなし。フェイクファーのパンツから、スマトラ産の超高級品の上下一式の被り物まで、多岐にわたる。引退後は、民間人をさておいて、真っ先に褒章、勲章までもらえる。ワッペン張って、大威張り。首から下げて、涙腺を緩めるのが、最後のご奉公。なんでこれのご奉公？ 公僕、最後のご奉公？ ここまで来ると、もうめちゃくちゃではないか？ それなのに、庶民が一揆を起こしたり、騒がないのも、究極には「表象の働き」の奥深さがあるのではなかろうか？ もっと考えてみたいけど、きょうは、それ以上考える暇なし。貧乏暇なし。なぜか、突然、なるほど、

「タモちゃんのお代理様」

は、やっぱり言えている、と思う。

言えてるどころか、きっと、そうに違いない。「でまかせ」ではなく、「言えている」とか「きっとそうだ」にしてもいいでしょうか、偶然と必然のオーソリティー（＝権威）だったマラルメさん？ ここで権威にすぎない自分が、情けない。それはともかく、ヒトよりも、もっともっと偉い存在がいて、ヒトはその代理を務めたいという、願望、欲求、祈り、野望、をもっているのではないのでしょうか、マラルメさん？ Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面をかぶり、表情をまね、ときにはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、これだけ化ければ、〇〇様なんて、呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

という具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」、「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」、「ニワトリとブタが増えますように」、「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」、「今度の戦（いくさ）に勝てますように」、「あいつとの賭けに勝てますように」、「おとうさんの怪我が早く治りますように」、「娘がいいところにお嫁にいけますように」、「亡くなったあとに天国に行けますように」、「元気が出ますように」

「お任せあれ。任せとき。だいじょうぶ。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ このあいだは、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合が悪くなったときには、仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらもとって、わたしは代理ですと言って責任を転嫁すればいい。または、「あんたの信心がたりんからじゃ」と、これまた、責任を転嫁すればいい。「代理人 = 代行者」は、気楽で、いい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

★から、以上までが、引用部分です。

*

宗教と、占い＝預言＝予言と、半端じゃなく強い「何か」の威＝衣を借りて、他のヒトたちの上に立つという「政（まつりごと）＝支配体制＝政治」の成立というシリアス

な問題を、紙芝居的に描いたおとぎ話です。きょうのテーマの1つである、「占い」のメカニズムもご理解いただけただけではないでしょうか。

さて、今度は、歴史ではなく、1個のヒトの成長という視点から、特に「赤ちゃん期」に注目しながら、考えてみましょう。

*生後間もない赤ん坊は、さまざまな「信号」を相手に、「賭けたり」「占ったり」している。

に話をもどします。

健常者の赤ちゃんは、さまざまな形の「信号」を、主に五感、および第六感（※もし、そのようなものがあればですけど）を総動員して、発信し、受信＝知覚しています。そのさいに、

*赤ん坊は、「賭け」と「占い」という行為のなかへと、否応なしに、いわば「投げ込まれている」。

と言えそうです。

それほど、ヒトの赤ちゃんという存在は無力なのです。

生後 or 孵化後、数時間で、オトナのミニチュアのような容姿となり、立ち上がったたり、動き回ったりする、たとえば、お馬さんの赤ちゃんや、イカさんの赤ちゃんを思い浮かべれば納得できると思います。もちろん、程度の差はあります。ある期間中、お母さんの腹部にある袋（＝育児嚢（いくじのう））で保護されているカンガルーさんの赤ちゃんや、巣の中で毛の薄い頼りなげな姿で巣立ちまで過ごしている鳥類の赤ちゃんも確かにいますね。

なお、ヒトの赤ちゃんの「よるべなさ＝無力さ」には、「ネオテニー（＝幼形成熟）」という現象が関係しているという説があるそうです。語弊を覚悟で申しますと、ヒトは「早

産」し、子を「未熟児」として産むということらしいです。だから、自立するまでに長期間を要するという理屈みたいです。このへんの事情については、他の問題とからめて「交信欲＝口唇欲」2009-01-26、「オバマさんとノッチさん」2009-01-28 でも少しだけ触れましたので、ご興味のある方は、ご一読ください。

*

さて、ヒトの赤ちゃんが「賭けたり」「占っている」というのは、「ニュートラルな信号」を「合図」という形で発している、つまり、「オギャー」と叫んだり、笑みを浮かべたり、じっと「まなざし」を向けるという具合に発しているのは、オトナの目から見て、

*期待＝欲求というメッセージ

を送っているという意味です。

*期待と欲求は、これから先の出来事に向けられている。

と考えれば、「賭ける」「占う」との関連が分かると思います。

ここで大切な点は、

*期待・欲求 → これから先の出来事＝未来の出来事 ← 予測・予想

と図式化するさいに用いることも可能な、「→」と「←」という符号＝「信号」にあります。何を言いたいのかと申しますと、

*「→」と「←」という符号＝「信号」は、「向き」＝「方向」を示している。

という点が大切なのではないか、ということなのです。

さきほどの「信号」の定義で、森羅万象が「信号」になり得る、とあったのを思い出してください。「→」と「←」も、立派な「信号」です。「向き」＝「方向」を示しながらも、それ自体は「ニュートラル」な「長短の3本の線の組み合わせ」でしかないのです。

*たとえ何かのメッセージを担おうと、「信号」は、あくまでも「ニュートラル」であり、「匿名的」なものである。

という特性は、いくら強調してもしすぎることがないくらい、重要です。言い換えると、そうではないと思われやすいということです。

「信号」の担う「メッセージ」が、「色づけ＝意味づけ（＝ニュートラルではない）」され、「ある特定の目的を志向する（＝匿名的ではない）」ということは、「信号」が然るべき「経路」へと「向かう（＝「→」と「←」）」という点においてのみ、「意味」があり、「必然性」が認められるという、「きわめて不安定な基盤」に立っているのです。もちろん、それとは逆に、これを「安定した基盤」に立っているとみなす考え方もあるでしょう。

でも、ヒトの赤ちゃんを例に取れば、現在の日本という国の比較的恵まれた好条件＝好環境を基準にするかぎりにおいて、「安定した基盤」に立った「信号のやりとり」を行っていると言えるにすぎず、この惑星の圧倒的多数のヒトの赤ちゃんたちと、ヒト以外の生き物たちの赤ちゃんたちと比べた場合には、きわめて「きわめて不安定な基盤」に立っていると言ったほうが、残念ながら、適切だと思われます。いわゆる

*生存率という確率

を思い出してください。いかに、赤ちゃんの「賭ける」と「占う」が危ういかが体感できるかと思います。

*

このように、

* 「ニュートラルな信号」が、然るべき「経路」にまで「向かう (= 「→」と「←」)」過程をとらえるには、確率というツールが不可欠になる。

と言えそうです。事態はそれだけにとどまりません。ここで、「信号論 (3)」2009-05-12で利用した、きわめて大雑把な私的「カンニングペーパー」を、コピペさせてください。

A : ノイズ+熱 ⇒ ニュートラルな「信号」: 合図・視線・まなざし・表情・刺激

↓

B : ノイズ+熱 ⇒ 経路・通路 (光・電波・波動・電線・管・ニューロンなど): 線・糸・揺れ

↓

C : ノイズ+熱 ⇒ 回路・知覚器官・知覚組織・解読版・グリッド: 色づけ・分ける・知覚・見る・解読・解釈・識別: 網・濾過記=フィルター・カメラ・マイクロホン

↓

D : ノイズ+熱 ⇒ スクリーン・膜・細胞・機械・器械・画面・スピーカー・発信装置=受信装置: 幕・器

↓

E : ノイズ+熱 ⇒ 映像・音声・震動・運動・動作: 動き・まぼろし・イメージ

↓

F : ノイズ+熱 ⇒ 賭け・ギャンブル・偶然 (accident) / 成功=不成功・当たり=外れ・作動=誤作動・正常=異状 or 異常・順調=不調・OK=エラー

上の図を見ていると、話がしやすいのです。正確さという点からは、まったく信用できない「トンデモもの」ですが、このブログ自体がいわゆる「トンデモ本」の親戚の「トンデモブログ」みたいなものですので、恥を忍んで掲載させていただきます。

さて、いったん発信された「ニュートラルな信号」は、上図のAからEまでの全過程において、確率に大きく左右されています。

* 「信号」の「ニュートラル性」とは、「信号」が常に確率に左右されている状態だ、と言い換えることができる。

とも言ってもよい、とさえ考えています。

正直申しますと、自分は確率・統計は大の苦手なのです。かつて一種の売文業をしていた頃に、仕事上、どうしてもこの分野の知識を使わざるを得ない事態に陥り、3冊の参考書をもっていますが、今読んでも、さっぱり分からないのです。こういう場合には、「確率」と書いてあっても、比喩であったり、お飾りであったり、はったりであったりしがちですので、せいぜい、「比喩」くらいで使っているのだと理解していただければ、幸いです。

*

では、きょうのまとめをします。

「賭け事」「占い」の背後には、たいてい「後ろめたさ」がつきまとっている。それは、何ものかに自分の身をゆだねているという心理があるからだ、と考えることができる。「身をゆだねる」というのは、体（てい）のいい表現であり、ぶっちゃけた話が全面的に「任せている＝負けている」という負い目である。

この「負け」はヒトにとって、根本的で、始原的とも言えるものがある。ヒトは太古から無力であり、圧倒的に強い「何か」に対し、その「代理」を務めるという方法と、その代理人に「占い＝預言＝予言」をしてもらうという方法を考え出した。また、ヒトは1個の生体としても、生まれて以来無力な存在として存在する。頼りになるのは、自分の「期待・欲求」を伝えるために発する「信号」である。しかし、その「信号」が然るべき「経路」を経て、受信され、最終的にその目的を達することは、「賭け」「占い」である。つまり、確率に左右される。

という感じです。こう考えると、「信号」をちゃんと受けとめてもらえる赤ちゃんって、幸せですね。母親や母親に代わるヒトのせいでほったらかしにされていたり、そうした保護者とは無関係の何らかの事情によって、メッセージが届かず不幸な目に遭う赤ちゃんが、この世界にはたくさんいるのにちがいません。

みなさん、身のまわりにいる赤ちゃんを見守ってやりましょうね。うちの近所にも、赤ちゃんたちがいます。裏の家の軒下に巣を作っているツバメさんちの赤ちゃんです。4羽います。かわいいです。でも。なかには、巣から落ちこちちやう子っているんですよ。悲しいです。あれも、自然の摂理ってやつでしょうか。いずれにせよ、あまり近寄らず、距離をおきつつ、見守っているところです。

さて、きょうは、ちょっとですが、引用部分にマラルメさんにも出演していただいたため、元気が出ました。あの人は、以前の記事では常連の賓客だったのです。「賭け」と「ダジャレ」の名人です。このシリーズでは、お手を借り、ご活躍を願おうと思っております。

あすも、引き続き、「かく・かける」をテーマに書く予定です。ぜひ、また、この楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくお勉強しよう」サイトに遊びに来てください。お待ちしております。

09.05.15 かく・かける (2)

◆「かく・かける (2)」

2009-05-15 08:55:33 | 言葉

ギャンブルという英語の語源は諸説があり、そのなかでゲームと親類だという説に興味をもちました。「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」と並べてみると、「なるほど」と領きたい気分になります。もっとも、gameにはいろいろな意味があります。大きめの辞書で意味を調べると、驚くような語義もあり、想像力を刺激されます。いったい、どうつながっているんだろう、という感じです。

個人的には、お金がらみの賭け事も、ある規則に沿った遊びという意味でのゲームにも、興味も縁もありません。いわゆる賭け事を最後にしたのは、大学1年のときに生まれて初めて1回だけやったパチンコでしょうか。宝くじは、もらったことはありますが、買ったことはありません。いわゆるゲームを最後にしたのは、10年ほどまえにPCでやった「ぶよぶよ」くらいでしょうか。囲碁、トランプはまったくやりませんし、自分が参加するスポーツもありません。

にもかかわらず、さきほど挙げた「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」とつくづく感じているので、実際には、自分は何れっきとしたギャンブラーであり、ゲーマーであると信じています。だから、自分にとっては、毎日がギャンブルであり、毎日がゲームなのです。真剣勝負です。

*ヒトである以上、「賭け」と「ゲーム」には無縁ではられない。

これは実感です。「賭け」とは、きのうの記事で述べた、半端じゃなく強いパワーをもつ「何か」に自分の身をゆだねることです。「ゲーム」とは、半端じゃなく強い拘束力をもった規則のようなものに従って生きることです。自由意志という言葉がありますが、そんなものが通用するような状況に、ヒトは置かれていない、という「諦め」に似た意識を

強くいただいています。神仏は信じていないつもりですが、

*半端じゃない「何か」

を信じているのは確かなようです。

特定の言葉を用いて何と呼ぼうと、とにかく、その「何か」としか言いようのないものが気になって仕方ありません。精神衛生上は、その「何か」を世の中に流通している＝よく使われている言葉で特定し、その言葉を用いている人たちと一体感を共有するのが、いいに決まっています。でも、その特定の言葉が、今のところ見つからないのです。というわけで、個人的には、「人生は賭けだ」&「人生はゲームだ」くらいで、当面はお茶を濁しておきたいと考えています。

*

さて、きょうは、「かく・かける」と、それと関係深そうな「かかる・かかり・かかわる」を、言葉のレベルで整理してみるつもりです。

*「かく」：書く・描く・画く・搔く・欠く・掛く・懸く・繫く・構く・舁く・駆く

*「かける」：掛ける・架ける・懸ける・賭ける・駆ける・駈ける・翔る

*「かかる」：掛かる・懸かる・繫かる・架かる・罹る・輝る

*「かかり」：係り・掛かり合う・掛り・繫り・懸り

*「かかわる」：関わる・係わる・拘る

以上の言葉の羅列を見ていると、「かく・かける」と「かかる・かかり・かかわる」の多義性=多層性=豊かさに、あらためて驚かされます。すごいです。基本的に表音文字である大和言葉系のひらがなが、「漢字+ひらがな」という大発明である送り仮名で処理され変貌している様は、実に感動的です。奇跡に立ち会っていると云ったら、大げさでしょうか。でも、そんな感じなのです。

とはいえ、ふと気づいてみると、何げなく使っているPCのワープロソフトの文字変換は、その「大発明」を機械が代行してやってくれているのです。この事実を嘯みしめると、すごい、としか言いようがなくなってしまいます。実際、日本語を処理するワープロソフトはすごい。

で、さきほどの言葉の羅列ですが、国語の専門家として、言葉をながめているわけではないので、その羅列をにらみながら、自分は自分なりに気になる点だけを、以下に書きとめておこうと思います。要するに、記事を書くためのメモ作成です。

* 文字や文章を「書く・書ける」ということと、「賭ける」こととの「係わり合い」。

* 「書く」と「引っ掻く」の「掻く」との「係わり合い」。

* 「書く」と「描く(=かく・えがく)」とはどう違うのか？

* 書き表す・書き込み・書き記す・書き付け・書き留める

* 「掛ける」の多義性=多層性をチェック。

* 駆け引き・駈け引き・掛け引き

* 「掛詞=懸詞(=かけことば)」における、「掛ける・懸ける」が非常に「気に掛かる」。
気掛かり・心掛かり

*願を懸ける・命を懸ける・神懸かり＝神憑り・神に懸けて誓う

*賭け事・金品を賭ける・社運を賭ける・賭けに勝つ

*生活が懸かる・優勝が懸かる・メンツに懸けて・神に懸けて・賞金を懸ける

*目を懸ける⇒めかけ・妾

*目掛ける・めがく

*掛け合わせ（＝交配）・○と△を掛け合わせて新種をつくる・掛け算（※割り算）

*かき回す・引っかき回す・掻き混ぜる＝掻き雑ぜる・掻き分ける

*十字架・仮空⇒架空

*架け橋を渡る（※具体的）・夢の懸け橋（※比喩的）・未来への懸け橋（※比喩的）・友好の懸け橋（比喩的）

*「□とかけて○と解く。して、その心は……」のメカニズムは？ このフレーズでの「かける」の意味は？

*医者に掛かる

*声を掛ける・掛け声・掛け合い漫才

以上は大和言葉と漢字の戯れに注目しましたが、次に、気になる漢字を漢和辞典で調べ、特に「解字」（＝文字の成り立ちの説明）に焦点を当ててみます。

*書：聿（※筆・ふで）＋音符の者。一箇所に定着させる。紙や木簡に筆で字を定着させる。

*賭：貝（※財貨）＋音符の者。集中する、つぎこむ。

*掛：圭（※ケイ）は、△型に高く土を盛るというイメージ。そこから転じて、／＼型に何かを高くかけるイメージ。卦（※カ）はト（※うらない）のしるしをかけるの意。掛＝手＋音符の卦で、／＼型にぶらぶらさせておくイメージ。

*懸：県は、首をひっくり返した形。つまり、首を切って宙ぶりのイメージ。縣（※ケン）は、県＋糸（※ひも）の会意文字で、ぶらさげるということ。懸は、心＋音符の縣だから、心が宙ぶり状態、つまり気持ちが決まらず、気がかりとなる。

*搔：かゆいかゆいの蚤（※のみ）と関係あり。蚤の上の部分は、爪（※そう）、つまり「つめ」の形。それに虫が下の部分にある。つめでかきたくなるくらいかゆいかゆいの元となる蚤。搔＝手＋音符蚤となり、「手の爪で搔く」となる。

蛇足とは思いますが、こうした「お勉強」は、

*「正しい」vs.「正しくない」ごっこという学問

をやっているのではなく、

* 「正しくなくていいんだよ」の精神での、楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しいお勉強ごっこ」

でやっているのです。

ですので、上の文字の羅列や、漢字の解字は、

* こじつけて、めちゃくちゃ面白いし、楽しい

という気持ちで実行しています。

もちろん、こうした「こじつけ」＝「ほぼ学問」＝「アラガク」＝「around 学問」が苦手な方もいらっしゃるでしょう。どうか、あまり、真面目に＝真剣に、肩間にしわを寄せたり、肩に力を入れたりなさらないように、お願いいたします。

以上の記述が面倒くさいと思われる方は、読み飛ばしていただいて、いっこうにかまいません。

*

で、「かく・かける」を各種の送り仮名バージョンでながめたり、「かく・かける」に「当てた」漢字の解字を見ているうちに、「かく・かける」の中心的なイメージ＝コア・イメージを自分なりに感じました。それは、

* 芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の1シーンに似ている。

つまり、

* 半端じゃない圧倒的なパワーの手から垂れた糸につかまって、ぶら下がっているヒト

というイメージです。

芥川の短編にある前後のストーリーは無視してください。ただ、

*ヒトが細いの糸につかまって宙ぶらりん

という状況だけが肝心なところなのです。そんなイメージを膨らませていると、一方で、糸にぶら下っているのがヒトではなく、クモにも思えてきました。

*何かに引っ掛かった細い糸に宙ぶらりんとなって、空気の流れに身をまかせて揺れ動いているクモ

クモは糸を出して巣を作ります。その巣を英語では web と言いますね。そうです。インターネット = Internet の net の親戚の WWW = World Wide Web のウェブです。あなたとこのブログの開設者を結んでいるネット = ウェブ。web には、「織物」という意味もありますね。「織物」と言えば、text = テキスト = テキスト、つまり書かれたもの。

*クモの巣 = web = 織物 = text = テキスト = 書かれたもの

とつながってしまいました。

こじつけ = ダジャレ = 言葉の遊び = 「存在の大いなる連鎖」 = でたらめ = でまかせ = 偶然などと、何とでも呼んでください。

クモをイメージした場合には、巣を

*かける

という能動的な表現もある一方で、風に飛ばされて、糸が引っ掛かる、つまり、

*かかる

という、受動的＝風まかせ的＝なりゆきまかせ的＝身をゆだねる的な、言い方もできません。実際、そんなふうに関に飛ばされて「引越しをする」クモを見たことがあります。個人的には、その受動的なイメージが気に入っています。うん、

*宙ぶらりん

でいきましょう。

これが「かく・かける」のコア・イメージです。

*

いろいろ書いてありましたが、個人的に興味があるのは、特に、マラルメがらみの、

*「書く・書ける」と「賭ける」

なのです。

この問題については、またじっくり取り組むことにし、少しだけ話題を変えましょう。

「もらって嬉しいもの」の話です。「信号論(1)」2009-05-10でも触れましたね。病気以外なら、たいてい、何をもらっても嬉しいのではないかって話です。「もらう」というと、ふつう、具体的な「物」を思い浮かべませんか？消費期限がある、生菓子に代表される

「物」。スナック菓子みたいに比較的保存がきく、賞味期限がある「物」。

これらはだいたい食品ですが、電気製品のように保証期間が明記された、保証書付きの「物」。手作りの「物」。調度とも呼ばれる、家具や道具などの「物」。こうした「物たち」を、よその家の人や、身内からいただくということはよくあります。今、挙げた「物たち」の特徴は、

*手で触れたり、突いたり、場合によっては叩いたりできる

ということです。

でも、「もらう」ものがすべて、そうかというと、どうやら、そうでもなさそうです。コドモの頃を思い出してください。小学校時代に、

*○や◎

を、もらうのってとても嬉しかったですよね。

「よくできました」とか「たいへん、よくできました」なんて書いてあるスタンプを押して「もらう」のも、嬉しかったです。そのスタンプの延長上に、通知表の数字があります。5段階評価なら、「5、4、3、2、1」の順で、嬉しいとなります。もっとも、2や1だと、嬉しいというわけにはいかないかもしれませんが。

「○や◎」に、話をもどしますが、次のようなことを何かで読んだ記憶があります。確か、外国の小学校の話です。ある女性の先生が、児童のテストや宿題の「丸付け」をするさいに、赤インクではなく、青インクを使っていた。なぜなら、

*赤で「Eや/」のしるしを付けると、人の心を傷つける

からだ、というのです。

正直言って、意外でした。なるほど、とは思いませんでした。あくまでも、個人的な感想です。みなさんは、今の話を読んで、どうお感じになりましたか？ 赤のインクで記された「E や /」を先生からもらって、それが単に「赤い」という理由で「グサッ」とか、「グサリ」とか、こころが傷ついた方は、いらっしゃいますか？「うんうん、わかる、その気持ち」なんて、しきりに頷いている方がいても、驚きはしません。

ただ、自分には意外な話でした。個人的には、色よりも、むしろ、大きく「E や /」と描いてあったほうが、大きなショックを受けそうな気がします。絶対そうです。今、小学生にもどった気になって想像してみたら、実際に涙が出そうになりました。理屈より自分のからだを信じます。思いっきり大きな「E や /」が描かれたテスト用紙や宿題帳が返ってきたら、きっと泣いちゃいます。「赤い」からではなく、「でかい」からです。

*しくしく ⇒ めそめそ ⇒ わーん！

でしょうね。

それはそうと、青のインクやフェルトペンで描かれた「O や ◎」や「E や /」って不気味じゃないですか？ これも、個人的な感想ですけど、自分はそんなふうに感じます。もしかすると、現在のように、ピンク、薄めのグリーン、柔らかい色調のパステルカラーなどのボールペンや色鉛筆やフェルトペンがなかった時代の話だったからかもしれません。自分が、パステルカラーの水色で「E や /」をもらったとしたら、強いショックを受けることはないのでは？ と想像します。

少々話がそれてきましたが、何を言いたいのかと申しますと、

*もらって嬉しいものとして、物体のほかに「印（しるし）」がある。

逆に言うと、

*もらって嬉しくないものとして、物体のほかに「印（しるし）」がある。

ということなのです。この理屈でいえば、お祝いや励ましの言葉、癒やしに満ちたメッセージなども、もらって嬉しいものだと言えます。逆に、悪態、罵倒、呪いの言葉などを、もらって嬉しくないことは言うまでもありません。

で、ここでは、話が広がりすぎないように、あくまでも、

*何かの物体に、印した「印（しるし）」

に的を絞ります。

「印（しるし）」とは、もとはと言えば、尖ったもので引っ搔いた跡、筆で書かれた or 描かれた墨の残りかす、染料や顔料の残りかす、乾いたインクの細かい粒、鋭いもので彫られた or 刻まれた痕跡などであったりするわけで、「物体」とみなしてもいいわけですが、そこまで厳密には考えないでおきましょう。

*目で知覚できる痕跡

くらいに定義し、具体的には、

*ちょっとした「目じるし」から「文字」や「印鑑の跡 or 像 or 形」（※印鑑や判子そのものではありません）や「刻印されたものに映じる視覚的な像」

を指すものとします。つまり、視覚的イメージを重視します。

*

さて、言葉のフェティシストとしては、ここでまた、言葉＝文字いじりがしたいです。短いものです。すみませんが、ちょっと、お付き合いください。

*しるし・印・標・徴・験・記し・著し

*しるす・印す・標す・記す・誌す・認す

*しるべ・標・導・知方

以上です。

3つめが上の2つと語源的に関係があるかどうかは不明ですが、楽問では、どうでもいいことです。上の言葉たちをながめていると、いろいろな考えやイメージが浮かんできます。それが楽しいのです。さて、さきほど定義したように、

*「印（しるし）」は「物体」ではなく、「視覚的イメージ=像=形」である。

とします。

「印（しるし）」のなかでも、日常的に使用され、しかも、きわめて重要な役割を担うものとしてハンコ=印鑑があります。このハンコについては、「あなたら、どうしますか？」2009-01-16 と「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 で、「表象」という考え方から詳細な分析をしていますので、ご興味のある方は、ぜひ、お読みください。

で、ハンコ的一种である「よくできました」というスタンプにしる、赤インクの「○や◎」にしる、通知表の上位の数字にしる、なぜ、もらって嬉しいのでしょうか？ また、教室にある自分の机に「ばか」とか「あほ」と書かれた文字や、通知表の下位の数字や、赤インクの「Eや/」や「O（0点という意味です）」をもらうと、どうして嬉しくないのでしょうか？ たとえば、小学生時代にもどったつもりで考えてください。しよせん、「印（しるし）」です。数字です。文字です。なぜなのでしょう？

きのうの記事で書いたばかりの文章なので、まことに恐縮ですが、どうしても必要な
ので、ここで以下にコピペさせていただきます。

(1)「表象」:「Aの代わりに「Aでないもの」を用いる」という代理=代行という働き=
仕組みを利用したい場合に使用する。森羅万象が「表象」になり得る。

(2)「トリトメのない記号=まぼろし」 or 「記号」:「そっくりなものがずらりと並んで
いる」 and 「そっくりなものが他の場所にも数多く存在する可能性がある」 and 「お母さ
んのコピーとして生まれたものの、お母さんの権威や支配とは無縁で、いわばコピーの
コピーとして存在している」という特性を強調したい場合に使用する。森羅万象が「記
号」になり得る。

(3)「ニュートラルな信号」 or 「匿名的な信号」 or 「信号」:「ノイズと熱が常に存在する
環境において、「まなざし=合図」の発信と受信が、一方的、または双方向的に行われる」
というメカニズムを問題にしたい場合に用いる。森羅万象が「信号」になり得る。

以上の(1)から(3)までが引用です。

「印(しるし)」をもらって嬉しかったり嬉しくなかったりするの、「印(しるし)」が表
象だからです。何の「表象」、つまり「代わり」なのかと言えば、成績、つまり、ある人
のある時点でのある学科での出来具合であったり、ある人に対しての、おそらくクラス
の誰かがいっているネガティブな感情であったりするのです。同時に、「印(しるし)」
は、「トリトメのない記号=まぼろし」であり、さらには「ニュートラルな信号」だとも
考えられます。

「印(しるし)」を「記号」と考えた場合には、採点する先生は、学校の休み時間や、家
での家事の合間に、せっせと赤ペンを走らせたり、その学期の各児童のテストの点数とに
らめっこしたりして最終決断を下すという意味です。語弊があるかと思いますが、そっ
くりな製品を「流れ作業」で作るように、次々と採点し、次々と成績を決めるわけです。

教師という仕事には、そうした単純作業の側面もあるのです。また、いじめっ子は、それなりに「流れ作業的」に、ある標的に対して「ばか」とか「あほ」とか書くという「仕事＝作業」を終え、同じクラスメートに対して別の「仕事＝作業」をするか、別のクラスメートを標的にして新たな「仕事＝作業」に移るわけです。

「印（しるし）」を「信号」とみなす場合には、教師は、まさに曲線と直線から成る形を、ペンとインクという材料を用いて紙の上に記し＝描いた形＝像に、「成績」＝「よくできましたねー or だめでしたねー」というメッセージを担わせたり、あるいは、偽装や偽造を防ぐために、5種類の数字のスタンプを、「通知表」と書かれた紙にポンポンと押していくのです。

一方、いじめっ子は、標的のいない教室でこっそりと、または、他の児童の目などぜんぜん気にすることなく、にやにやしなながら「ばか」なり「あほ」なりと、標的の机の上に、ボールペンか鉛筆かシャープペンで書くというわけです。「ばか」も「あほ」も、単なる曲線と直線からなる形であることは言うまでもありません。「信号」というレベル＝「考え方」においては、その「信号」自体に意味やメッセージはありません。

*

以上、見てきたように、

* 「表象」「記号」「信号」とは、森羅万象を対象とした「切り口」＝「物の見方」である。

と考えていますので、たとえば、「印（しるし）」という対象を、3通りに切り分けることが可能です。この3つのツールを、その目的に即して使い分けることで、何かを説明するさいに、説明がしやすくなります。「かく・かける」というシリーズでも、今後、適宜に使い分けようと思います。

これまでのブログ記事では、「表象」⇒「記号」⇒「信号」という具合に、3つのツ-

ルが支える形で、あるいは、生まれる形で、ブログのテーマの流れが形成されてきました。さきほどは、3通りのツールを用いて「印（しるし）」を説明してみましたが、今後の見通しとしては、

* 「書く・書ける」と「賭ける」の係わり合い

という、以前から考え続けている、自分にとって非常に大きな問題をどういう「切り口」で書こうか、あるいは、どういうふうに「切り分け」ようか、迷っているところです。

きょうは「かく・かける」という多義的=多層的な意味をもつ大和言葉系の言葉のうち、

* 「書く」および「描く」と表記される「印（しるし）」

について考えてみました。

「書く」という行為を、考古学のおよび歴史的視点から論じられることもできるでしょう。つまり、ピクトグラム（=絵文字）・トークン（=粘土製証票）・象形文字・楔形文字・エジプトヒエログラフ（=聖刻文字 or 神聖文字）・漢字などに注目するわけです。

でも、自分としては、そうした作業に関心はありません。歴史が苦手なのです。むしろ、「今、ここにある」ものに注目し、手もちの知識と情報で間に合わせるといって、きわめて無精で横着な方法を取る癖が身についているのです。

* 「素人だから」

といえばそれまでですが、それを、

* 「素人だからこそ」

に転じる、図々しさ＝厚かましき＝鈍感さで、ゲイ・サイエンス＝楽問＝「楽しいお勉強ごっこ」していこうと思っています。

あすこそは、「賭ける」について「書ける」といいなあ、と願を「かける」つもりです。マラルメ師のご降臨を、ひたすら待つのみという感じです。

09.05.16 かく・かける (3)

◆かく・かける (3)

2009-05-16 11:07:24 | 言葉

ポル・ポトという人名を覚えていらっしゃるでしょうか？ 1970年代後半にカンボジアで共産党政権を樹立し、大粛清（だいしゅくせい）＝大量虐殺の首謀者となった政治家です。仏印という古い言葉があります。かつてフランス領であったインドシナ3国、つまり、現在のベトナム、カンボジア、ラオスを指します。フランスの植民地だったために、高齢者のなかにはフランス語を理解できる方々がいらっしゃいます。かつて、フランスへ留学した人たちも多数いたとのこと。その1人がポル・ポトでした。

このブログでよく出てくるフランスの詩人マラルメと、ポル・ポトの接点は、その留学にあります。留学時にマラルメの研究をしていたとかいないとか、そんな噂話を聞いた記憶があります（Pol Pot と Mallarmé でネット検索してみると、噂の出所の一つはスラヴォイ・ジジェク（Slavoj iek）のようですけど）。かつて、自分が大学で文学を学んでいたころ、フランス文学の研究者に、旧フランス領の出身者が数多くいるという話を聞いたことがあります。

自然の成り行きだと感じました。また、イランにも優秀な研究者が複数いるとも耳にした記憶があります。これは、少し意外に感じました。イランとフランスの関係についてはよく知りません。ただ、かつてイラン・イスラム共和国の最高指導者であったホメイ

ニ師が、イラン革命の前に一時期亡命していた国がフランスなのです。なぜなのでしょうね。

ふと思い出しましたが、1970年代前半に中国に亡命していたカンボジア国王、シアヌークが、旧宗主国フランスの言語を流暢（りゅうちょう）に話している様子を中高生のころに、よくテレビのニュースで見聞きしていました。シアヌークとポール・ポトとの関係も、一筋縄ではいかない複雑なものがあります。

歴史的経緯を見ていると、敵味方という単純な割り切り方ができません。シアヌークが、フランスではなく、共産党の支配する中国に亡命し、フランス語で世界に「信号」を送り続けていた様を、ブラウン管をとおして不思議に見ていた記憶がよみがえってきました。

フランスへの亡命という話はよく見聞きします。例の「人民の人民による人民のための政治」（※このフレーズ中「人民の＝ of the people」の翻訳には異論がありますね。ofを「所有格」と取るか「目的格」と取るか、なのですが、ここでは触れません）とそっくりなフレーズが、フランス共和国憲法の第1章「主権」の第2条にある「原理」としてあります。

両者にまつわる歴史的経緯は知りません。また、植民地だった米国が、英国から独立した記念にフランスが「自由の女神像」を贈ったことは有名ですね。「基本的人権」という考え方を、言葉だけでなく、実行に移そうという仕組みが、国家のアイデンティティのレベルで働いているのかもしれない。

思い出すのは、かつてアルゼンチンに軍事政権が樹立されたとき、多数の人たちがフランスへの亡命を認められました。そういえば、現仏大統領サルゴジ氏の父親は、ハンガリーの貴族の生まれで、ソ連の赤軍から逃れる形でフランスに亡命したと聞きました。そうしたことを許容する土壌（どじょう）が、あの国にあるのでしょうか。

つい最近まで、東欧諸国は、事実上、旧ソ連の「植民地」でした。パリは、そうした土地からの追放者をはじめ、亡命者、移民、そして自発的な異郷生活者＝exile（※一時期のヘミングウェイが好例です）であふれている都市だったし、今もそうであると聞きます。

*

このように、植民地政策をとっていたヨーロッパの国々のあらゆる面で、かつて植民地 or 半植民地として支配していた、あるいは、大きな影響力を及ぼしていた国や地域がらみの話は、枚挙にいとまがありません。つまり、支配する側と支配される側、そして「敵」と「味方」(※この対立は表面的なものでしかありませんが)とが、多面的=多層的にからみ合っているという意味です。

当然と言えば当然の現象です。ただ、その係わり合いが理解しにくい。どうつながっているのかが分からない。予想外な結びつきを発見することがしょっちゅうある。そうした発見をするたびに、疑問をいだくと同時に、複雑な心境になります。このように国際情勢や国際問題をニュース記事という媒体をとおして見ていると、

*さまざまな「信号」がめくばせし合っている。第三者である自分には、そのめくばせの意味=メッセージが分からない。ひょっとすると、めくばせを送っている者たち自身にも分からないのではないか。

とさえ思えてきます。

それくらい、世界は分からない。ネットにどっぷり浸かってニュースを追ってみても、どうなっているのかが分からない。経済とは、また違った意味で分からない。「信号」だらけなのに、分からない。「信号」だらけだから、分からないのかもしれない――。

国家、文化圏、言語圏、民族、政治集団、宗教などといった、さまざまな要素が、ニュートラルな「信号」を、垢(あか)や汗や血やその他の体液や言語や思想・主義・宗教という言葉でいかに「汚そう」=「色づけしよう」とも、「信号」はあっけらかんとした表情をまとい、熱とノイズにさらされながら、ただ飛び交うだけ。言い換えれば、

*「ニュートラルな信号」たちは、この惑星の王者を決めこんでいるヒトのてんてこ舞いをあざ笑いもせず、ただ「まばたき」「めくばせ」するだけ。

です。

*

国際関係とか、国際政治という分野がありますね。以前に、一種の売文業をしていたころ、仕事に少し関係があったので、興味を持っていたのですが、現在は疎いです。でも、本や文献を通してですが、一時はいろいろ勉強しました。

外交や交渉といった「ばかし合い」と「裏切り合い」、「インテリジェンス＝諜報やエスピオナージ＝スパイ活動」という名の「さぐり合い」と「違法行為・犯罪行為」。まさに「魑魅魍魎（ちみもうりょう）の跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）。

たとえば、交渉の現場では、各種の「信号」が飛び交います。めくばせ、ボディランゲージ、文書の文言、テーブルでの席順、私語、無駄話、トイレに立つ、突然の怒り、突然の笑い……。そうした一挙一動が「信号」になり得る。

交渉期間中の会場以外での「信号」にも、注視しなければなりません。ホテルでの盗聴、盗撮なんて当たり前。ちょっと観光のつもりで、ホテルの近辺を歩いたら、スリに遭った。美女 or 美男 or 子供が話しかけてきた。買い物をしたら、おつりに妙な硬貨が混じっていた。レストランで食事をしていたら、妙な味のサラダが出た……。といった感じです。四六時中、気を許すわけにはいかないのです。

繰り返しますが、「信号」は、あくまでもニュートラルなものです。ある意味やメッセージが託されているかもしれませんが、その意味やメッセージが発信者の思惑通りの作用＝効果＝働きを発揮するかは、誰にも分かりません。

国際関係・国際政治という大きな枠内でも、外交・交渉や、インテリジェンス＝スパイ活動といったレベルでも、飛び交う「信号」は、ことごとく「解釈」「読み」「判断」を裏切る。その意味では、

* 「信号」に「正しい」「正しくない」、つまり「正解」「不正解」はない。

と言えそうです。

「信号」だと思った「こと・もの・さま」を相手に「解釈」を試みてもほとんどの場合、「無効」です。せいぜい、「勘違い」が「正解」に限りなく近い、上出来なパフォーマンス＝成績＝仕事ぶり。そんな感じらしいです。国際政治には、詳しくはありませんが、少しかじってみて、個人的にはそんな感想をいただきました。

*

どうして、こんな話を書いているのかと、不思議に思われるでしょう。実は、あるお方を待っているのです。ポール・ポト、ホメイニ師、仏蘭西（フランス）という、意味ありげで、それでいて実は匿名的な「信号」を呼び寄せ、国と国、文化と文化といったテリトリーを「ニュートラルな信号」が易々と飛び越し、無化＝無効化する様（さま）を思い出すことにより、

*偶然と必然との「間（＝あいだ・あわい）」

そして、

*意味と無意味との「間（＝あいだ・あわい）」

に成立しているであろう

*「何か」＝「間（＝あいだ・あわい）」

あるいは、「AとB」というフレーズの「間（＝あいだ・あわい）」にある

*「と」＝「間（＝あいだ・あわい）」

としか呼ぶしかないものの持つ「匿名的でニュートラルなパワー」が訪れるのを待っているのです。あやういですね。それは百も承知なのですが、この儀式なしには、あのお方は訪れてくれそうもないのです。おふざけではありません。本気です。もう少し、お待ちください。

*

「国際」という言葉の「際」は「間（＝あいだ・あわい）」という意味と重なります。「間（＝あいだ・あわい）」という言葉は、「関係＝係わり合い」の「関」とも係わり合います。

* 「さい＝際＝賽＝賽子＝骰子＝さいころ＝采」⇒「骰子一擲（とうしいってき）＝サイコロの一振り」＝「賭け」＝「賭ける」＝「詩作＝思索＝試作」

以上は、おまじないみたいなものです。さいころが出ました。いや、「出した」と言うべきでしょう。やらせなのです。マラルメ師のさいころです。

* マラルメのサイコロ

については、「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21、「なぜ、ケータイが」2009-01-22、「ケータイ依存症と唇」2009-01-27、「カジノ人間主義」2009-01-30 で、いやというほど出てきます。本人としては、せっぱ詰まった状況で、真剣にサイコロを振っているのですが、その性質上、どうしても、他人様の目からはおふざけに見えてしまうのです。いずれにせよ、

* 「さい＝際＝賽＝賽子＝骰子＝さいころ＝采」⇒「骰子一擲（とうしいってき）＝サイコロの一振り」＝「賭け」＝「賭ける」＝「詩作＝思索＝試作」

は、

*めちゃくちゃなこじつけ

を行った結果としての、おまじないです。

でも、この記事を書くためには、絶対に「欠かせない」ものです。これがなければ、「何か」の力が「書かせない」というほど、不可欠なものなのです。サイコロは、自分にとって、とても大切なものです。もし、サイコロを振る学問があれば、お勉強してみたいです。サイコロを勉強するのだから、

*サイコロジ

となりそうですが、あいにく、その言葉は「予約済み」＝「満室」状態です。psychology (英) も psychologie (仏) も、ダメということです。

じゃあ、賽学、骰学、采学？ それはそうと、もう、「采(さい)は投げられた」のでしょうか。そうです。今は、ギャンブルをやっているのです。その「さい」ちゅうです。

でも、お金はかけられていません。何をかけているのか。その答えを知るために、かけているのだと言っても、現在の状態を言い表すのに不正確な言い方だとは思いません。

*

話を少し飛ばします。

さきほどの国際政治の話のなかで、インテリジェンスという言葉が出てきました。ちなみに、CIAのIはintelligence ですね。また、ITのIはinformation ですね。今挙げた2つの語は日本語では、

*「情報」

と訳す場合があります。「信号」という観点に立つと、この「符合（※ふごう）」を、「符号（※ふごう）」＝「信号」＝「しるし」として見ることになります。何やら、意味深に思えてきます。

*この符合＝符号は、只事ではない。

という感じです。そもそも、

*符合

とは、割符（※わりふ）（＝「しるし」を2つに割ったもの）の片割れ同士がぴったりと合うことから来ているそうです。要するに、2つのものが

*かみ合う ⇒ からみ合う ⇒ かかわり合う ⇒ くっつき合う ⇒ つながる ⇒ あう

というわけです。

インテリジェンスでもインフォメーションでも、多種多様な「信号」がめくばせし合い、何かを引っ掛ける＝ナンパしようとして、わくわくどきどきや、びくびくびくびくや、ぼけーっとしています。何を期待してめくばせし合っているのか？ これから先へと目を向けて、何を懸けた＝賭けたたうえで、何に懸けて＝賭けているのか？

マラルメ師の気配を感じます。すぐ、そばにいるような気もすれば、遠くで見ている視線を感じているだけのような気もします（オカルトめいてきましたが、本人はそういう感じではないつもりなのですけど）。

IとIとで、相合傘。とはいえ、Iと相と合と会と遭は「あった」としても、愛だけは絶対に「ない」だろうという予感があります。そもそもが、ポル・ポトとホメイニ師との話から始まった記事です。その2人の名のもとに、どれだけ多くの人たちの命が失わ

れたことか。

実に、きな臭く生臭い＝腐臭に満ちた固有名詞ではないでしょうか。両者の間（＝あいだ・あわい）に仏蘭西＝フランスという国名で「符合」があったとしても、それは「不幸」と「不合＝不仕合せ」の別称＝蔑称でしかないのではないのでしょうか。

*

かなりシリアスな問題を、きつとおふざけだと取られそうな文章でつづり、さまざまな「ニュートラルな信号」を散りばめ、その「信号」たちの交し合う「めくばせ＝合図」に目を向けてみたものの、あの人、いや、あの固有名詞が訪れる気配は、まことに頼りなげな「しるし」として「知るし」かない。ここに登場させた、

* 「信号＝符号」たちの「符合」は、仕組まれた「必然」＝necessity＝「必要性」なのか、奇しくも表れた＝現れた＝顕れた、「偶然」＝accident＝「事故」なのか？

それを「知る」ためには、

* 「やらせ」を試みることで、「やらせ」＝「必然と偶然の間（＝あいだ・あわい）」を引き寄せる＝引っ掛ける＝ナンパする。

これしかない。そんな気がします。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「かく・かける（4）」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしく願い申し上げます。】

09.05.16 かく・かける (4)

◆かく・かける (4)

2009-05-16 11:13:27 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「かく・かける (3)」の続きです。】

きのうの記事「かく・かける (2)」で、

* 「かく・かける」のコア・イメージ (=中心となるイメージ) は、「宙ぶらりん」である。

という意味のことを書きました。

あれから、いろいろ考えてみたのですが、自分という一匹のヒトのはしくれが「宙ぶらりん」であるせいか、ヒトあるいは人類という存在自体が「宙ぶらりん」であるように思えてなくなりました。

「わたしは宙ぶらりんなんかではない。まして、人間は宙ぶらりんな存在では決してない」。そんなふうに、憤 (いきどお) りを覚え、お気を悪くされた方には、深くお詫び申し上げます。単なる愚者 or 狂人の戯言だと思って (※思うどころか、実際、そうみたいなのです)、以下の文章をお読みください。

きのうは、

* 「印 (=しるし)」は「物体」ではなく、「視覚的イメージ=像=形」である。

とも書きました。

言い換えると、「ニュートラルな信号」という意味です。

*その「ニュートラルな信号」が、メッセージを担った「合図＝めくばせ」であったり、

*そっくりな仲間たちとともに、あちこちに存在する「トリトメのない記号」であったり、

*それ自身ではない、何かの代わりとして存在する「表象」であったりする。

という話もしました。

たった今、「書きました」「言い換えると」「話もしました」と「述べました」が、実際には、パソコンのキーボードのキーを叩くという形で、「書いている」わけです。

ただし、2009年という時点で、「書く」という作業は、多様な形で存在しています。歴史が苦手な自分は、やたら、「太古」とか、「大昔」とか、あいまいな表現を用いますが、その「太古」や「大昔」にヒトは、おそらく、「引っ掻く」「傷つける」「削る」「彫る」「並べる」「塗る」「貼り付ける」といった工作で用いる作業や動作で、「書く」という「行為」をおこなっていたものと想像できます。それは「描く・かく・えがく」「印す・しるす」と大差なくおこなわれていたものとも、考えられます。

そして、現在では、上で挙げた作業＝動作に加えて、たとえば、キーを

*叩く or 押す

あるいは、液晶画面に

*触る or 押す

という形で「書く」という作業をおこなっています。ある種の障害者向けに、画面に

*目線=視線=まなざしを、向ける=置く=据える

という形で「書く」作業を可能にしている機器があるらしいことも、知りました。また、スピーカーに向かって、

*話す

ことにより、文字を「書く」ことができることは、もう常識になりつつあります。もっと、ほかの形態もあるでしょうが、思いつきません。

*

以上が、現在の「書く」なのです。特に過去 10~20 年間の科学技術の発展は、「書く」と「文字」の形を飛躍的に広げました。これから先も、その範囲はさらに拡大するでしょう。とはいうものの、基本は、

*しるす・しるし

ではないかと思っています。

「しるす・しるし」の語源は、手元の辞書を引いても分かりません。こういう場合、きの

うも書いたように、素人は、素人であるからこそ、かっこうをつけたり、気兼ねをすることなく、

* 「今、ここにある」ものに注目し、手もちの知識と情報で間に合わせる

という方法も取れるわけです。

気取っていえば、クロード・レヴィ=ストロース「印」の「ブリコラージュ」もどき。これって、カーネル・サンダースおじさん手製のフライド・チキンっていうのと、似た響きがありませんか？ ブランド（=商「標」=焼「印」=烙「印」）ぽいという意味です。ちなみに、レヴィ=ストロースという、フランス式の発音を英語風に言えば、リーバイ・ストラウス、つまりリーバイスという商「標」をもつ会社名=創業者名になります。ユダヤ系です。

いずれにせよ、もちろん、ほかの選択肢もありそうですが、身の程をわきまえ、無精者は無精なやり方で楽問します。「正しい vs. 正しくない」ごっこを職業としているわけではないので、「正しくなくていいんだよ」or「正しくなくていいじゃんか」のスタンスでいく、という意味です。

*

で、思ったのですが、辞書で「しるす・しるし」のあたりを見ていたら、「しる・知る・領る・痴る・汁」なんていうものもあって、そのうちの

* 「しる・知る・領る」

に言い知れぬ魅力を感じ、その項を読み耽っているうちに、糟汁（かすじる）を口にしただけで足元がふらつくほどの下戸（げこ）である自分が、その魅力に酔い痴れてしまったのです。あとは推して知るべし。神のみぞ知る。知らぬが仏。Don't be silly. = silly + ass = serious（「なぜ、ケータイが」2009-01-22 からの自己パクリです）というわけで、マジで、

* 「これって、もしかして、つながっているのとかやうか」

と思い込んでしまったのです。

どういふことかと申しますと、辞書によれば、

* かつて、「しる・知る・領る」とは、何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき」と主張する、という意味だった。

ようなのです。

実に欲深くてジコチュー。いかにもヒトらしい。人間らしい。ヒューマン (human) かつヒューメイン (humane)。

この発見＝見解には、少々、不満（「ふまん」）はあるが、犬のフンを「踏まねー」でも済みそうだ。こりゃあ、ウンがいいワイ。ハウ・ラッキー・アイ・アム！＝ワイはなんてウンがいいんや。きっとそうだ。そうにちがいない。間違いない。言えてる。言えすぎ。上杉謙信。お家（うち）はやっぱり杉（すぎ）で建てるといい（※このあたりは、真剣に読んだり、深読みなさらないでください、ただ景気づけをしているだけなのです）。

簡単に申しますと、「ワイ＝私＝わたくし」ならぬ、ワンちゃんやネコちゃんの

* マーキング行動

を思い出したのです。

* おしっこ（しる＝汁）をかける（＝「かける」）

ことで、「ここは、わたしのテリトリー」と主張＝意思表示する。ネコちゃんの場合には、おしっこ（＝「かける」）以外に、あちこち、

* 「引っ掻く」＝「かく」

こともあります。いずれにせよ、「おしっこ」が出てくるくらいだから、辞書に「知る・領る・痴る」といっしょに並べてあった

* 「汁」

も、つなげて、仲間に入れてやっても、罰は当たらないのではないか。そうすると、おやおや、ワラ・コインシデンス＝What a coincidence!＝「何という偶然であろうか!」。駄洒落を通り越して、ばればれのヤラセですね。牽強付会（けんきょうふかい）とも言いますよね。はい。

で、念のために、

* マーク＝ mark

を英和辞典で調べてみたのです。

凶星でした。楽しみは独り占めしたくないので、みなさん、中型以上の辞典で、markを引いて、そのいろいろな意味を斜め読みし、語源の部分にちょっとだけ目を通してみてください。やっぱり、ヒト＝人間様も生き物のはしくれだったのです。文字通り、お里が「知れた」わけです。

*

ヒトは、

*テリトリーを持ちたがるし、いったん持ったと決めたなら、ペペッと唾をつけて、自分のものだという「しるし」をつけておきたい。

どうやら、寡黙なマラルメ師は、そばにいるらしい。そんな気持ちになってまいりました。待った甲斐がありました。国際政治の話（「際」とは「間（＝あいだ・あわい）」のことにほかなりません）で、道草＝無駄話をしながら待った甲斐がありました。

ダムみたいに無駄ではなかったのです。『ゴドーを待ちながら』のように、デジャ・ヴュを伴う繰り返しのめまいを覚えながら「待った＝舞った」甲斐がありました。

そういえば、バイリンガル作家を余儀なくされたサミュエル・ベケットは、『ゴドーを待ちながら』を英仏両語で書いたという噂を思い出しました。Waiting for Godot と En attendant Godot の間（＝あいだ・あわい）には、何があるのでしょうか？

また、本日掲載した「かく・かける (3)」で出てきた（※いや、「出した」というべきでしょう、あれは「やらせ」を引き寄せるための「やらせ」だったのですから）、サイコロジ＝ psychology と、プシコロジ＝ psychologie との間（＝あいだ・あわい）には、何があるのでしょうか？

さらに言うなら、やはり「かく・かける (3)」で出した、information と intelligence の間（＝あいだ・あわい）には、何があるのでしょうか？ ちょっと見てみましょう。

*間（＝あいだ・あわい）I・i・Y・y ⇒ in ⇒ inter ⇒ inform ⇒ information

*間（＝あいだ・あわい）I・i・Y・y ⇒ in ⇒ inter ⇒ intelligent ⇒ intelligence

ちなみに、Y y は、フランス語では「i grec」＝イ・グレックと読み、「ギリシャ風の i」という意味です。「I・i」（フランス語ではほぼ「イ」と発音しますね）と、「Y・y」との間（＝あいだ・あわい）には、間（＝あいだ・あわい）しか存在しません。なぜ、

アルファベットに「イ」が2つ必要なのか、今も不思議です。

日本語の表記で、「い・ゐ・イ・ヰ」「え・ゑ・エ・ヱ」「お・を・オ・ヲ」があるのと、似ていませんか？ アルファベット同様、あいうえお表に今述べた文字のペアがある（ないのが普通ですけど）のは、やはり不思議です。たぶん、お勉強をすれば、その経緯は分かるのですが、勉強嫌いなので、「不思議だな」とどめておきます。

*

それは、さておき、上記の2つの*に連なる「間」に関する「ニュートラルな信号」たちが並ぶ必然性に似たものも、あるいは意味に似たものも、見せ「掛け」にしからずしません。

in は、中学1年生の教科書で出てくる単語です。「.....の中に（で）、間に（で）」という意味になり得ます。その兄弟の inter は international（国「際」的）でおなじみですが、その inter = 「際」も、「.....の中に（で）、間に（で）」という意味になり得ます。

で、inform には「知らせる」という意味がありますね。だから、information には、「お知らせ・ご案内」=「知識」という語義もあります。一方の intelligence は、スパイ活動という意味の「情報=諜報」に加えて、A I = artificial intelligence =人工知能の「知能=知性」という語義もありますね。

以上が、「しる・知る・領る」につながり、マーキングとテリトリーにとにからみ、「かく・引っ掻く・掻く・書く」という係わり合いを見せ、「かく・かける・掛ける」と手をつなぎ、「掛け」にまで来たという次第です。

*

誰かに頼まれたわけでもないのに、わざわざ律儀に、他人様から見れば「とちくるった」=「常軌を逸した」文章を、解説し弁解しているのは、性分でしょうか。ポル・ポトから始まり、国際関係・国際政治についてのくださった話に移り、途中で妙なことを

書き出した、あんな紛らわしい文章は、適当に書き改めるなり、削除するなりして、肝心のところだけを記事にしておけばいいのかもしれませんが。

でも、自分にとっては、あのお待ちする「儀式」の過程こそが大切なのです。削除すると、言霊が怖いという気持ちも、正直申しまして多分にあります。でも、あの文章は、ここまで来るのに絶対に必要なものだったのです。

* 必然なのか、偶然なのか

という、

* 宙ぶらりんな

問題＝状況＝事態を、「かけた・掛けた・懸けた・賭けた・書けた」「欠くこと・書くこと」ができない文章なのです。

問題は深刻です。少なくとも、自分にとってはマジで深刻なのです。その問題＝状況＝事態を、「掛け」＝「賭け」と言葉にしたところで、何の意味もありません。このブログに書かれている言葉たちと、その書き手の「あやうさ」を、万が一（※たぶん、そんなことはないだろう、とは思いますが）、気に「懸けて」いらっしゃる方のために、以上、とりあえず記しておきます。ややこしいと思われた方は、お忘れになってください。

*

さて、ちょっとシリアス（serious）な感じになってしまったので、少々 silly + ass 気味に「軌道修正＝シンコペーション」します。

★あすこそは、「賭ける」について「書ける」といいなあ、と願を「かける」つもりです。マラルメ師のご降臨を、ひたすら待つのみという感じです。

と、きのうの記事の最後に書いただけのことはありました。

実は、きょうの記事を「書く」ことは、「賭け」だったのです。まったくの「でまかせしゅぎじっこうちゅう」だったのです。ちなみに、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」は、かつて短期間やっていたブログタイトルです。日テレの「笑点」的内輪受けギャグになって、申し訳ありません。

で、「書く」と「印す」については、何とか「書けた」のですが、肝心の「賭け・賭ける」について、「書ける」状態にある兆（きざ）し＝「しるし・印・標・徴・験・記し・著し」はありません。さきほど、リーバイスとKFCの話あたりで、ちょこっと出た＝漏れたくらいです。でも、

*必然と偶然について思索＝詩作＝試作を重ねた

マラルメ師がそばにいる気配がする以上、このまま「でまかせしゅぎじっこうちゅう」を続けられれば、

*何とかなる

という気もしないわけではありません。

ですので、書き続けてみます。そこで「賭ける」を辞書で調べていたところ、『掛ける』を見よ』みたいな、素っ気ない記述があり、指示に従ってある項目を読んでみたところ、たいした収穫はありませんでした。

トートロジーというんですか？「AはAだからAなのよ、わかったかしら」みたいな感じで、テキトーにあしらわれてしまいました。でも、テキトーは嫌いじゃないので、イヤな気分になることはありませんでした。むしろ、言葉に関しては、テキトーがトーズンだと、あらためて痛感＝納得しました。

辞書、特に国語辞典って、そういうテキトーな記述が多いですよ。調べたい言葉の

意味の説明というより、調べたい語をちょっとだけ言い換えてあるだけだったり、「〇〇を見よ or 参照」とか書いてあって、馬鹿正直にその「〇〇」を見る or 参照すると、ほぼ同じ言葉が書いてあるだけ。そういう失望を何度か味わうと、辞書なんて、もう引きたくなくなります。ですから、辞書を引きたくない、と言う人たちの気持ちは、よく分かります。

で、「賭ける」については、宙ぶらりんな状態に置かれてしまいました。

むっ、……。

出ました。というか、もよおしてまいりました。マラルメ師の気配を感じます。宙ぶらりん、たとえば、「あれ」ではないか——。さっそく、きのうの記事から「あれ」、つまり大切な部分を自己輸血＝コピペさせてください。

というわけで以下は引用です。

*かかる

という、受動的＝風まかせ的＝なりゆきまかせ的＝身をゆだねる的な、言い方もできません。実際、そんなふうな風に飛ばされて「引越しをする」クモを見たことがあります。個人的には、その受動的なイメージが気に入っています。うん、

*宙ぶらりん

でいきましょう。これが「かく・かける」のコア・イメージです。

以上が引用でした。

そうでした。もう、きのう、ヒントが用意されていたのです。これを必然と呼ぼうと、偶然と呼ぼうと、やらせ=出来レースと呼ぼうと、どうでもいいことです。肝心なのは、

*「賭ける」とは「宙ぶらりん」である。

だけです。

ちょっと想像力を働かせてみましょう。あるいは、実際に、洗濯ロープか何かを、高いところにある釘のようなものに引っ掛ける。いや、これだと首吊りを連想させてヤバいので、やめましょう。それより、単に、椅子に腰かけて、椅子の脚を部分的に浮かせてみてもいいでしょう。宙ぶらりん状態か、それに近い状態を作るのです。

今、PCのそばで立ち上がって、一本足で立ってみても、

*ほぼ宙ぶらりん状態

を体験できます。できれば、つま先で立ちましょう。

*おっとっと。危ない。あやうい。やばい。やべー。マジヤベ。たよりない。よるべない。馬鹿みたい。あほちゃうか。こんなんでいいのかい？ 助けてくれー！

それが、「賭ける」なのです。というより、むしろ、

*「賭ける」の原点=原風景

なのです。

体感できましたでしょうか？ 何となくからだで感じれば、それでいいのです。理屈な

んで、いざとなったら、役に立ちません。特に、「賭ける」においては、理屈は無力です。イ・ビョンホン主演の「オールイン」を見ていて、そう感じました（※あのドラマのビョンホン、かっこよかったです）。何しろ、

*半端じゃなく強い「何か」から垂れ下がった糸に、しがみ付いて＝引っ掛かっての「宙ぶらりん」

なのですから。

以上が原点＝スタートライン＝「位置について、よーい、ドン」です。「何だ、そんなことだったのか」とお思いになっている方々も、いらっしゃるにちがいません。でも、「そんなこと」で済ませられる問題ではありません。

この先、

*何に何をかけるか

は、あなた次第です。このあとが大切なのです。「何に何をかけるか」は、あくまでも個人の問題です。しかも、大問題です。ただし、原点だけは同じです。

*「宙ぶらりん」が原点だ

ということです。ヒトも、ヒト以外の生き物たちすべてにとっても、原点だけは同じです。

ところで、ひょっとして、まだ、つま立ちしているあなた、ひっくり返らないように気をつけてください。

09.05.17 かく・かける (5)

◆かく・かける (5)

2009-05-17 10:47:18 | 言葉

英語やフランス語が、26の表音文字で表記されている、と考えると不思議な気持ちになります。たったこれだけで、あれだけのことが書けるのか、という不思議さです。日本語が、漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字で表記されているのも、摩訶不思議です。日々、体験しているはずなのに、よく考えるとどうなっているのか、さっぱり分からない。

前者も後者も、言葉や理屈では分かった気になっても、それでは分かったと言えない、という感じがします。たとえば、英語やフランス語を母語とする人たちが、漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字で表記される日本語を想像するのは、至難の業（わざ）だと思います。

その逆の場合も、そうでしょう。実際に、ある水準まで習得しないかぎり、「分かる」に近い感触を得るのは難しいのではないのでしょうか。その「分かる」にも、いろいろなレベル＝段階、あるいは側面があると考えられます。

*

複雑な文字変換を、PCという機械とワープロソフトという仕組みに代用してもらいながら、今、この記事を書いている自分の場合でも、

*漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字で表記される日本語

とは、どういうものなのかと問われると、言葉に詰まってしまいます。

どう説明したらいいのか、見当もつきません。日本語をぜんぜん知らない人に、分かるように説明する自信がない、という意味です。ところで、日本語は、どれくらいの数の人たちによって使われているのでしょうか？

「使う」という広い言葉を用いると、いろいろなケースが想定されます。「読み、書き、話す」という動作＝行動で分けてみると、その3種類の動作＝行動がすべてできる人もいれば、事情があって2種類だけ、または1種類だけという人もいるでしょう。

また、母語か、母語ではない、という分け方も可能です。バイリンガルや、トライリンガルや、それ以上の言語を、ほぼ同等に使える人たちも実際にいます。逆に、複数の言語のどれもが満足に使えない人もいます（※ちなみに、これは深刻な問題です）。

*

いつもの悪い癖で、話が広がりすぎました。話題を絞ります。ぎゅっとしぼって、きょうは「書く」こと、そのなかでも韻文＝定型詩を書くことに話を限定します。マラルメというフランスの詩人の

* 詩作＝思索＝試作

について、考えていることを書きたい思いがありますが、まだ煮詰まっていません。26の表音文字を用いて、さまざまな規則に沿って詩を書くという、英詩やフランスの詩について不案内である。これが最大の問題点なのですが、別にヨーロッパの言語の詩について専門的な研究をするつもりも能力もぜんぜんないわけで、

* ある制約のもとに何かについて書く

という行為のメカニズムを探ってみたいという、強い好奇心があるだけなのです。そのメカニズムについて深く考えをめぐらしたらしい、マラルメという人というより、

* マラルメという固有名詞＝言葉＝信号を、媒介＝シャーマン＝巫女（みこ）として、自分のあたまとからだという磁場において、匿名的な言葉＝ニュートラルな信号と戯れてみたい。

と願っているのです。困難な作業であるという強い予感があります。でも、やってみたいです。以前から、気になって仕方がないからです。

この作業に近いことは、「カジノ人間主義」2009-01-30 で、1度試みました。記事のタイトルから想像がつくかもしれませんが、そこでも「賭ける」＝ギャンブルと「書ける・書く」という言葉が、重要な役割を果たしました。必然と偶然についても触れています。

あの問題を、もっと深く掘り下げてみたいです。でも、まだ、煮詰まっていません。というより、まだ、機が熟していないというか、マラルメというシャーマンが近くに感じられないのです。オカルトめいた言い方になりましたが、そんな感じです。

きのうは、一時的ですが近くに、その気配を感じました。この「かく・かける」シリーズでは、きのう、「書ける・賭ける」について、ちょっとややこしい記事を2本続けて書きました。お読みになった方は、そのダジャレ＝こじつけの多さにうんざりなされたことでしょうか。申し訳ありません。

あのようになら、あのテーマを書く方法を思いつかなかったのです。その結果「書けた」＝「賭けた」のが、きのうの記事です。書いた後は、ぐったりしていました。

*

きょうは、日本における韻文＝「定型詩・短歌・俳句」に話を限定しようと思います。きのう書いたことを、日本の韻文に当てはめて、なるべく具体的に、分かりやすく書こうと努力しますので、どうかお付き合いをお願いします。きのうは、話を広げすぎたと反省しています。そこで話を絞ろうとしているのですが、

* 詩作＝思索＝試作

という点では、日本語とフランス語との違いを超えて、共通する部分について考えることもできそうな気がします。

というわけで、韻文です。韻文の反対は、散文と呼ばれていますね。あまり使われていない言葉です。散文とは、要するに普通の文。たとえば、このブログの記事も、散文のはしくれです。

一方の、韻文とは、さきほど述べたように、「定型詩・短歌・俳句」を指します。まず、短い俳句なんかを例にとれば、分かりやすいのではないかと思います。俳句にも、流派みたいなものがあり、比較的自由なものもあれば、厳密さを要するものもあります。ここでは、

* 5・7・5の音＝音節（＝拍＝モーラ）から成る短い詩

くらいのゆるやかな定義をし、季語、切れなどは考慮に入れないことにします。これだけでも、立派な定型です。定型とは、約束事＝規則＝「おきて」＝ルールです。

* 規則とは、自由ではない

という意味にも取れます。「何でもあり」の定型詩なんて、あるわけがありません。

* 規則で縛ることにより、ある種の緊張感と規律を保ち、同時に余韻や響きを持たせる

わけです。

*

ここで、きのうまでの記事で盛んに用いていた言葉を持ち出します。

*宙ぶらりん

です。

*「ち・ゆ・う・ぶ・ら・り・ん」

かろうじて7音になりそうですが、そうではなく、次のような細かい規則があります。

「ちゃ・ちゆ・ちょ」といった拗音（ようおん）は、それで1音と数え、「はっば」の「はっ」といった促音（そくおん）は2音、つまり「はっば」は3音と数える。また、「ノート」であれば、長音の「ー」は1音と数えますから、全部で3音となり、「ん」という撥音（はつおん）も1音に数えるらしいです。

こういう音節の扱いは、「モーラ」というそうです。これで、だいたいのところは網羅（もうら）されたと思います。以上は、まさに規則です。したがって、

*「ちゆ・う・ぶ・ら・り・ん」（6音）

宙ぶらりんが、1音足りずに宙ぶらりんになってしまいますが、「てにをは」を付ければ、「宙ぶらりん」も俳句のなかで何とか詠めそうです。一句浮かびました。

*マラルメとちゅうぶらりんでがちんこか

という具合です。なんのこっちゃ？ とても、読めたものじゃありませんけど、とにかく詠めました。

*

こうやって、ある規則のもとに、言葉を組み合わせて、意味のあるフレーズを作っていく作業が定型詩＝韻文なわけです。この作業＝動作＝身ぶり＝運動を見たり、実際に体験してみると、

*偶然

というものに支配されている自分を感じます。偶然とは、

*必然

と対を成して使われることが多い言葉です。

*偶然性・必然性

と手を加えると、また違った趣（おもむき）を感じませんか？ 個人的な感想を申し上げますと、ちょっと、気取ったような感じがします。こういう細部が、言葉では大切です。特に、俳句のような短い詩では、1音、あるいは1語を変えたり、ずらしたりすることで、趣ががらりと変わることがよくありますね。

*偶然性と必然性とに支えられて、匿名的であるはずの言葉の、意味と無意味とが立ち現れる。

さて、たった今、上のセンテンスを書きましたが、実は、いわば

*「でまかせ」

で言葉をつづりました。「でまかせ」というと「テキトー」「いい加減」「でたらめ」「たわごと」「支離滅裂」「めちゃくちゃ」などの親戚ですから、響きは悪いです。ネガティブなイメージがある言葉です。

でも、正直申しまして、自分が他人様に対し、何かを「話す」なり「書く」さいには、多分に「でまかせ」で話し書いていますと、ここで白状いたします。「でまかせ」とは、文字通り、

*「出るに任せる」

ことです。自分は「でまかせ」を悪い意味で取ってはいません。この言葉を使うことに抵抗は感じません。ただ、他人様には聞こえが悪いだろうな、という気持ちはあります。両義的＝アンビバレントな感情というやつです。ここまで、話したので、さらに白状いたしますと、特に自分が書く場合には、「でまかせ」に「こじつけ」が加わります。その結果として、

*ダジャレ＝オヤジギャグだらけの文章

をよく書くことになります。

ダジャレはアートであり、芸（＝げい・ゲイ）であるとさえ、思うことがあります。マジです。ゲイ・サイエンス＝楽問＝「楽しいお勉強ごっこ」があるなら、

*ゲイ・アート＝楽術＝「楽しい言葉の曲芸（＝アクロバット）」

があってもいいのではないかと、考えたこともあります。

でも、しょせん、ダジャレは駄洒落です。とはいえ、ものは言いようでして、

* 比喻を多用した文体

と書けば、いくぶん響きがよくなります。かつてジャズが好きな時期がありました。ジャズのどこがいいのかというと、

* 即興性＝アドリブ

です。

これも、広義の「でまかせ」「こじつけ」だと信じています。何か、こうしたものに惹かれるのは、「体系的・論理的・終始一貫・筋道を立てる」ということが大の苦手で「直観・直感・飛躍・勘」に頼って、考えるというか、思うというか、空想するというか、妄想するタイプだからかもしれません。

このブログを読んでいる方は、それを実感なさっていることと存じます。お恥ずかしい限りです。

で、俳句ですが、これは、「でまかせ」と「こじつけ」にはぴったりの韻文＝定型詩ではないかと思うのです。なぜかと申しますと、俳句について調べていて、その起源が、

* 連歌（れんが）

および

* 俳諧（はいかい）

というものらしいと知ったからです。連歌と俳諧について調べていて、感じたのは、

* 連歌と俳諧は、テキトー＝でまかせ＝こじつけ＝いかがわしい＝わけわかんない＝ふ

かかい＝みだら、だった。

らしいということです。なにしろ、かつて、

*連歌は、「付合（つけあい）」＝「ほぼくっつけ合い」と称して、5・7・5や7・7を用いての、複数人物による乱行＝乱交＝オージー、および夜這い＝野合であった（俳句のように、言葉を相手に、「宙ぶらりん」のヒト1人で「くっつけ合い」をするのも大変なのに、複数でやるなんて、すごすぎます）。

また、

*俳諧は、5・7・5・7・7の和歌の形式を用いた、おふざけ＝お笑い＝ジョーダン＝ジャスト・ジョーク＝「えへへ」＝「うふふ」＝「くすくす」＝「あら、いやだあ」＝「何だ、これ？」＝「ん？」であった（※ここに、俳句に感じられる、シュール＝不条理＝ナンセンス＝ノンセンスの萌芽があるのかもしれませんが）。

らしいのです。そう勝手に感じただけですので、あくまでも「らしい」としておきます。「らしい」にしても、それを知って嬉しかったです。さらに嬉しかったのは、きのうの「かく・かける（3）」2009-05-16で、マラルメ師を待つまでに、うじうじぐずぐずしていたときに「でまかせで出てきた」＝「やらせで出した」、

*この符合＝符号は、只事ではない。

と、

*「信号＝符号」たちの「符合」は、仕組まれた「必然」＝necessity＝「必要性」なのか、奇しくも表れた＝現れた＝顕れた、「偶然」＝accident＝「事故」なのか？

というフレーズを、ついさきほどぼんやりと読み返していて、そのなかにあった「符合」という言葉を目にしてデジャ・ヴュを覚え、ありや、

* 「符合（※ふごう）」と「付合（※つけあい）」は、激似である。

と感じたことです。こうなると、

* この符合（※ふごう）＝符号（※ふごう）＝付合（※つけあい）は、只事ではない。

と言うしかありません。やっぱり、マラルメ師が見守っていてくれるにちがいありません。

*

少々、うろたえています。きょうは、これから家事と親の介護をしながら、この

* 符合（ふごう）＝符号（ふごう）＝付合（つけあい）

について、しばらく考えてみます。あすは、このあたりの不思議さについて、「不思議さを解明しよう」などという気持ちも意気込みも毛ほどもありませんが、いちおう、「こんなふうにならざる不思議です」という感じで、不思議さを整理してみる予定です。

なお、素人が、本当のことを知ろうともせず、玄人の苦勞を反故にするような形で、俳句や連歌について書きなぐりましたことに対し、玄人およびほぼ玄人、並びに、この道の通を自任なさっている方々にお詫び申し上げます。

事実誤認のご指摘は、馬の耳に念仏、いや、蛙の面に小便で、もったいなく存じますので、ご辞退申し上げます。このブログは、正しい、正しくないごっことは無縁でございます。

ないないに ないものねだる ないないばあ

失礼いたしました。

09.05.18 かく・かける (6)

◆かく・かける (6)

2009-05-18 08:35:13 | 言葉

「いないいないばあ」という、赤ちゃんを対象にした遊びがあります。ヨーロッパにも、あるらしく、フロイトも、fort / da というドイツ語の、この遊びに注目しました。fort (あっち=あれえ！？ =去って=いない) / da (ここに=ほら！ =いる=ばあ)、という感じでしょうか。本で読んだ覚えはありますが、フロイトがどういうふうに考えていたのかは、忘れました。個人的には、フロイトが、あの遊びに注目したということを知っただけで十分でした。

パリ・フロイト派だの、フロイトの大義派だのという「言葉=レッテル=ラベル=レーベル」がまつわりついている、ジャック・ラカンが考えていたことには、とても興味がありますが、ラカンは、ジャック・デリダ同様に「ダジャレ」=「比喩の多用」の名人=迷人ですから、フランス語から日本語に翻訳するのは無理でしょう。良心的で丁寧な解説書を読んだほうが、ましだと思っていますが、現在では、あいにくその方面に疎くて、解説書にもめぐりあっていません。

とはいえ、

「いないいないばあ」は、「いないない／ばあ」と分けることができそうです。すると、

* 「いないない／ばあ」 = 「□／■」 = 「0／1」 = 「無意味／有意味」 = 「偶然性／必然性」 = 「不条理／条理」 = 「無／有」 = 「ノンセンス (ナンセンス) / センス」 = 「志

向 or 指向／無方向」……

といった2項対立を連想してしまいます。

2項対立は、すっきりしすぎていて＝きれいすぎて＝話ができすぎていて、実に、あやしい＝いかがわしい＝うたがわしい＝うさんくさい感じがします。えっ？「うさんくさいのは、おまえだろう」ですか？確かにそうだと思います。返す言葉がありませんので、話を変えます。

*

と言いながら、似たような話を続けますが、きのうは、

*符合＝符号＝付合

という、個人的には只事ではない＝話ができすぎている＝うさんくさい事態に遭遇しまして、うろたえてしまい、記事を書いたのちにも、トリトメのないことをいろいろ考えていました。そこで、きょうは、きのうテーマにすることになっていて、中途半端な扱いで終わってしまった、

*俳句

について、ふたたび考えてみます。

5・7・5という音（＝音節＝モーラ）という枠＝規則＝約束事に当てはまるように、いくつあるかも知れない日本語の言葉たちを組み合わせる。簡略化すると、俳句とはそういう「遊び」＝gameです。gameとgambleが語源的に関係あるとかいう、あやしい話をあやしいなりに、とりあえず受けとめてみるのも、面白そうです。これを日本語に「かけて」とみると、

*遊び・遊ぶ=賭け・賭ける=書け・書く=掛け・掛ける

という感じになります。

ここで、これまでブログ上でいろいろな言葉たちと戯れた結果として生じた「痕跡=引っ掻いた跡=引っ掻き傷」を、整理してみたくなりました。現在は、コピーペーストという、とても便利で有り難い方法があります。さっそく、そのコピペを駆使して、これまで書いた複数の記事をもとに「考えるためのヒント=カンニングペーパーもどき」の図というか、リストを作ってみます。

一部、いや、多くの方々にとっては、うんざりするようなものになりそうなので、ざあーっと、斜め読みするだけで結構ですので、お目をお通しください。

A：森羅万象である、「表象」たち or 「トリトメのない記号=まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちの「間 (=ま・あいだ・あわい)」

「ま・魔・間」

「中・宙・柱・仲・躊・紐」

「うつお・空・殻」

「さい・際・賽・采」

「さい・さいころ・賽子・骰子」

「偶然・偶然性」

「魔界・空間・時空」

「無意味・不条理・無」

↓

B : 「しるし・印・標・徴・験・記し・著し」

「しる・知る・領る・痴る・汁」

「しるす・印す・標す・記す・誌す・認す」

「マーキング・おしっこをかける・唾をつける」

「しるべ・標・導・知方」

「知・知覚・認識」

「想像界・幻想」

↓

C : 「わかる・分かる・別る・解る・判る」

「分・分別・分解・分離・分析・分類・部分・身分・分際・区分・分割・分配・分譲・分担」

「別・特別・格別・別格・区別・判別・大別・差別・千差万別・識別・鑑別・別個・別記・個別」

「解・解体・分解・解剖・和解・溶解・融解・解放・解禁・解散・解消・解除・解決・理解・誤解・難解・不可解・氷解・解明・読解・明解・詳解・図解・解釈・見解・解説・解析・解答」

「判・判断・判別・判定・判明・判読・判決・裁判・審判・・批判・談判・評判・判子・血判」

↓

D : 「かく・書く・描く・画く・掻く・欠く・掛く・懸く・繫く・構く・昇く・駆く」

「かける・掛ける・架ける・懸ける・賭ける・駆ける・駈ける・翔る」

「かかる・掛かる・懸かる・繫かる・架かる・權る・輝る」

「かかり・係り・掛かり合う・掛り・繫り・懸り」

「かかわる・関わる・係わる・拘る」

「書・賭・掛・懸・搔」

↓

E : 「テリトリー・縄張り・領土・地所・辞書・お山の大将的気持」

「地・自・字・辞・事・路」

「場・縄・壤・城・畳・杖・定・条・帖」

↓

F : 「表象・代理・代行」

「かわる・変わる（※変る）・代わる（※代る）・替わる（※替る）・換わる（※換る）」

「変・変化・不変・変革・変容・変移・変質・変調・変転・変貌・豹変・激変・劇変・臨機応
変・変装・変相・変速・変性・変成・変節・変心・変身・変遷・変更・変異・異変・凶変・
地変・事変・政変・変幻・変種・変則・変体・変態・大変・変乱・変事・変換・変動」

「代・代理・交代・身代わり・代人・名代・代表・代行・総代・代官・代議士・代用・代
書・代筆・代々・世代・時代・歴代・代償・身代・代金」

「替・交替・替え玉・身替わり・引き替え・引替え・引替・取り替え・取替え・取替・組
み替え・組替え・組替・入れ替え・入替え・入替・言い替え・言替え・借り替え・借り替
え・着替え・差し替え・差替え・替え歌・替歌・両替・為替・鞍替え・鞍替・付け替え・
付替え・クラス替え・商売替え・国替え・国替・組織替え・吹き替え・吹替え・振り替
え・振替え・振替」

「換・交換・換え玉・引き換え・引換え・引換・取り換え・取換え・取換・組み換え・組換え・組換・入れ換え・入換え・入換・言い換え・言換え・借り換え・借換え・借換・着換え・差し換え・差換え・置き換え・置換え・変換・転換・換気・乗り換え・乗換え・乗換・換言・換金・兌換・換算」

↓

G:「あう・合う・会う・逢う・遭う・遇う・和う・壺う・敢う・饗う・あうん・阿吽=阿伝・「あ・うん」・ああ・嗚呼・噫・あわれむ・哀れむ・憐れむ・憫れむ・あわれ・ものあわれ・あい・愛」

「あい・愛・会い・合い・遭い・逢い・遇い・間（※あい）・相・哀」

「愛し合う・合鍵・合印・合札・合図・相図・合言葉・合間・合いの手・間の手・合気道・合口がいい・隣り合わせ・意味合い・色合い・兼ね合い・筋合い・組み合わせ・知り合い・付き合い・絡み合い・立会い・立ち会い・立会・御立会い・立ち合い・折り合い・兼ね合い・張り合い・手合い・肌合い・釣り合い・お見合い・寄り合い・間合い・気合・具合・度合い・歩合・地合い・地合・谷あい・山間・山あい・幕間・幕あい・合い方・合口（※あいくち）・ヒ首・逢引・合挽き・相挽き・合びき・出来合い・果し合い・試合・泥仕合・合鴨・間鴨」

「相對（※あいたい）・相容れない・相呼応して・相携えて・相変わらず・相異なる・相通じる・相打ち・相客・相部屋・相性・合性・相棒・相方・相次ぐ・相づち・相槌・相手・相半ばする・相まって・相乗り・合い乗り・相合傘・相々傘・相打ち・相撃ち・相討ち・愛相・愛想」

「気が合う・通じ合う・話が合う・意見が合う・合口がいい・道理に合う・理屈に合う・落ち合う・巡り合う・折れ合う・話し合う・付き合う・取り合う・計算が合う・間に合う・向かい合う・目と目が合う・張り合う」

「行き会う・行き合う・出会う・出合う・席に立ち会う・死に目に会う」

「災難に遭う・事故に遭う・ひどい目に遭う・盗難に遭う・反対に遭う・反撃に遭う・にわか雨に遭う・地震に遭う・返り討ちに遭う」

「和える・あえる・和え物・あえ物・ごま和え・ごまあえ」

「哀れむ・憐れむ・哀れ・憐れ・物の哀れ・哀れみ・憐れみ・憫れみ」

「間狂言（※あいきょうげん）・間柄・山間・山あい・谷間・谷あい・この間・間の子・合
いの子弁当・合服・間服・間の手・合の手・相の手」

「あいさつ・挨拶・相俟って・敢えて・敢えず・愛する・愛し合う」

「合・会・遭・和・間・相・愛・哀・憐」

「合・合弁・合札・合成・合同・合図・合体・合判・合併・合点・合奏・合流・合致・合
唱・合理・合掌・合意・合鍵・合議・化合・付合・会合・投合・併合・和合・架合（※か
かりあい）・配合・混合・接合・符合・符号・組合・頃合・都合・場合・集合・統合・複
合・総合・適合・調合・請合（※うけあい）・暗合・暗号・話合（※はなしあい）・縫合・
融合・顔合（※かおあわせ）・意気投合」

「会・会心・会合・会同・会見・会席・会悟・会得・会釈・会話・会談・再会・社会・参
会・協会・面会・宴会・都会・密会・集会・照会」

「遭・遭遇・遭逢・遭難」

「和・和平・和合・和気・和気藹々・和声・和睦・和解・和親・和韻・和議・不和・日和・
日和見・中和・付和・付和雷同・平和・共和・協和・柔和・唱和・穩和・溫和・調和・緩
和・融和・講和」

「間・間人・間者・間使・間諜・間接・間道・間隙・間疎・間隔・間歇・間欠・人間・山
間（※さんかん・やまあい）・仏間・広間・合間・中間・手間・世間・谷間（たにま・た
にあい）・林間・雨間・空間・夜間・昼間・峡間（※きょうかん・はざま）・期間・時間・
晴間・雲間・幕間・瞬間・隙間」

「相・相互・相生・相同・相当・相好・相似・相応・相伴・相对・相乗・相思・相克・相
殺・相術・相場・相棒・相違・相統・相聞・相貌・相談・相撲・人相・悪相・形相・手相・
世相・皮相・死相・色相・面相・骨相・家相・実相・真相・様相・滅相・瑞相」

「愛・愛人・愛好・愛用・愛惜・愛情・愛欲・愛着・愛想・愛憎・愛撫・愛護・仁愛・友
愛・恋愛・情愛・偏愛・割愛・最愛・博愛・溺愛・慈愛・熱愛・親愛・寵愛・同性愛・異
性愛・父性愛・母性愛」

「哀・哀心・哀史・哀哭・哀情・哀惜・哀悼・哀愁・哀歌・哀憫・哀憐・哀願・悲哀」

「憐・憐情・憐憫・可憐・哀憐」

↓

H：「理・必然性・法・業・因果・意味・条理・有意味・有・在」＝森羅万象の一部として、「表象」たち or 「トリトメのない記号＝まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちになり得る

↓

(A)

じっと見てはいけませんよ。目に悪いです。特に、PCのモニターで見ていると、目が、しょぼしょぼします。軽いめまいも覚えます。実のところ、たった今、目薬をさしました。

最初のAグループと、最後のHグループを見るだけでも、十分かと思います。上の図をみていると、不思議です。はあーっとため息が出ます。自分で書いておいて、ため息をついているなんて、馬鹿な話ですけど、とにかく不思議なのです。

以前から、不思議だと思っていたことを、こうやって「チャート化＝見える化」してみると、とりあえず、不思議さが整理されますが、整理されたところで、不思議であることは変わりません。

*

俳句に話をもどしましょう。俳句を詠む場合、まず、Aグループ状態になります。空（※くう）に目を向ける。ぼけーっとする。宙ぶらりんである自分という存在を、ぼんやりと意識する。そんな状態です。ただし、ただの「ぼけーっ」ではなく、空（※くう）＝あるもの＝俳句にする対象物に、めくばせをしている＝視線を送っている＝ナンパをしようとしている。わくわくどきどきもするでしょう。そして、

* (中略) = ややこしいことは抜き

として、Hに話を飛ばします。5・7・5という定型詩が出来上がる。めでたしめでたし、というわけです。しかし、個人的には、ここで、ぜひとも強調したいことがあります。

* 作成された=詠まれた、5・7・5という定型詩=俳句は、現に物質としての言葉の連なり (= 森羅万象の一部) として存在し、俳句の規則という理にかなった有意味なものであるかのように装っているが、同時に、無意味で匿名的な言葉の連なりとして、規則などとは無関係に、中身のない殻=空 (※うつお・くう) を装って立ち現れてもいる。

という考え方です。

もちろん、個人的な意見にしかすぎません。ほかにも、これと似たような考えをした、あるいはしている、人たちの気配は感じます。でも、気配なだけで、会ったことも、言葉を交わしたこともありません。自分は交際がきわめて薄いです。とはいうものの、そういう人たちと、

* めくばせを交し合ったとか、目と目が合ったとか、すれ違いさまに、わくわくどきどきしている様子を感じ合ったという強い実感と記憶

があります。

否定しがたく、あります。書物やメディアやネットを通じての、抽象的なレベルでの具体的な話です。

さきほどの、*「作成された=詠まれた……」で始まる文章について、あれはHからAへと逆戻りしたという意味か？ と問われれば、たぶん、そうとも言えると思います、と答えます。でも、「逆戻り」にネガティブな響きを持たせるといふなら、そうではないと、きっぱり否定します。

よく考えてみてください。みなさんは、俳句を詠む場合、まずどうなさいますか？ 今まで俳句を詠んだことのない人が、俳句を詠もうとすると、5・7・5という規則だけをあたまに入れて、いきなり、森羅万象に目を向けるなんてことをするのでしょうか？ そのまえに、既存の俳句を読むだろうと思います。

*俳句は、いきなり詠むのではなく、まず読む。

のです。

*

和歌であっても、漢詩であっても、ヨーロッパの言語の定型詩でも、状況は同じだと思います。さらに言うなら、韻文だけでなく散文でも同じことが言えるような気がします。たとえば、基本的に何を書いてもいい、

*小説は、小説を読んでから書ける（＝掛ける＝賭ける）。

のです。

話を一気に飛躍させますが、ヒトの赤ちゃんは、いきなり言葉をしゃべりません。

*赤ん坊は、話し言葉を聞いてから話すようになる。

のです。

広い意味での「引用」という現象だとか、オリジナリティの不在＝否定の問題だ、とも考えられるでしょう。ただ、今挙げた、俳句、和歌、ヨーロッパの言語の定型詩、散文、小説、ヒトの話し言葉に、おそらく共通して言えるのは、さきほど、上で、Aグルー

プからHグループに話を、性急に移し、簡略化して説明したさいに、

* (中略) = ややこしいことは抜き

とした部分、つまり、

* B→C→D→E→F—G

において、かなり込み入った状況が展開されているだろう、ということです。でも、ここではその問題には、触れないでおきましょう。まずは、大まかな話をしておきましょう。そのほうが、結果的に、こちらでも説明しやすいですし、みなさんにも分かりやすいと思います。

*

ここで、少し道草をしませんか。

吉田戦車という漫画家の作品をご覧になったことがありますか？ 個人的には、ちょっとだけ好きです。数ページ読むだけで、もう十分だと言えば、ファンの方々に叱られそうですが、そんな感じです。

昔、不条理演劇というお芝居が流行りました。きのうの「かく・かける (4)」2009-05-16で触れたサミュエル・ベケットのほかには、ウジェーヌ・イヨネスコ、そして去年の暮れに亡くなった、ハロルド・ピンターという固有名詞があたまに浮かびます。

正直な感想を申しますと、「わけのわかんない」お芝居です。その意味では、このブログに似ていると言えそうです。いや、ベケットさんたちに失礼ですので、前言撤回します。ただ、言霊が怖いので、削除はしませんけど.....。

で、その不条理演劇ですが、そうですねー、5分から10分見て途中で帰るだけで、自

分には十分です。その意味では、自分にとっての能や歌舞伎に似ています。愛好者の方、こんな暴言＝妄言を書いて、ごめんなさい。根がアホなのです。野暮で無粋なのです。許してください。

無粋な自分には、松鶴家千とせ（＝しょかくや・ちとせ）師匠の「わかるかなー、わかんねえだろうな、イエーイ」のほうが合っていて、昔、テレビで食い入るように見ていました。

以上挙げたような漫画やお芝居や漫談を、よく「シュール」だとか言いますね。シュールレアリズム（＝非現実的でわけがわからない）の略らしいです。同じような趣の作品や芸を、「不条理」「ナンセンス＝ノンセンス」とも言う人がいます。「不条理」は、欧米で「不条理演劇」とか「不条理文学」と呼ばれるものが流行したときに、「absurd」（英語）「absurde」（仏語）経由で、古くから日本語にあった言葉が光を浴びた、という経緯がみとめられます。

で、個人的に注目したいのが、

*ナンセンス＝ノンセンス＝ nonsense

です。このナンセンス＝ノンセンス関連の本として、かつて、高山宏氏から、高橋康也氏の『エクスタシーの系譜』『サミュエル・ベケット』、そして、種村季弘氏の『ナンセンス詩人の肖像』を名著だから、と言って薦められて買い求めました。でも、残念ながら、ピンときませんでした。

ただ、ナンセンス＝ノンセンスとは、関係ありませんが、やはり高山宏氏経由で知った本で、種村季弘氏が矢川澄子氏と共訳した、グスタフ・ルネ・ホッケ著の『迷宮としての世界』は、すごく面白かったです。種村季弘氏が単独で訳した、ハンス・H・ホーフシュテッター著『象徴主義と世紀末芸術』と、グスタフ・ルネ・ホッケ著『文学におけるマニエリスム』も、刺激的でした。

*

話を、「ナンセンス＝ノンセンス＝ nonsense」にもどします。なぜ、ナンセンスだけでなく、ノンセンスにこだわって表記したのかと申しますと、sense という英語の言葉に思い入れがあるからです。「オバマさんとノッチさん」2009-01-28 で、sense の中心となるイメージ（＝コア・イメージ）や、この単語の多義性＝多層性について調べた結果を書きましたので、ご興味のある方は、ご一読ください。

そこでも、少しだけ触れましたが、sense には「意味 vs. 無意味」というさいの「意味」のほかに、「正気」＝「本気」＝「常識」＝「まとも」といった系列の語義があり、さらに「方向」＝「方角」＝「指向性」＝「志向」という「向き」を表す一連の意味があります。

そのうちの最後に挙げた意味に注目したいのです。つまり、

* nonsense には、無意味＝常軌を逸した＝「ん？」＝「わけがわからない」＝「変だ」＝「たがが外れている」＝「ほぼエラー・不具合・故障」に加えて、「無方向」＝「行き場を失った」＝「行き先がわからない」＝「よるべない」＝「千鳥足状態」＝「ふらふら・ぶらぶら」＝「宙ぶらりん」という「意味」（※無意味に意味があるという「ん？」）がある。

あるいは、計算式を立てるなら、

* 無意味 - 意味 = 無 = m = n n = ん? ん?

ということです。さきほどのチャートのAを感じるのです。その意味で、俳句とナンセンスとは、自分のなかでは重なり合い＝絡み合い＝係り合います。

* 行き場を失った「信号」たちが、空しくめぐりばせを繰り返している

さまが、目に浮かぶのです。まるで、

* 切れかけた電灯が明滅している

ようにも思えます。

だから、「おかしい=変だ=ほぼエラー=ほぼ故障中」であると同時に、「空しい=どこかはない」のです。これがヒトのはしくれである自分が、「ニュートラルな信号」=匿名的な言葉」に感傷的なまなざしを送っているだけだということは、承知しています。でも、そう感じてしまうのです。ヒトである以上、致しかたない=当然=自然です。

*

さて、俳句に話をもどします。俳句の魅力の1つは、このノンセンスだと思っています。たとえば、例の、

古池や蛙飛びこむ水の音

なんか、シュールで、不条理で、ナンセンスで、ノンセンスに感じられませんか？ もしも、松尾芭蕉の句だという知識がなかったら、「すごい」とか、「すばらしい」とか、「これは名句」だとか、おっしゃる自信はありますか？

それとも、芭蕉作であろうと、爆笑問題作であろうと、松尾伴内（※まつお・ばんない）作であろうと、そんなの「かんげーねー」「知ったことか」「俳句なんて、どーでもいい」とお思いですか？

突然=唐突ですが、今、こういうお話をしていて、

*意味と無意味、必然性と偶然性の「間（=ま・あいだ・あわい）」

の気配を感じませんか？

.....。

ですよね。やっぱりね。Alone again naturally ♪

09.05.19 かく・かける (7)

◆かく・かける (7)

2009-05-19 09:25:38 | 言葉

ブルガリというブランドがありますね。BVLGARIと表記されますが、どうしてだろう、と思われる方がいらっしゃっても不思議はありません。米国の玩具量販店「トイザラス」のロゴ「TOYS R US」も、遊び心があって面白いです。

日本のブランドや商品名でも、風変わりな表記を使ったものがあります。アンフィニという自動車のシリーズ名みたいなものがありますが、以前は英和辞典なんかで見かける、発音記号もどきの表記が用いられていた記憶があります。ちょっと話はちがいますが、「あ」に濁点「ㇰ」をつけるなんて表記も、最近、頻繁に目にします。

今、挙げた例は、それぞれ性格が違いますが、「変わっている」とか「人目を引く」という点では似た働きがあります。日本語の変わった表記については、個人的には「大賛成」派です。一方で、新語や、言葉遣い、表記に限らず、異形(いぎょう)＝「今までとは違う」＝「よそのものだ」＝「変だ」＝「あやしい」と感じられる存在や現象に遭遇するたびに、ビビって目くじらを立てる人たちがいます。

また、「人権」や「〇〇主義」という言葉を聞くなり、現象のコンテキストや対象の個別性を無視し、思考停止状態になり、パブロフのワンちゃんみたいに、その道のプロ＝それでご飯を食べている人たちの言葉の受け売りである、ステレオタイプ化した罵倒や悪態を口にする人たちもいます。こうした人たちに共通するのは、考える、思う、感じ

る、想像する、という基本的ないとなみを一時的に放棄していることです。

思いやりのところを一時的とはいえ、失う人は憐れです。ある程度の年齢に達した人であれば、だらしなないです。ただ「うざい」と済ますこともできるでしょうが、個人的には残念です。「新しいもの or よそのもの」に媚びろと言っているのでは、ありません。人にとって、「新しいもの or よそのもの」なんてありません。

人の知覚は、すべてが出来レースみたいなものなのです（※このことについては、後述します）。異形（いぎょう）と感じられる存在や現象に対し、条件反射的にところを閉ざす、という行為もそうです。悲しいです。ステレオタイプ化した行為をいったんやめて、思いやるころを持ちたい。そう思っています。思いやったあと、どう判断し、どう行動するかは、その人次第です。ただ、短絡はやめましょうという意味です。

*

世間話は、ここまでにし、きょうの本題に入ります。このブログでは、きのう、おとといと、俳句について書いてきました。同時に、

* 「かく・かける・書く・賭ける・掛ける」とは、「宙ぶらりん」である。

らしい。

* 「宙ぶらりん」を、少し格好をつけて言うならば、「偶然性」とも言える。

のではないかと考えていました。

ところで、「偶然」という言葉に自分はかなり違和感を覚えます。「偶然性」にはしっくりしたものを感じます。「必然」と「必然性」との差には、あまりこだわりません。どうしてだろう？ と考えていたのですが、「偶然」というと何か、物質性を感じてしまうのです。自分にとって、「偶然」という「もの（＝物）」はなく、「偶然性」という「まぼろし＝ほぼこと＝（ほぼ事）」はある。言葉にすると、そんな感じです。

*世界は偶然に満ちている。

などというフレーズに出合ったりすると、なぜか、強い拒否反応を起してしまいます。

隠喩で使われているとしても、です。というより、隠喩として、いわば「確信犯的に」そう言っているのなら、なぜか、なおさら強い拒否反応を覚えます。さらに、「偶然」の対として用いられる「必然」について言えば、偶然の反対が必然だという気がぜんぜんしないのです。

*世界には、「偶然性」だけが屹立（きつりつ）している。

という感じなのです。もちろん、きわめて個人的な感想＝愚見＝妄言です。こんなふう
に強く感じるのは、

*「必然」とは、「ヒトのもの」＝「ヒトの幻想」である。

という思い込みが強いのではないかと自己分析しています。というわけで、「偶然 vs. 必然」「偶然性 vs. 必然性」という図式に沿って文章を書くこともありますが、内心では、上で述べたような思いが非常に強いです。俳句についての記事を書きながら、常にあたまの大部分を占めていたのは、

*偶然性（※やはり、「屹立する偶然性」と言うべきだと感じます）

であり、話のついでにつづった「偶然」、「必然」、「必然性」という言葉たちは形式的に並べたようなものです。「偶然性」は、

*宙ぶらりん

と同じで、自分のなかでは、非常に大きな位置を占める気掛かり＝気懸かりな言葉です。

で、家事や親の介護の合間にいろいろ考えていて、はっと気づいたことがあります。デジャ・ヴュのようにも思えるので、以前にもあたまたに浮かんだ、あるいは、何かで読んだか、どこかで聞いた話なのかもしれませんが、いちおう書いておきます。

*

古い話で恐縮ですが、「有楽町で逢いましょう」という歌謡曲が昭和 32 年頃にレコード化され、大ヒットしたらしいのです。当時は、歌の「賞味期限」が今よりずっと長かったので、多くの人たちによって、何年も愛唱されていたとのこと。

自分はその歌の出だしだけをはっきりと覚えています。著作権に触れるので、全部引用できませんが、あなたを待っていると決まって雨が降るみたいなことを言い、あなたがびしょびしょに濡れて、

* 「こぬかと、気にかかる」

という歌詞となります。ここが、どうやら掛詞（※かけことば）＝しゃれ＝言葉の遊びらしいのです（※あくまでも「らしい」です、勘違いである可能性が高いです）。

* 「来ぬか＝来ないか＝来ぬか＝こぬか雨」＋「気にかかる＝木にかかる」

という具合です。何かこれに似た、あるいは同じ掛詞を使った和歌が平安時代ごろにあったようなことを聞いた記憶もあります。また、ほかの歌謡曲でも、使われていた覚えもあります。「手垢の付いた」という手垢の付いた言い方がありますが、まさにあのしゃれは、手垢の付いた掛詞だったということです。

そういえば、「♪こぬか雨降る〇〇筋」という、大阪を舞台にした歌もありました。「来ぬか＝来ないか＝来ないかなあ⇒待つ or しのぶ」というふうには、「こぬか雨が降る」＝

「人を待つ or しのぶ」という、ワンパターン=受け継がれたパクリ=定型が存在するわけですね。

このブログでは、

*オリジナリティはどうでもいいというか、そんなものはない。

という立場を取っているので、パクリ、パクリについては詮索しません。フランク永井という歌手がヒットさせた、あの歌の歌詞をわざわざ取り上げた理由は、

*あのコドモ時代に聞いた言葉が、「掛詞=だじゃれ」だったと、オジサンとなった今になって気づいた。

からなのです。言い換えると、

*言葉の偶然性の産物である「掛詞=ダジャレ」に、偶然性に左右されて、かなりの時を経て気づいた。

ということです。

幼かったころの自分は、たぶん、あの歌詞の意味を理解していなかったと思います。その後、何度か、あの歌詞を聞いたり、自分でも口ずさむことがあったことは確かです。でも、ついきのうになって、はっと気づいたのです。さきほども申しあげましたように、デジャ・ヴュも感じますので、以前にも気づいた瞬間があるという気もします。それにしても、です。

*意味の知らない言葉の記憶が、何年も後になって、分かったり、それがしやれであったりすることに気づく。

という現象が「気にかかった」のです。

*

で、話は、ブルガリに飛びます。

*なぜ、BULGARIではなく、BVLGARIなのでしょう？

ブルガリが何語なのかは知りません。ヨーロッパの言語のうちの1つであることは確かでしょう。

*ABCDEFGHIJKLMN OPQRSTUVWXYZ

これは、英語で使われているアルファベット 26 文字です。これって、何なんでしょう？ というか、何のためにあり、どうしてこの順番で並んでいるのでしょうか？ これが、英語をつづる＝書くためのパーツだという、よく知られたことは別にしての話です。

偶然性の産物として、こういうふうに並んでいるのか？ それとも、何かの規則なり理由があるのか？ ネット検索をすれば、「正しい」答えが見つかる可能性は高いです。でも、このブログでは、あまりそうしたことはしません。書いている者が、無精だということもあります。偏屈だということもあります。とにかく、調べることはしません。

なぜなら、今、「かく・かける」シリーズをやっているからです。宙ぶらりん、でいいのです。このブログを何回かお読みになっている方は、薄々感じていらっしゃるかもしれませんが、

*このブログで書かれている文章、つまり、言葉たちの特徴として、言葉の身ぶり＝運動＝動き＝めくばせ＝表情といったものを、このブログでは、非常にというか、いちばん大切にしています。書かれている言葉たちの意味や内容や指し示すものは、二の次なのです。刺身のつま、なのです。

また、意味の固定化を嫌います。筋を通すことに、うさん臭さを覚えます。だから、やたら「＝」が文章に混じります。あれは、

*言葉が一定の方向を向いたり、1つの意味づけに固着したりしないように、言葉の「向き」をできるかぎり「揺らし」たり、似通った、あるいは、ときには正反対と考えられている言葉を「＝」でつなぐことにより、「意味」ができるかぎり「ずれる」ようにと、故意にしているのです。

どうしてこんなことを書いているのかと申しますと、当ブログのプロフィールにあるメールアドレス宛に、ある読者の方から、このブログの文章の「読みにくさ」について、質問というか、クレームを頂戴したからなのです。

その方宛に、「今は、あたまのなかが整理できておらず、即答ができないので、近いうちに、記事のなかで、なるべく分かりやすいように説明します」といった意味の返事を出しました。

〇〇さん、メールをありがとうございました。こんな説明しかできませんでしたが、お分かりいただけただけでしょうか？

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「かく・かける (8)」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしく願い申し上げます】

09.05.19　かく・かける (8)

◆かく・かける (8)

2009-05-19 09:56:38 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「かく・かける (7)」の続きです。】

さて、話をもどしますと、現在、「宙ぶらりん」(※気取って言えば、「屹立する圧倒的な偶然性」)について書いているので、アルファベットの謎については、「宙ぶらりん」の状態、ただし(or つまり)自分の手もちの知識と記憶とでまかせを頼りに(※気取って言えば、「クロード・レヴィ＝ストロース印の「ブリコラージュ」もどき」に)書いてみます。

というわけで、謎は解けません、次のようなことを思い出しました。

中・高生時代に、NHKのテレビ・ラジオの外国語講座を全部視聴するという、あほ＝無茶をやっていたことについては、「あう (3)」2009-04-29 で触れました。その過程で、ヨーロッパの言語のアルファベットが26文字に限らないことも、当然知りました。

ロシア語で用いられている、ロシア文字＝キリル文字も覚えました。そのおかげで、なぜ、当時のソ連のバレーボール選手たちのユニフォームに「СССР」と記してあるのかも分かりました。そのキリル文字が——NHKの講座にはありませんでしたが——現代ギリシャ語、および古代ギリシア語の文字に近いことも知りました。ちなみに、冒頭で挙げた「ТOYСЯUС」の「Я」は、ロシア文字にありますね。

念を押しますが、「ТOYСЯUС」は「お遊び＝デザイン＝しゃれ」です。深い意味なんてありません。

*

アルファベットについては、フランス語を勉強していた時に、Y y を i grec (「イグレック」みたいに発音します)と読み、「ギリシャ風の I i (ほぼ「イ」みたいに発音します)」という意味だと、講師が言っているのを聞き、「なんで？」と思ったことを覚えています。なんで、「イ」が2つもいるわけ？ という感じです。その謎は、お勉強嫌いな自分には、今も解けていません。で、もう1つ不思議なことがあったのです。アルファベットの発音を説明している時だったので、Y y の前に聞いた話です。

W w をフランス語では「ドゥブルヴェ」みたいに発音し、なんと「二重の=2つの V v (「ヴェ」みたいに発音します)」という意味だということです。そして、その講師は、続けて以下のような意味のことを話しました。

「英語ではダブリュー、つまり、ダブル・ユー、ユーが2つだって言いますよね。昔は、ユーとヴィー、フランス語ではユ (※カタカナでは書きにくいのですが、いちおう、こう書いておきます) とヴェですが、この2つは同じだったんです」

とあっさりと説明し、それ以上、教えてくださいませんでした。

でも、それを聞いた自分は、「ええっつ」という感じで一瞬、「宙ぶらりん」状態になりました。

- 1) 英語の W は Uが2つという意味。
- 2) フランス語の W は Vが2つという意味。
- 3) 昔々、U と Vは同じだった。

どういうこっちゃ？ この講師、もしかして冗談を言ってるのと、ちゃうか？

- 1) U は母音ではないか。
- 2) V は子音ではないか。

3) 昔々、U と V が同じだったって、どういうことなのか？

4) ただ、文字をよく見ると、W は V + V に見えるから、まんざら冗談でもなさそうだ。

というわけで、手もちの知識と記憶で説明すると、さきほどの、

*なぜ、BULGARI ではなく、BVLGARI なのでしょう？

の答えとしては、

*昔々、U と V が同じだったらしいので、「ブルガリ」は何語か知らないけど、BULGARI ではなく、BVLGARI とつづっても、変ではない。

ということになります。

きわめてテキトーな説明ですけど、そうらしいですよ。理由は、これ以上、聞かないでください。詳しいことは、知りませんので。と言いながら、思いついたことがあります。さきほど書いた、

*昔々、U と V が同じだったらしいので、「ブルガリ」は何語か知らないけど、BULGARI ではなく、BVLGARI とつづっても、変ではない。

って、

*日本語には、「い・イ」と「ゐ・ヰ」、「え・エ」と「ゑ・ヱ」、「お・オ」と「を・ヲ」がある。

のと似てませんか？ 単なる、出まかせですけど。詳しいことは知りません。

*

実は、冒頭でブルガリについて書いたのは、おとといから、日本の定型詩である俳句と同時に、ヨーロッパの言語の定型詩についても、考えをめぐらしていたからです。おとといの「かく・かける (5)」2009-05-17 の冒頭が、

*英語やフランス語が、26 の表音文字で表記されている、と考えると不思議な気持ちになります。たったこれだけで、あれだけのことが書けるのか、という不思議さです。日本語が、漢字+ひらがな+カタカナ+ローマ字で表記されているのも、摩訶不思議です。日々、体験しているはずなのに、よく考えるとどうなっているのか、さっぱり分からない。

となっていたのは、そのせいです。

26 文字でいろいろな言葉を作って、いろいろなことを書けるのも、不思議ですが、そのパーツである 26 文字自体が、不思議というか謎なのです。そう書いた今、またもや、デジャ・ヴュに見舞われています。

あれです。正確な名称は知りませんが、「あいうえお表」とかいうやつです。「お口を空けて、あーん」2009-01-23 で、以下のような文章を書きました。少々長いですが、事態がぜんぜん変わっていませんので、コピペさせてください。

★「あいうえお表」っていうんですか。小さいころ、親の手製の表が、机の上の壁に貼ってあったのを覚えています。そのとき、不思議だったのが、「や行」と「わ行」です。親がつくってくれたものでは、確か、

(前略)

まみむめも

やーゆーよ

らりるれろ

わ———を

ん

となっていて、表を見るたびに、不思議に思っていました。

「なんで、あそこが、ぬけてんだらう？」

今でも、不思議なのは、国語のお勉強をしっかりしなかったからでしょう。あの穴は、たぶん「傷跡」なのだと、思います。かわいそうに……。作家でいえば、丸谷才一氏が、現在も実践している歴史的仮名遣いあたりと関係あるのではないか？ でも、よくわかりません。

これも、グーグルなんかで調べれば、謎が解けるのですが、自分は、これだけは謎のままにしておきたいんです。傷跡はそのまま、そっとしておいて、触れたくない気分です。いつか、傷跡の意味が解けることもあるでしょうが、今のところは、このままがいいです。怠け者だから調べないと言えないこともないんですけど、これだけは、不思議なままがいい。正直なところ、そう思います。一句浮かびました。

傷跡を舐める小猫に われ重ね

ここまで書いて、思い出したことがあります。親の書いてくれたものではなく、学校にあったものです。

(前略)

まみむめも

やいゆえよ

らりるれろ

わいうえを

ん

すっかり、忘れていました。こういうのも、見ました。懐かしい。で、今、こうやって、上と下のとを見比べてみると、あたまが混乱してきました。めまいに似ています。

いったい、どうなっているんだ！

と叫びたいくらい、今、うろたえています。

これもまた、専門の本なり、グーグルでしっかり検索しないと、解決しそうもない予感がします。ただ、きょうは、実は「消えてしまいたい指数」が高いんです。80くらいでしょうか？ 自分でも、きょうの文章は元気がないなあ、トーンダウンしているなあ、と感じます。だから、調べる気力はありません。やっぱり、謎は謎のままにしておきましょう。

★から以上までが引用です。

ぜんぜん、進歩していません。あいうえおの謎は謎のままです。抜けは抜けたままです。間抜けですね。無精ですね。だいいち、みっともないです。でも、事実だし、今も変わらない実感なので、長々とコピペしちゃいました。

さきほど書いた、

*日本語には、「い・イ」と「ゐ・ヰ」、「え・エ」と「ゑ・ヱ」、「お・オ」と「を・ヲ」がある。

と関係がありそうですね。とは言え、これも、きょうは調べる気力がありませんので、謎は謎のままにしておきましょう。謎にはどこか甘美なところがあります。

*

上述の、フランク永井の歌った「有楽町で逢いましょう」の出だしのように、はっきり覚えていながら、実は意味が分かっていなかったり、掛詞だと気づいていなかったりすることって、意外と多いのではないのでしょうか？

ただ、それに気がついていないだけ。アルファベットも、あいうえお表も、よく考えてみると不思議だらけ。にもかかわらず、無意識のうちに、これまでずっと高をくくっていた、そして、今も高をくくっている。そうに、ちがいありません。

こんなふうを考えていると、自分のまわりにある、慣れ親しんだものやこと、知っているはずのものやことが、「あ」に濁点「ㇿ」をつけた表記みたいに、異形（いぎょう）のものやことに感じられてきます。さっき「かく・かける（7）」のなかで、やんわりと批判した、パブロフのワンちゃん状態の、思考停止気味の人たちの、鈍感さや、「思いやる」気持ちのなさへの批判が、そっくり自分に返ってきます。

*考える、思う、感じる、想像する、という基本的ないとなみを一時的に放棄している。

これって、まさに自分のことだと思います。「一時的に」どころか、「いつも」です。異形を異形だと感じなくなってしまうているのです。当たり前だと感じてしまっているのです。書き換えましょう。

*考える、思う、感じる、想像する、という基本的ないとなみを、無意識のうちに長き

にわたって常に放棄している。

でも、これがヒトの常＝性（さが）＝習性だというなら、悲観する必要はないとも思われます。ヒトは、たくましく＝しぶとく＝厚かましい生き物です。その根底にあるのは、生来の、

*飽きっぽさ、諦めやすさ、忘れっぽさ

です。こうしたヒトの習性を思うと、

*屹立（きつりつ）する偶然性＝「宙ぶらりん」など、どうでもいい

とさえ、感じられてきます。

*屹立する偶然性＝「宙ぶらりん」について考えすぎたことへの反動

でしょうか？

*

ここで、再度、長めのコピペをさせてください。個人的にとっても愛着のある記事、「カジノ人間主義」2009-01-30 から、以下に引用します。

*やっぱり、出来レース、やらせ、八百長らしい。気づいているくせに、あるいは、気がついていないふりをして、または、すっかり忘れて、やらせを本当だと思いこんでいる、もしくは、思いこもうと自分をだましている。

*ある種のスポーツ（※ あえて、名指ししません）や、ある種のテレビ番組（※ あえて、

名指ししません)と同じです。嘘、つくりもの、フィクション、編集済み、情報操作されたもの、筋書きなしに見せかけて、本当は筋書きがあるもの—そういうものを見て、ヒトは何とも思わなくなっている。心の底では、嘘だとわかっている、嘘だと思おうと楽しめないから、「ただ見ている」だけ。実質的傍観者状態。

*悪いとわかっている、間違っているとわかっている、正しくないとわかっている、正直じゃないとわかっている。でも、都合が悪いから、そういうことは、忘れる、あるいは、忘れたふりをする、または、すっかり忘れてしまっている。

*思い出そうと努力すれば、思い出すことができる、学び直すこともできる、再発見することもできる、「わかった」と叫ぶこともできる。なのに、忘れている。思い出そうとしていない。そうした気迫がみられない。都合が悪いから、必要がないから、という言葉が、心の奥底にある。

*へたなことを口にした、実行に移すと、他の人たちから、寄ってたかっていじめられたり、場合によっては、消されるから、思い出さないし、わかろうともしないし、実際に、忘れてしまっているし、わからなくなっている。

*「わかる」は「わかる」ことだから、まだらにしか、わからない。「わかる」「わからない」ということは、ふるいにかけて、よりわかること。そのふるいに、かからないものは、わからない。そういう、しくみになっている。

*ヒトは、まだらの世界を見ている。おそらく、そのまだら模様は、ヒトに共通している。

*ヒトは、知覚され記号化された情報を、導線と回路を通して、まだらに脳で処理している。その導線も回路も、無限ではなく有限の質と量のものしか通さない。ノイズは、抑制されている。そうやって、脳の過熱による機能不全を防ぐ仕組みが存在する。

*カジノ資本主義というものは、上に書きつづったヒトの行動とすごく似ている。激似。酷似。かなりの部分がダブっている、かぶっている、そっくりと言ってもいい。

*答えが最初から出ている、出来レース。筋書きが最初からある、やらせ。何か黒い目的があって仕組まれている、八百長。

*すべてが、ぴったり当てはまり、すべてが、正しいとされ、すべてが、わかるような仕組みができています。

*真理や実体なんて、哲学や科学の出来レース。それを支えているものが、表象という名の、代理人。何でも代行屋さん。まいどありー。おおきに。儲けさせてもらっております。

*Aだと思っているものは、括弧にくくられたA、つまり「A」。それを、Aだと思いこんでいる。さもなきゃ、人間=ヒトやってられないよー。確かにね。そのとおりだ。それこそ、真理だ。トゥルースだ。ヴェリテだ。誰も否定できない真実だ。

*だから、大丈夫。このままで大丈夫。「仕組み」とか「からくり」なんて、ちゃちゃを入れる、ふざけたやつは、くたばってしまえ。そんなやつは、人間様じゃない。ひとでなしだ。

以上が、引用です。

*

今読んでみると、ずいぶん威勢がいいというか、元気がありますね。ヒトの宙ぶらりん状態を、逆説的な言い回しで、ポジティブに、つまり、裏を返せば、きわめてネガティブに風刺＝「弱虫の遠ぼえ」しています。きのう書いた、ややこしいチャート＝図表を読むさいの手引きにもなりそうです。以上の引用文で出てくる「出来レース」とか「やらせ」というのは、

*必然性とは無縁の、屹立する偶然性＝「宙ぶらりん」に内包されるもの

です。前にも書きましたが、「偶然の反対は必然だ」なんて嘘です。国語のテストだけで「正しい」とされるベテンです。まだ、考えは煮詰まっていますが、おそらく、

* (偶然性 \cong or \neq 必然性) \Leftrightarrow 自由 (=幻想) = 不自由

だという気がします。

で、話をもどしますが、上の「*必然性とは無縁の.....」で始まるフレーズを、言い換えると、(以上の引用文で出てくる「出来レース」とか「やらせ」というのは、)

*いわゆる「自由意志」や「ヒトの無限の可能性」とは正反対 or 無関係の、「徹底した不自由さ」

です。

矛盾だらけで、ややこしいですが、とりあえず、そんなふうに関 (=勘=観) じています。思えば、「カジノ人間主義」2009-01-30 も、マラルメがらみで書いた文章でした。

*マラルメ=魔羅縷奴って、もしかしたら、猛毒=毛毒 (※毛沢東) = 妄怒苦かもしれない。

そして、

*屹立する偶然性=「宙ぶらりん」って、ひょっとしたら、「身をゆだねる」=「身をまかせる」性質のものではなく、「身ががんじがらめにしぼる」=「身を侵す=犯す」ものかもしれない。「賭け」も「書く」も「占う」も「知る」も「分かる」も、何もかもが、圧倒的な偶然性の「前では=もとでは」、無力で空しい。

ふと、今、そう思いました。

そう思ったとたん、何だか、悪寒がしてきたので、大事をとって、きょうはここで、失礼をいたします。実は、昨夜から今朝にかけて、あまり眠れなかったのです。

ボルポトに 我が身を重ね 見た夢は

09.05.20 占い・占う

◆占い・占う

2009-05-20 08:58:00 | 言葉

何かになんかを見る。これがヒトの習性のようなのです。出だしで書いた文の、前者の「何か」と後者の「何か」が、異なっているのは言うまでもありません。両者とも「幻想」であり、そうした「見る」仕組み＝メカニズムを「錯覚」であると言って片付けることも可能です。それでは、身も蓋もありません。愛想もなし。それを言っちゃおしまい。と、いうことになります。ですので、身も蓋もあり、愛想もあり、それを言っちゃおしまいの中の、「それ」を言わない話をしましょう。

このところ書き続けてきた、「かく・かける」シリーズでは、きのうで「身も蓋もない」「愛想がない」「それを言っちゃおしまい」的な状況になりましたので、きょうは、補遺＝おまけ＝付録＝追加を書きたいと思います。ですので、話は、きのうまでの記事とつながっています。「占い」については、「かく・かける (1)」2009-05-14 で、触れました。きょうは、あの記事とは別の視点から、「占い・占う」をテーマに書いてみます。

*

「占い」は、この惑星に生息するヒトという種に、共通した行為＝行動のようなのです。文化人類学、考古学、歴史学、社会学、文学などでも、さかんに扱われています。何しろ、面

白いのです。個人的も、興味があります。種類を挙げたら、切りのないほど出てきます。種類別に「占い」を列挙しようとしたのですが、うんざりしそうなので、やめました。ここは、言葉のフェティシストのはしくれが開設しているブログなので、言葉に注目してみます。

「うらない・占い」という大和言葉系の言葉が、「うらかた・占形＝占象＝ト兆」と呼ばれる、亀の甲や鹿の肩甲骨を焼いたさいに生じる裂け目・割れ目の形で、吉凶を占う行為から来ていることは、大きめの辞書を引くと知ることができます。そういえば、「亀裂」という言葉がありますね。なぜ、カメさんやシカさんなのでしょう？ 調べれば、分かるでしょうが、興味はありません。

今、ここにある、ものたちやことたち、手もちの知識や記憶、自分のあたまやからだ――できるだけ、そうした近くにあって知覚できるものやことで、済まそう。これが、このブログの基本的なスタンスなのです。もっとも、格好をつけて言えばの話であり、ぶっちゃんけた話が、横着で無精なのです。また、あくまでも、「基本的な」話であって、ときには、はりきっている調べまくるなんてこともします。

*

というわけで、ふたたび言葉に注目してみます。今度は、英語です。英語で「占い師」を fortune teller という場合があります。diviner とも言うそうです。結論から申しますと、前者は運とか偶然、後者は神と関係があります。あとは、占うさいに何を用いるかといったツール＝道具＝パーツ＝部品一式に由来する言葉が、たくさんあります。これも、列挙するのが面倒そうなので、とにかく多種多様な占いの方法＝メソッド＝流派＝お店＝協会＝集団＝サークル活動＝商売があると、理解してください。

個人的に、すごく興味がある言葉に

* 予言

と、

* 預言

があります。

予言は、辞書によると、ヨーロッパ系の意味と、仏教系の意味の両方があります。一方、預言は、キリスト教系の言葉に当てた漢字らしいです。以下に、まとめてみましょう。

* 予言：予め、未来の出来事を推測して言う。

* 預言：預言者という特殊な能力を持った人が、神から預けられた言葉を、一般の人たちに言う。あるいは、その行為を用いて、神への信仰を勧誘する。なお、預言者の言葉を書き記したものを預言書という。

らしいです。

上の2つの「予言・預言」の説明を見ていると、

* 予と預の、符合＝符号＝引合せ（※ひきあわせ）

が気に掛かり＝懸かります。「何か引っ掛かる」という言い方がありますね。ついつい、気になって、こだわってしまう、みたいな感覚を言います。宙に浮いたような感じとっていいでしょう。

そこで、漢和辞典で調べてみました。すると、ややこしい説明がいろいろあって、困ってしまいました。でも、丹念に目を通し、素人なりに、次のように簡単に整理しちゃいました。このブログでは「正しい」「正しくない」ごっこはしません。ゲイ・サイエンス＝楽問＝「楽しいお勉強ごっこ」をやっているんです。ですので、自分にとって面白そうな＝おいしそうな＝楽しそうな部分だけ、まとめてみました。

*予：「あげちゃう」「のんびりいこうよ」「まえもって、ゆとりをもつてね。そのときになって、焦っちゃだめよ」「はい、確かに、お預かりいたします。おまかせあれ」「のびのび。あれあれ、そんな遠くまでいくの～？」「ひゅーっと流れるように」

*預：「まえもって、ゆとりをもつてね。そのときになって、焦っちゃだめよ」「あとは気楽にいこうよ。まったり主義でね」「はい、確かに、お預かりいたします。少しのあいだ、うちに置いておくからね。おまかせあれ」「お預けしま～す。あとはよろしくね」「これだけの人をずらーっと集めておけば、何があってもだいじょうぶ。よっしゃあ」

こんなん出ましたけど、という感じです。

違いがお分かりになりますか？ これでも、それなりに一生懸命に2種類の漢和辞典を見比べて、感じ＝漢字＝感字たことを、それなりに忠実に書いたつもりなんです。

*あんまり、大した違いはない。

と結論づけても、いいのではないのでしょうか？ そういう前提で話を続けますよ。で、思ったのですが、

*「予」と「預」に共通する「余」裕は、「予＝余＝我（※われ＝わたくし）＝自分（※じぶん）」が、「何かどえらいもの」の代わりに務めている＝装っている＝演じている＝化けているという、自信（＝自分を信じること＝自己催眠＝なりきり状態＝たぶん勘違い）から来ているのではないか。

そんなふうには、お感じになりませんか？

このシリーズをお読みになっている方から、「また、あれかよー。勘弁してよ」「芸がなさすぎる」「ネタ切れか？」とお叱り＝諦め＝「どうにでも、好きなようにしてちょうだい」というお言葉を頂戴するのを覚悟のうえで、「かく・かける（1）」2009-05-14で、

「1カ月前、ひな祭り」2009-02-03 を自己輸入＝自己引用したところを、再度、自己輸入＝自己引用したさせていただきます。

これって、「コピーのコピー」＝「複製の複製」などとも申しまして、「トリトメのない記号＝まぼろし」って、このブログで呼んでいるものなのです。ええっ？「そんな言葉で、お茶を濁す＝格好をつける＝自己正当化するんじゃない」ですか？ ごもっともです。失礼いたしました。とにかく、お読み願います。

*

★★この問題について、「1カ月前、ひな祭り」2009-02-03 という記事のなかに、「占い」と宗教の発生がらみで書いた部分がありますので、横着をして、自己輸入＝自己引用＝コピーをさせていただきます。ちょっとおふざけ気味の文体ですが、それは内容のシリアスさを薄めるためです。本気で書いたものですので、そのところをご理解願います。

★「ひな壇」とピラミッドは、司法・立法・行政には付きもの。代理、代行、代議士、代表、総代が、うようよ。ハンコペタペタのペーパーワーク。このへんが不明の方は、当ブログのバックナンバー、「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16、「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 を参照願います。面倒な方は、このまま、引き続き、どうぞ。「ひな壇」は「虎の威＝衣」とセットで、クラス分け、棲み分けして、暮らすわけ。これが代々続けば、2世、3世、そして、世襲。仲間うちで譲ったり、譲り合えば、天下り、渡り、渡る天下に鬼はなし。

蛇足ながら、「虎の威＝衣」は「虎の位」、ピンからキリまで、枚挙にいとまなし。フェイクファーのパンツから、スマトラ産の超高級品の上下一式の被り物まで、多岐にわたる。引退後は、民間人をさておいて、真っ先に褒章、勲章までもらえる。ワッペン張って、大威張り。首から下げて、涙腺を緩めるのが、最後のご奉公。なんでこれがご奉公？ 公僕、最後のご奉公？ ここまで来ると、もうめちゃくちゃではないか？ それなのに、庶民が一揆を起こしたり、騒がないのも、究極には「表象の働き」の奥深さがあるのではなからうか？ もっと考えてみたいけど、きょうは、それ以上考える暇なし。貧乏暇なし。なぜか、突然、なるほど、

「タモちゃんのお代理様」

は、やっぱり言えている、と思う。言えてるどころか、きっと、そうに違いない。

「でまかせ」ではなく、「言えている」とか「きっとそうだ」にしてもいいでしょうか、偶然と必然のオーソリティー（＝権威）だったマラルメさん？ここで権威にすぎる自分が、情けない。それはともかく、ヒトよりも、もっともっと偉い存在がいて、ヒトはその代理を務めたいという、願望、欲求、祈り、野望、をもっているのではないのでしょうか、マラルメさん？Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面をかぶり、表情をまね、ときにはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？様になるでしょう？だって、これだけ化ければ、〇〇様なんて、呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

という具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」、「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」、「ニワトリとブタが増えますように」、「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」、「今度の戦（※いくさ）に勝てますように」、「あいつとの賭けに勝てますように」、「おとうさんの怪我が早く治りますように」、「娘がいいところにお嫁にいけますように」、「亡くなったあとに天国に行けますように」、「元気が出ますように」

「お任せあれ。任せとき。だいじょうぶ。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？このあいだは、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなったときには、仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらもとって、わたしは代理ですと言って責任を転嫁すればいい。または、「あんたの信心がたりんからじゃ」と、これまた、責任を転嫁すればいい。「代理人＝代行者」は、気楽で、いい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

★から、以上までが、引用部分です。

宗教と、占い＝預言＝予言と、半端じゃなく強い「何か」の威＝衣を借りて、他の人たちの上に立つという「政（※まつりごと）＝支配体制＝政治」の成立というシリアスな問題を、紙芝居的に描いたおとぎ話です。きょうのテーマの1つである、「占い」のメカニズムもご理解いただけただけではないでしょうか。

★★から、以上までが、引用部分です。はい、コピペのコピペでございます。ややこしいので、図で示します。

★★-----
★-----

★-----
★★-----

という具合に、引用が、サンドイッチ、あるいは入れ子構造になっているということです。

それはさておき、サンドイッチのようにダブル引用した部分に書いてあることですが、言えてません？

*

きて、マジで大切なことを指摘します。「予＝余＝わたくし」と言いながら、「わたくし」ではない。あくまでも

*代理

なのです。でも、

*とてつもないどえらい何か

の代わりに務めている＝演じてるから、

*「間接的に」とてつもなくどえらい＝（そこそこ）どえらい

というものに

*化ける

ことができちゃう。これって、

*「おぼけ」

ですよ。

*このからくり＝仕組み＝メカニズムに、だまされるって「おぼか」さん

ですよ。

以上は、「占い・占う」についてのおくまでも個人的な感想＝愚見です。お気を悪くされた、業者の方々＝プロの方々＝（信＋者＝儲）けたい方々＝預言 or 預言者・予言 or 予言者を信じていらっしゃる方々＝お金を喜んでお預けになっている方々＝何となくお金をお預けになっている方々＝怖いからお金をお預けになっている方々＝強制されてお金をお預けになっている方々……に深くお詫び申し上げます。

当ブログは、営業妨害をする意思は、まったくございません。他人様の信仰にとやかく申すつもりも、ぜんぜんありません。日本国憲法の熱烈な支持者でございます。お間違えのないようお願い申し上げます。

現に、自分は茶柱の熱狂的な信者でございます。足元で寝そべっているネコ（※うちの猫の名前です）は、鯛（※いわし）の頭の熱烈な信者のようです。みなさん、他人様のテリトリーには干渉するのはやめましょう。でも、だましたり、強制するのは、いけないことだと存じます。そこんところは、お互いに理解し合っていますよね。たぶん。

*

ところで、ここで、ふと、思い出したことがありますので、お話しさせてください。霊感占いという分野がありますね。現在も、たくさんのその道の方々のご商売＝ご活躍なさっているもようです。あまり最近のことですと、差し障りがある恐れもありますので、古い話をします。

かつて、政財界にも大きな影響力を持った、ある女性の霊感占い師がいました。その政財界の人物（※複数です）の氏名を挙げれば、「うっそー」なんて声をお上げになる、おじさん、おばさん、並びに年配の方々がいいらっしゃる（※あるいは、いらっしやった）はずです。その女性霊感占い師が、最終的には、非業の死とでも呼ぶほかしかない形で、生涯を閉じられたのは、残念なことです。合掌。

さて、この女性がテレビで占いをなさっている場面をたまたま目にした時のことを、覚えております。その時のご発言が、あまりにも、あっけないというか、馬鹿馬鹿しいというか、きわめてシンプルだったために、強い印象として残っているのかもしれない。

米国で第37代大統領を務めたリチャード・ニクソンについて、占ったのです。ご存知の方も多いと思いますが、ニクソンはウォーターゲート事件というとてつもないスキャンダルを起し、任期中に辞任しました。そのニクソンの任期のどのあたりでの占いかは、残念ながら覚えておりません。ウォーターゲート事件は解決するまでに長い期間があったので、占いが行われたのが、ニクソンの旗色が悪くなりかけた頃なのか、その前なのかは分かりません。その前だったら、「当たった」というしかないです。

で、靈感占いをテレビ局から依頼されたその女性が、どんな発言＝預言？＝予言？をしたのかと申しますと、『ニクソン』さんの名前が悪いですね。『ソン』が良くないです。この方は、きっと『損』をします。一字一句まで正確には覚えていませんが、確かにこのような意味のことをおっしゃったのです。

その女性には失礼ですけど、馬鹿馬鹿しい言葉に思えたので、こんな年齢になっても、核心部分だけは、はっきりと覚えているのです。この女性が無残なお亡くなり方をしたというニュースを知った時にも、思い出しました。

『ニクソン』の『ニク』も、『憎い』に通じるから、良くありませんね」などという言葉と、その女性が話しているさまが、ふと、あたまたに浮かびましたが、これは創作＝記憶違い＝嘘＝でたらめ＝錯覚＝ギャグのやりすぎでの脳の誤作動でしょう。

でも、『損』のほうの記憶は、ぜったいに間違いないと確信しています。同じ番組をご覧になった方が、いらっしゃいましたら、ご一報ください。間違いありませんよね？

で、今になって結果的に思うのですが、あの調子でやって、あれが靈感占いだいうなら、きっと、クリントン氏は「クリン」と「不倫」が似ていて、「トン」が「頓馬」の「頓」に通じるから、ああいう結末になった。

ブッシュ父子は、「ブッ、シュシュー」と砲弾が飛び交う音に似ているから、父は湾岸戦争、息子はアフガニスタン侵攻、イラク戦争という具合に、戦争と縁が深かった。

カーター氏は、キャンプデービッド合意という形でエジプトとイスラエルの関係に

「片」をつけた。

レーガン氏は「霊」が「願」に応えてくれた。

フォード氏は、まともに大統領選を勝ち抜かずに大統領になったという「ほどほど」の大統領で終わった。

こんなふうに、言えるのではないか？あるいは、あの女性のご存命であれば、靈感で、こんなふうに発言＝予言？＝預言？したかもしれない。などと、想像＝妄想してしまうのです。でも、これじゃ、まるで、自分がダジャレを飛ばすことで抑うつ対策にやった、以前のブログである「でまかせしゅぎじっこうちゅう」の乗りじゃありませんかー！

いずれにせよ、あえて名指しはいたしませんでしたが、あの非業の最期を遂げた、女性霊感占い師の方のご冥福をお祈りいたします。再度、合掌。

*

さて、話を「予言・預言」にもどします。個人的には、「予言・預言」に共通する、

*「言＝言う＝言うこと＝言葉を発すること＝言葉で伝えること」

にも、とても興味があります。預言書となると、書き言葉＝文字⇄活字になるわけですが、

*「とてつもないどえらい何か」のメッセージが、言葉という形で、代理人から、ふつうのヒトたちに伝えられる。

という、現象＝過程＝プロセス＝仕組み＝メカニズム＝仕掛けが採用されていることは興味深いです。

ここで、言葉を広義の言葉と狭義の言葉に分けてみましょう。

*広義の言葉＝言語とは、話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（＝家庭だけで通じる断片的な手話）、指文字、点字、音声（＝発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号など

だと、このブログでは考えています。

その広義の言葉に含まれる、

*狭義の言葉＝話し言葉と書き言葉

だけが、予言や預言において、なぜ優先されるのか？

実は、この質問自体に問題点＝欠点＝「よく考えていない点」があるのです。

*啓示（≒黙示）

という言葉があります。

*「とてつもないどえらい何か」がヒトにメッセージを伝える

ことです。これは、狭義の言葉であるとは限りません。

たとえば、冒頭近くで述べた「亀の甲や鹿の肩甲骨を焼いたさいに生じる裂け目・割れ目の形」であったり、暴風雨であったり、誰かの死 or 死に方であったり、誰かの出産 or 誕生した赤ちゃんであったり、疫病の発生や流行であったり、この惑星を覆う大気の温度が徐々に上がる現象であったり、マネーという名の表象がとちくるいだしたり、ミ

ツバチが世界同時多発的に激減したり、この惑星のヒトの数がリミットを遥かに超えて増加し続けたり、仲間同士の争いが原因でおびただしい数のヒトたちの命が失われたりする.....という形をとる場合が数多くみられます。

これら森羅万象は、「表象」や「トリトメのない記号=まぼろし」や「ニュートラルな信号」という様相=機能=働きを、はらんだ=仕組まれた、

* 「しるし」や「きざし」や「あらわれ」

としてヒトの目に映ります。

ただし、幸か不幸か因果か必然か偶然か何だか分かりませんが、「尻尾のないさえないおサルさん」の脳内で、おそらく、

* 「ズレ=狂い」

が生じた結果、「尻尾のないさえないおサルさん」がヒト=人間様になり、

* 言葉を持ってしまった

ために、上で述べたような多岐にわたる「啓示(≒黙示)」、つまり、おそらく「とてつもないどえらい何か」がヒトに伝えるために送ったと想像=妄想されるメッセージは、

* 言葉という形で、ヒトに示される

ことになったらしいのです。たぶん。

*

で、話はこの記事の冒頭にもどります。

*ヒトには、何かに何かを見る、という習性がそなわっている。

らしいのです。おそらく、ですけど。

さて、「占い・占う」については、今のところ、以上のように感じております。できれば、あすは、「かく・かける」シリーズの補遺＝おまけ＝付録＝追加の第2弾として、ふたたび「賭け・賭ける」をテーマに書いてみたいです。

よろしければ、また、このサイトに遊びに来てください。お待ちしております。

09.05.21 賭け・賭ける

◆賭け・賭ける

2009-05-21 08:53:25 | 言葉

たとえば、東京の渋谷駅前の雑踏で、すれ違った見知らぬ人同士。この2人が、その後、ふたたびすれ違う確率は△%だ。そんなふうな話というかフレーズが、昔、流行ったことがありました。若かった自分は、ロマンチックな想像をふくらませて、うっとりしたものです。

うろ覚えですが、サハラ砂漠でAという人とBという人が出会う確率、なんて話もあったような気がします。「佐原君じゃないか」。「おひさ、原君」。これじゃあ、ロマンチックというより、マンガチックです。

たった今、ケータイをお持ちの方、ダイヤルボタンの縦列369をご覧ください。機種によって違いはあるかもしれませんが、たいてい、「さはら」が併記されていませんか？これこそ、「サハラ砂漠での出会い」みたいで、個人的には、こっちの偶然のほうに、ロマン（※これって、もう、死語ですか？）、を感じます。

ちなみに147は「あたま」ですけど、ダジャレにもならなくて、ぜんぜん「あたま」いい感じはしません。「あ」っ「たま」たま、そうなっただけ～、そんだけ～、くらいですか。

どうしようもないのが、真ん中の2580。あらっ、ひら「かなやわ」（※ひらがなだわ）くらいじゃ、使いもんになりまへん。

*

確率とか可能性というものには、何か夢に近い、気の遠くなるようなイメージを感じます。数学の確率・統計には、半端じゃなく弱い自分ですので、この感覚は、実際にものを知らない者の戯言＝無知な発言＝あほの言うことだと、片付けられても、返す言葉はありません。

「かく・かける（1）～（8）」シリーズ（2009-05-14～2009-05-19）の補遺＝おまけ＝付録＝追加の第2弾として、きょうは、「賭け・賭ける」について書こうとしていますが、「かく・かける（2）」2009-05-15で述べたように、いわゆるギャンブルには縁遠いです。自分が縁遠いものやことについて、あまり意識していない。そのために、恥をかいだ経験をお持ちではないでしょうか？

よく冗談だと思われるのですが、自分は「ばばぬき」というトランプゲームを知りません。正確に言うと、今、「ばばぬき」を説明しろと言われてもできないという意味です。昔、2、3度やった経験はあります。その後、ほかの人たちがやっている様子を見たこともあります。でも、ルールがあたまに入らないのです。

誓って申しますが、本当です。単純なルールだということだけは、何となく覚えていますが、どうやってやる遊びだったか、思い出せません。興味が無い。覚える気がない。

おそらく、そうしたメンタルブロックが働いているにちがいない、としか言えません。

ですから、ほかのトランプゲームも知りませんし、できませんし、やる気もありません。こんなだから、友達ができないのでしょうか。ついでに申しますと、あと、縁遠いものに、旅行と音楽があります。

これも、ある人にこっそり白状したところ、冗談だと即断されましたが、高校2年生だった年の秋に、米国でほんの短期間のホームステイをしたのを最後に、泊りがけの旅行や観光旅行をした経験がありません。そういえば、その年の春に修学旅行もありました。それ以来、マジでなしです。これって、ギネスブックに掲載してもらえますでしょうか？

ともかくにも、違った枕で眠ることが大嫌いなのです。そうなら、自分の枕を持参して旅行をすればいいのと言われてそうですが、少々閉所恐怖症気味なところがあって、自動車・バスをはじめ、列車、飛行機といった移動手段が苦手なのです。30分間でも長いです。15分くらいなら我慢できます。それ以上は、できれば、いや、何としてでも避けたいです。

*

もう1つの縁遠いものである音楽は、別に嫌いというわけではありません。ただ、大学生になったころから聴力が低下しはじめた以降は、楽しめなくなりました。複数のお医者さんの診断を受けましたが、ある周波数の部分を聞き取る能力が極端に落ちているらしいのです。現在は、補聴器で、そうした不自由さを補っているわけですが、器械を通して聞いているわけですから、快く聞こえてこない感じがあります。

で、ある時、大恥をかいたのです。「レコード店」って、今でも言いますよね。レコードではなく、CDとかDVDとか、少し前ならレーザーディスクも売っていた時期でも、「レコード店」と言われていました。かなり前のことですが、ある時、ふと、何げなくレコード店に入ったのです。

その頃は、円盤型のいわゆるレコードも売られていました。でも、その売り場面積が極端に狭いのです。そのかわり、「新譜〇〇」とかいう文字が印刷された細長い紙切れが

プラスチックで包装されて、ずらりと売られているのです。あまり興味もないので、「新譜」だけが目に入り、きっと楽譜が売られているのだと思いました。楽譜がたくさん売られていることも、不思議だとは感じませんでした。何気なく、お店に入っただけでしたので、すぐに出ました。

で、その少し後にCDというものが売られていること、レコードがもはや売られていないに等しいこと、そして、その「新譜〇〇」の包装を解けば、そのCDなるものが入っている事実を知ったのです。「あっ、そうだったのか」という感じでした。だから、あの時に入った店で、レコードが隅に追いやられていたのです。まさに、氷解というやつです。そのことを、ある知り合いに話すと、「うそー」という反応が言下に返ってきました。

でも、本当なのです。もともと、語学は好きだったので、ラジカセと、ソノシート（※ビニール製のレコード）を聞くためのレコードプレーヤーは持っていましたが、レコード自体を買う趣味はなく、ステレオやコンポを持ったことはありませんでした。だから、レコード店に入るという機会も、数えるほどしかなかったのです。

*

一瞬、何の話をしてたのか、分からなくなりました。

「賭け・賭ける」ですね。さきほど、言い訳をしましたが、お金をかけてのギャンブルをするために必要な縁も円もないので、「かく・かける (2)」2009-05-15 で書いたように、きょうも、

* 「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」

という具合に話を進めます。やっぱり、上の2つのフレーズは、自分にとって、偽らぬ実感です。宝くじやパチンコや競馬などの、個々の賭けの仕組みや、それぞれの分野での「当たる」確率については、まったく分からないのですが、

* 「確率」という名で呼ばれている、得体の知れない「何か」

には、興味があります。でも、かつて学校の教科書にあった数学の確率・統計を思い出すと、気持ちが縮んでしまいます。

*言葉でしか知らないもの

ですので、せいぜい、「確率」という言葉の使われ方をあたまたに浮かべ、そのイメージをつかむくらいしか、「確率」と取り組む方法が思いつきません。たとえば、

*この子が○歳まで生きる確率は、どれくらいかしら？

*□□癌にかかっていると診断されたが、あと5年間生き延びる確率はどれくらいだろう？

*宝くじよりも、競馬で儲かる確率の方が高いって、本当？

*△△で▲▲が出る確率は▽%である。

*この会社の株が、本日の午後3時までに○円を超える確率を計算することはできますか？

*円が、5分以内に1ドル□円△銭の大台を突破する確率を計算に入れて、いくら買いかさっそく決めよう。

*今、この車に乗って出掛けて、無事故で午後5時までに帰ってくる確率なんて、計算できるの？

*降水確率って、どうやって出すの？

*サイコロを振って、1が出る確率を求めよ。

こんなフレーズしか思いつきません。数学的な確率に詳しい人から見れば、無意味＝あほの極みな文もあるにちがいありません。そもそも、

*確率と可能性のちがい

も分からないのです。こういう問題には、尻込みしてしまい、手も足も、口も出ません。絶句、です。

*

気分転換に、言葉のフェティシストのはしくれらしく、英語での「賭け・賭ける」にあたる言葉を英和辞典で調べてみます。いろいろありますが、メジャーなものだけを挙げておきます。

* gamble : game と語源が同じ。「勝負する」が転じたという説もある。「賭ける」「投機する」「一か八かの冒険をする」「あてにする」「期待する」「山を張る」

* game : 「お楽しみ」が語源。「遊び」「戯れ」「遊び道具」「気晴らし」「試合」「競技」「体育」「トランプのスコア」「駆け引き」「相手をだますこと」「たくらむこと」「トリック」「じょうだん」「からかうこと」「ふざけること」「獵の獲物の肉」「攻撃目標」「嘲笑の目標」「白鳥の群れ」「商売・職業」「度胸・勇気」

* bet : 「けしかける・そそのかす」が語源らしい。「賭ける・賭け」「きっと○○だと言いつ張る」「賭けたもの・賭けたお金」「賭けの対象となるもの」「山勘」「考え・思っていること」「何かを成し遂げるための方法・ノウハウ」

* venture : 「冒険」と語源的につながっているらしい。動詞でも名詞でも使える。「やばい＝危険な試み」「投機的ビジネス＝要するに、とんでもないほどのリスクを背負って、オオバクチ的なビジネスに、カネを賭ける」「やま」「いわば、清水の舞台からバンジージャンプする」「うへーっつ、そんな大胆な、という感じのことをする、または、そういうことを言う」「無鉄砲、向こう見ず、大胆不敵、ほぼ何も考えてない」

* chance : 「落っこちる」が語源らしい。「偶然」「めぐり合わせ」「とてつもないパワーに全部お任せする」「運・運命」「可能性」「勝ち目」「見込み」「機会・いわゆるチャンス」「好機」「賭け」「危険」「冒険」「不運」「たまたま〇〇する」「クツか下駄かスリッパを投げて、一か八かでやってみる」(※オバマ氏が、現在、実行中)

以上ですが、語源だけで十分のようです。「そそのかされて」「お楽しみ」をして、図に乗って「冒険」をし、「落っこちる」。うーむ。やっぱり、CHANGE は CHANCE ですか。ピンチはチャンスですか。そうになると、結局、

* 「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」

でお茶を濁すしかなさそうです。

で、思ったのですが、

* 生きるためには、ヒトを含めたあらゆる生き物が、意識的か無意識のうちにかに関係なく、選択と排除をしている。基本的に、Aを選べば、Bを捨てなければならない。もちろん、AとB両方を選択することも可能であるし、両方を放棄する事態もあり得る。

みたいです。

これって、立派な賭けです。話をヒトだけに限定し、後半のややこしいところを省略すると、

*ヒトは、故意に＝よく考えて＝マジに＝真剣に＝一生懸命になって、または、何となく＝気まぐれに＝テキトーに＝でたらめに、何かを選び、何かを捨てて、生きて＝前に進んでいる。

ともいえます。で、個人的にすごく気にかかるのは、

*「故意に＝よく考えて＝マジに＝真剣に＝一生懸命に」と「何となく＝何も考えずに＝気まぐれに＝テキトーに＝でたらめに」とのあいだに、違いがあるだろうか？

です。

確率とかがからんでくるとすれば、前者の「よく考えて」を「確率を考慮に入れて」としてもいいです。結果として、違いはあるのでしょうか？ 確率・統計に半端じゃなく詳しいらしい人が考え出したという金融工学とか証券化とかいうものの誤作動＝エラー＝「こんなはずじゃなかった！」が、引き金となって、金融危機や信用危機が起こり、今の不況を招いているとするなら、「よく考えて」という部分に懐疑的になります。

*プロならプロらしく、しっかりやってちょうだい。

と文句を言いたくなるのは人情ではないでしょうか。

経済と金融には、めちゃ弱いので、「しっかりやって」なんて文句を言っても意味があるのかさえ、見当もつきません。実際、どうなんですか？ この方面にお詳しい方、どう考えていらっしゃるんですか？ 新聞の経済欄や、日経の電子版、英米のその手のニュースサイトを覗いてみても、何だか、

*プロの人たちみんなが迷っている＝途方にくれている

としか思えません。週末なんかに競馬新聞を手に肩をひそめている人たちの様子と、酷似＝激似です。

*

やっぱり、

*カジノ資本主義という比喻

に加担したくなります。それとも、いわゆる「金融危機」はとんでもない「わけあり＝陰謀＝一部の超あたまのいい人たちの企んだ悪さ」で、あれはあれで「正解」だったとか？ 最初から毒饅頭だと知っていて、故意にばらまいたやつらがいる。慌てた振りをしながら、内心は「しめしめ」とか？ そして、世界中の超お偉い方たちは、そのことを薄々知っていて、いちおう慌てた振りをしてみせている。自分たちは、それなりにお金がたんまりあるから、「まっ、いっか」って感じ。

それより、スキャンダル＝陰謀がばれるリスク＝大混乱のほうが、やっかいだ。もしも、そうなら、「一部の人たち」以外の、超あたまがいいわけでもなく、超お偉いわけでもない、圧倒的多数の人たちは、とんでもない規模で馬鹿を見ているということになります。ああ、こわい。誇大妄想＝トンデモな考え＝杞憂であることを祈ります。

*

ところで、さきほどの問題、

*「故意に＝よく考えて＝マジに＝真剣に＝一生懸命に」と「何となく＝何も考えずに＝気まぐれに＝テキトーに＝でたらめに」とのあいだに、違いがあるだろうか？

ですが、結論から申しますと、

*「イエス・アンド・ノー」だ

と思います。

まず、「イエス」から説明します。ヒトが生み出した＝人工的なものとして存在している、

*理工学系の分野においては、コンピューターの仕組みの基本原理となっている「0／1」（2進法）に代表される2項対立が機能している。Aを選択すれば、Bは排除される、というきわめてシンプルな運動が原理となっている。したがって、「必然性 vs. 偶然性」「意味 vs. 無意味」「有 vs. 無」「指向性（or 志向性）vs. 無指向性（or 無志向性）」といった対立が有効性を備えている。

らしい。

具体的に言い換えれば、たとえば、

*機械・器械は、「故意に＝よく考えて＝マジに＝真剣に＝一生懸命に」設計し、製作し、操作しなければならない。エラーや不具合や誤作動には、適切に＝「故意に＝よく考えて＝マジに＝真剣に＝一生懸命に」対処しなければならない。

と言えそうです。

一方で、その他の森羅万象においては、さきほどの問いに対して「ノー」と答えてもいいのではないかと思っています。さらりと書きましたが、確認のために、強調しますと、ヒトが生み出した機械・器械以外の全部についての話ですよ。宇宙的なレベルの話です。

ちなみに、このあいだ（※2008年）日本人および日本出身の方々4名がノーベル物理学賞と化学賞を受賞されましたが、あの人たちの専門とされている領域も含んでの話です。あの人たちの「高尚な＝学術的な＝専門的な」お話をお聞きに、あるいはお読みになりましたか？

* 「対称性の破れ」

という、何だか、面白そうなことが書いてあったので、自分としては珍しくマジになって、何度も読み返しました。すごく摩訶不思議＝あやしい＝シュール＝かなり吉田戦車している＝尋常ではない＝「ひょっとして」テキトー＝良く言って禅問答＝悪く言うと出来の悪いギャグ「みたい」＝「でも」すごいこと「らしい」でした。

あくまでも個人的な感想＝妄想＝誤解＝浅知恵ですけど。とはいうものの、あの人たちが、研究用にお使いになっている、

* 機械・機器・器材は「故意に＝よく考えて＝マジに＝真剣に＝一生懸命に」でなければならぬ。

しかし、あの人たちが研究なさっている、

* 現象は、必ずしも「故意に＝よく考えて＝マジに＝真剣に＝一生懸命に」である必要はない。「何となく＝何も考えずに＝気まぐれに＝テキトーに＝でたらめに」であってもかまわない。

のではないかと、「ほぼ想像＝多分に妄想」しています。

このへんについては、きわめて生意気な＝身の程をわきまえない＝「あほでばかでおたんこなすな」ことを書いていることは、百も承知です。このブログは、学術や研究や学問ではなく、あくまでも。楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくやろうよ、お勉強ごっこ」ですので、ご勘弁願います。ただし、本気です。正気と言う勇氣も自信もさらさらありませんが、本気なのです。

* 「あんた、ほんまもんやから、こわいわー」

と言われるのは覚悟のうえでございます。なんで、こんなとほうもないことを書いてい

るのかと申しますと、「かく・かける（１）～（８）」シリーズ（２００９-０５-１４～２００９-０５-１９）を書いてきまして、いちおう、とりあえず、次のような結論というか、感想をいただくに至ったからです。

*森羅万象は、暴力的なまでに圧倒的な偶然性に侵され＝犯され、支配＝制御されている。必然性は、偶然性の反対ではなく、偶然性の一側面にしかすぎない。

みたいです。

以上を簡単に直感的にイメージ＝体感的に言うと、次のようになります。

*地球も含めて宇宙にある「何でもかんでも」が、半端じゃないすごいパワーの持ち主、「テキトー＝気まぐれ大魔王」の、「けん玉遊び」に付き合わされて、もてあそばれている。「何でもかんでも」（当然、ヒトも含まれる）が、「木製の玉」であることは言うまでもない。しっかり糸でつながっているから、逃げようとしてもダメ。宙ぶらりんか、投げ出されて、てんてこ舞いするだけ。どうやら、大魔王は、「けん玉遊びが下手らしい」という有力な説があり。ああ、大変。

らしい。

あとは、ちょっとややこしいですが、辛抱してお読みくだされば嬉しいです。

*ヒトは、ともすると偶然性と必然性を対立するものとして知覚するが、それは言語に起因する錯覚である。

*ヒトは、自らの知覚できる枠のなかで支配＝制御できるものやことや現象に、必然性を見いだすが、それを枠外に当てはめることはできない。

*ヒトは、自らの知覚を基盤にしたうえで、自らが操作可能な機械・器械や仕組み・仕掛けを、設計し、製作し、また、実際に操作し、エラーや誤作動や不具合を修正してい

る。しかし、それは、森羅万象を暴力的なまでに圧倒的な力で、侵し=犯し、支配=制御している、偶然性とはおそらく無縁の微力であり、圧倒的な偶然性のまえ=もとでは、徹底して無力さをさらすしかない。

*言葉を、原点とせざるを得ない条件下に置かれているヒトは、その言葉を利用することにより、自らの知覚できる枠のなかで支配=制御できるものやことや現象（これには、確率・統計も含まれる）を日々体験している。それは、自由さとも錯覚される、限定された力を持っているからであるが、もしも、ヒトが身の程をわきまえず、偶然性の反対は何かという問題を、言葉で処理しようとする願望をいただいたならば、偶然性の反対は「自由」という名の「不自由さ」であると言えよう。

以上のように、妄想しております。

というわけで、

*「故意に=よく考えて=マジに=真剣に=一生懸命に」と「何となく=何も考えずに=気まぐれに=テキトーに=でたらめに」とのあいだには、日常的レベルでは、差はなく、おそらく、学問的レベルにおいても、差はなく、個人の「自由=不自由」にまかされるべき問題である。

と思っております。ですので、

*「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」

を広く=狭く理解するなら、

*圧倒的なテキトーさを覚悟して、生きる=人生を送るしかない。

ということになり、精神衛生上、今、述べたような戯言は忘れて、「故意に=よく考えて=マジに=真剣に=一生懸命に」なり、「何となく=何も考えずに=気まぐれに=テキ

トーに＝でたらめに」なり、自分の「お好み」で「無理をすることなく」時を過ごすのが、

*かしこい生き方（※「ビジネス書」という名で売られている「処世術」本で、似たり寄ったり＝手を変え品を変え＝ほぼ同じ＝新しければ売れる式に書かれていること）

だと思えます。

*

蛇足を申し上げるとすれば、

*自分自身の「快・不快」に忠実に生きましょう＝行きましょう。

つまり、

*気持ちよければ、それでいいじゃない。

となります。

というわけで、もし、「不快」でなければ、あすも、このサイトに訪ねてきて、ごいっしょに遊びませんか？ あすは、できれば、「かく・かける（1）～（8）」シリーズの補遺＝おまけ＝付録＝追加の第3弾（最終回）として、「書く・書ける」について書くつもりです。何とか、書けるといいのですが――。

きょうの記事の冒頭で、ケータイのダイヤルボタンの配列を利用しての、「賭け・賭ける＝確率」と「書く・書ける＝エクリチュール」についての、「私家版マラルメだじゃれごっこ」をしましたが、基本的には、あんな話になりそうです。いえ、もっと真面目にやります。

では、お待ちしております。

09.05.22 書く・書ける (1)

◆書く・書ける (1)

2009-05-22 08:56:48 | 言葉

とにかく、すごい剣幕で怒っていました。ケータイ小説について、です。何かの雑誌で読んだのです。要約しますと、次のようなことが書いてありました。「ろくに小説を読んだこともないような者たちが、クズみたいな文章で、クズのような内容の小説を携帯電話を用いて書いている。特に、頭に來たのは、これまで小説なんて全然読んだことがない、などとのたまわっていたことである」。だいたい、以上のような意味の批判でした。

既存の作家なのか、編集者なのか、文芸評論家と呼ばれる人なのか、覚えていません。これに似た意見を、いろいろな媒体でいくつも見聞きしたような気がします。こういうのは、批判でも非難でも見解でもなく。悪態＝罵倒と申します。こうした類のものは、書いてある内容を考えてはいけません。中身に意味はありません。悪態＝罵倒とは、感情の発露＝表れ＝現れです。よく、企業のクレーム係のヒトたちが、言いますよね。別に内容は聞かなくてもいいから、とにかく、まず、相手にしゃべらせろ。それで90%は解決だ。なんて。

それとほぼ同じです。悪態＝罵倒に対しては、その内容について本気で考えるのではなく、その裏＝根底にある「感情」だけを読みとればいいのです。で、そういう不愉快なことは忘れればいいのです。ケータイ小説に対する悪態＝罵倒の数々を分類し、フィクション化し、個人的に「感情語」に翻訳すると、以下ようになります。

*

A「嫉妬」＝本来なら「感情語」で、「くやしーい」とか、「ぎゃあー」の一言で済むのに、なまじっか知性や痴性が邪魔をして、次のように長く語ります。

「こんなに汗水を流して、血の出るような努力を重ねて、日本文学を継承するという崇高なる使命感をもって、たくさんお勉強をしてきた、このわたしの小説が売れなくて、何であんな文学的素養のない者たちの駄文が売れるのでしょうか。危険です。文学は危機に瀕しているのです」

このような具合ですが、みじめっらしいですね。

*

B「恐怖」＝本来なら「感情語」で、「やべーよ」とか、「お金がない」の一言で済むのに、なまじっか知性や痴性が邪魔をして、次のように長く語ります。

「このままじゃ、困る。現在、出版界は、危機に直面している。敵はネット、つまり、インターネットとケータイにあることは確かだ。それにしても、われわれの劣勢は、どうして起こっているのか？ われわれのどこが悪いというのだ？ これでも、〇〇大出だぜ。おら、エリートだど。さっぱり分からない。せっかく、高いカネを払って、大手の広告代理店に請け負わせて、HPを作成させたり、ネットの特性を利用したマーケティングとやらを各種試みさせているものの、成果は芳しくない。発想の転換、パラダイムシフトが求められているのかもしれない。ビジネス上有利だと割り切れれば、あいつらを利用しない手もないではないか。ちょっと、擦り寄ってみるか」

という感じですが、いかにも往生際が悪そうですね。

*

C「迷い、または動揺」＝本来なら「感情語」で、「どうしたらよかんべ」とか、「!？」

の一言で済むのに、なまじっか知性や痴性が邪魔をして、次のように長く語ります。

「もう食っていけねーよー。文芸誌からの原稿の依頼は、どんどん減っている。講演会やトークショーへのお呼びもない。非文芸誌からも、声がかからない。このままじゃ、マジで飢え死にするぜ。この間みたいに、変装して、深夜のコンビニで働かせてもらおうか？それにしても、〇〇の野郎は、あちこちのウェブサイトに登場しているけど、どういふコネがあるんだ。性格悪いから、聞いても教えてくれないだろうなあ。いっそ、「ケータイ小説文学論」つーのを、酒でも飲みながら書いて、一山当ててみようか」

うーんと思わずうなってしまうほど切実そうですね。

*

D「思考停止」＝本来なら「感情語」で、「なんとか言ってやってくださいよ、〇〇先生」(※たいてい、テレビのコメンテーターの名前が入ります)とか、「えっと、あれ何だっけ？」(※何かを思い出そうとしています)の一言で済むのに、なまじっか知性や痴性が邪魔をして、いや、この場合には、「知性や考える力」はないのですが、次のように長く語ります。評論家とか、事情通とか、識者と呼ばれる人たちの言葉の受け売りや、パッチワークつまり継ぎ合わせになります。したがって、論旨は支離滅裂になります。

「ケータイは国語を乱します。ケータイは青少年の健全な育成の邪魔になります。ケータイ小説はクズです。ケータイ小説に文学性は皆無です。ケータイがらみの未成年を犠牲者とした事件が増えています。国家主導で未成年のネット規制を実施すべきです。出会い系サイトなんて、口にするのも汚らわしいです。ケータイリテラシーを学校で学ばせましょう。未成年のフィルタリングサービスを義務化すべきです。未成年者を有害情報から保護しましょう。ケータイを使用すると電磁波を浴びることになります。ケータイ小説って、軽薄な響きがありますよね。ところで、モバゲーって何ですか、〇〇先生？ついでにネットが廃人とかいうものについてもご教示願います、〇〇先生」

意味や実体を知らないというか、考えたこともない言葉をつなぎ合わせてわめているという感じがしますね。

*

E「八つ当たり」＝本来なら「感情語」で、「何だかしんないけど、むかつくなあ」とか、「こんちくしょう」の一言で済むのに、なまじっか痴性と血の気の多さと性格の悪さとがわざわざいして、次のように長く語ります。小さな飲み屋なんかで、ママを相手にぼやく、酔っ払いのセリフが典型です。

「何がケータイ小説だ。きょうは、会社の帰りにパチンコで一万損したし、今月の営業成績は最下位まちがいなさそうだし、何がケータイ小説だ。ママ、おかわり！ 昨日の夜、公園でジョギングしてたら犬のうんちは踏むし、誰が置いたかわかんないバケツを蹴飛ばしてつま先を怪我するし、ふんだりけったりじゃねーか、何がケータイ小説だ。外回りさぼって、ネットカフェで2 c h入ってXBOXの悪口を言ったら、十人くらいに囲まれてよってたかっていじめられるし、何がケータイ小説だ。ママ、おかわり！ ネットカフェを出たら、家からケータイに通話が入って、宅配便ででかい荷物が二個も届いたっておふくろが言うし、よく考えたら、先週、酔った勢いで、夜中についテレビ通販をやって歩行器を買ってしまって、そんな時すごくセクシーな声の女の人が、ちょっと早いですけど彼女へのクリスマスプレゼントにもう一台なんてどうですか、なんて言われて、ああいいねえ、なんて返事をしたっけ。おれ、彼女なんていねーのに、何がケータイ小説だ。ママ、おかわり！」

これは、とりあえず酔いがさめるのを待つしかないようですね。

以上です。

*

ちなみに、個人的には、

*ケータイ使用に対する、国家によるさまざまな規制には反対

です。詳しいことは、「なぜ、ケータイが」2009-01-22 と「ケータイ依存症と唇」2009-01-27 に書いてありますので、ご興味のある方は、ぜひ、ご一読ください。

さて、ここではケータイそのものではなく、

*ケータイ小説について

お話ししたいと思っています。

結論から申しますと、ケータイ小説はクズだとは思っていません。新しい形態（ケータイ）の小説だと考えております。また、ケータイ小説の書き手が本（※特に既存の小説）を読んでいないと発言したとしても、それは、ご本人が気づいていらっしゃらないだけで、実際には、本（※特に既存の小説）以外から、たくさんの言葉の切れ端を

*「読む」

という経験を積んでいるはずです。だからこそ、

*「書ける」

のです。逆に言えば、

*読んでいなければ書けません。

これって、

*文学理論

的に申しますと、きわめて「重要な原理＝当たり前のこと＝あたり前田のクラッカー（※ネタが古くてすみません。リユースです。オジサンがやっているブログであることが、理由です。要するにオヤジギャグ）」なのであります。同時に、こんな理論なんて、どーで

もいい、ことでもあります。

また、小説を書くのに不可欠な、語り＝ストーリーテリング＝展開の仕方、読者を飽きさせないための小道具、読みやすさのテクニック、といったさまざまなスキルやパーツは、別に、既存の作家、まして古典的文学作品を読まなくても、身につけることができます。

テレビドラマ、映画、CM、雑誌の記事、知り合いとの会話や雑談や馬鹿話、身近な体験、夢でみたこと……といったさまざまなものやことや現象が発している「トリトメのない記号＝まぼろし」という形で、あるいは「ニュートラルな信号」という形で、日々体感＝体験＝体得しているからです。

「トリトメのない記号＝まぼろし」とか「ニュートラルな信号」が何かについては、ぜんぜん気にすることはありません。もし、ご興味がありましたら、「かく・かける (1)」2009-05-14 の真ん中あたりに、このブログでよく使うツール＝玩具の説明が1) 2) 3) と3ヶありますので、そこだけを斜め読み願います。

面倒な方は、もちろん、お読みになるにはおよびません。「トリトメのない記号＝まぼろし」も「ニュートラルな信号」も、とりあえず「何でもありー」の一種だと、ご理解いただいて差し支えありません。

*

で、

*ケータイ小説の未来

というか、今後ですけど、たぶん、このまま続くと思います。テレビが登場したとき、映画やラジオや紙芝居がなくなると、嬉しそうに言う、意地の悪い＝性格の悪い＝根性の悪い評論家たちがいたらしいですが、今も映画とラジオと紙芝居はありますよね。それと同じです。

いわゆる純文学も、いわゆるエンターテインメント小説も、いわゆるライトノベルも、いわゆるBLも、いわゆるケータイ小説も、いわゆるネット小説も、シェアの増減＝変化はあるでしょうが、それなりに共存していくと予想＝妄想しております。ステゴザウルスや、ドードー鳥や、ベータマックスや、おニャン子クラブのように消えることはない、と信じています。むしろ、さらにまた、

*新しい形態（ケータイ）小説

が現れるに決まっています。それが、ヒトのたくましさ＝厚かましき＝凶々しさ＝頼もしさです。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「書く・書ける（2）」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます】

09.05.22 書く・書ける（2）

◆書く・書ける（2）

2009-05-22 09:19:21 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「書く・書ける（1）」の続きです。】

さて、今回をもちまして、「かく・かける（1）～（8）」シリーズ（2009-05-14～2009-05-19）の補遺＝おまけ＝付録＝追加はおしまいです。ですので、「書く・書ける」というタイトルのもとに、このブログの顧問＝アドバイザーであるマラルメ師がらみに、

* 「書く・書ける＝賭ける」

という問題について、総まとめみたいなことをしてみようと思います。マラルメという人は、昔々生きていたフランス人で、日本の中学校にあたる学校で英語教師をしながら、一般の人たちからは「わけがわからない」と言われる詩を書いていました。実際、何を考えていたのか、わけがわからない人です。そもそも、誰でもそうですが、

* 他人様の考えていることなんか「わけがわかる」わけがない。

のです。

だから、勝手に想像＝推測するしかないわけで、そうならば、いっそ、「□□さんが考えていたこと」なんか、無視して＝放っておいて、自分が考えていることを一生懸命に追求したほうが、人としてはまっとうなのではないか、とも思っております。というわけで、というか、何となくというか、このブログでは、なるべく

* 「▽▽さんがⒺⒺって言っていました or 書いていました」

は自粛して、

* 今、ここにあるものやことや現象と、手持の知識と記憶を総動員する。

という、無精で＝横着で＝出まかせ主義的なやり方で、ああでもないこうでもないや、ああでもあるこうでもあるという具合に、のらりくらりとゴタクを並べております。とはいいながら、書いているものは、いつやら、誰かが言ったり書いたことと激似で、

* オリジナリティもクリエイティビティも、まったくなし

というパッチワーク＝継ぎはぎ＝ごった煮を書いています。もろ、言い訳になりますが、これって、仕方がないんです。

*物「事」を「書く」ということは、「事欠く」ことである。

というのは、誰も避けることができない仕組み＝メカニズム＝仕掛け＝ネズミ捕りみたいなのです。

ですので、これから書くことも、いつやら、どこかで、誰かが言ったか書いたものにそっくりなものになると思いますが、いちおう、このシリーズのまとめとして書いてみます。

*

で、またマラルメが出てきますが、そのマラルメという人は、

*書くことは、「偶然性を装った必然」＝「人為的な偶然性」だ。人為的なものである以上、「賭け＝書け」は偶然の産物に見えて、実際は「やらせ＝出来レース」でしかない。したがって、ヒトは、その意味においてのみ、作品、たとえば、詩を「書ける」にしかすぎない。

みたいに考えていたような気がするのです。

マラルメの書いたものを原文のフランス語で読んだのは、20年以上も前のこと。それも、たいした読解力もないくせに、ちょっと読んだだけ。あとは、翻訳や、わりと質のいい解説書＝あんちょこ（※これって死語でしょうね）を読んだだけ。でも、すごく気になるので、過去の言葉の切れ端を大事に記憶しておいて、たまにあたまから引き出して、いろいろ考えてみる。ずっと、そんなことをしています。

言葉というのは、匿名的なもの＝誰のものでもないという特性があるため、本来なら、もう、マラルメなどという固有名詞にこだわることも、まして自分自身の名前という固

有名詞に執着する必要性も、ぜんぜんないのです。でも、言葉には言霊という言葉で言うしかない、畏怖すべき側面があることを、ひしひし感じております。で、たとえば、外国語の名前をカタカナに変換しただけのものではありますが、

* マラルメ

という言葉に、ある種のパワーみたいなものがそなわっている「気がして」たまらないので、シャーマン＝巫女（みこ）みたいに、その名＝言葉を媒介にして、言葉を引き寄せる＝引っ掛ける＝ナンパするという悪さをしているのです。

ややこしいことを書いて、申し訳ありません。この文章をお読みになっている方は、さぞかし、ややこしいとお感じになり、うんざりなさっているだろう、とは十分承知しております。でも、このようにしか、書けないのです。

*

さて、ちょっと視点を変えます。

「かく・かける (1)」2009-05-14 の下のほうでA～Fのついた図表を描きました。いちおう、コピペをさせてください。

A：ノイズ＋熱 ⇒ ニュートラルな「信号」：合図・視線・まなざし・表情・刺激

↓

B：ノイズ＋熱 ⇒ 経路・通路（光・電波・波動・電線・管・ニューロンなど）：線・糸・揺れ

↓

C : ノイズ+熱 ⇒ 回路・知覚器官・知覚組織・解読版・グリッド : 色づけ・分ける・知覚・見る・解読・解釈・識別 : 網・濾過記=フィルター・カメラ・マイクロホン

↓

D : ノイズ+熱 ⇒ スクリーン・膜・細胞・機械・器械・画面・スピーカー・発信装置=受信装置 : 幕・器

↓

E : ノイズ+熱 ⇒ 映像・音声・震動・運動・動作 : 動き・まぼろし・イメージ

↓

F : ノイズ+熱 ⇒ 賭け・ギャンブル・偶然 (accident) / 成功=不成功・当たり=外れ・作動=誤作動・正常=異状 or 異常・順調=不調・OK=エラー

以上なのですが、ちらりとだけ、見てください。

*ノイズ+熱

という文字が6つ見えますね。このもととなった「あう (6)」2009-05-02 の最後の3分の1ほどをまたもや、横着をして、以下にコピペしますので、これまた、ちらりとだけ、目をやってみてください。

*論理というものは、案外、熱いものなのかもしれない。

* 哲学や論理学だけでなく、数学や物理学を含む自然科学でもいいが、そうした学問を学ぼうとか、研究しようとするヒトは、しばしば強い情熱（感情的、情動的といったほうが正確かもしれない）をこころに秘めている。

* コンピューターは以前には電子計算機と呼ばれていた。つまり、機械である。最先端のもの、そして未来のものは、違った素材が主体になるというが、現在の主流のコンピューターは金属や鉱物が素材である。機械やコンピューターというと、冷たいイメージを連想されがちだが、実際に機械やコンピューターを扱っている人にとって、いちばんの悩みは熱をどう下げるかだという。機械は作動、つまり動く。動くからには熱を発する。熱は機械そのものの素材を変形あるいは変化させる。すると誤作動が起きる。したがって、「熱を下げること」がきわめて重要な課題になる。

* コンピューターも、医療用のカメラやメスも、どんどん小型化されてきている。機械や器材は、「動く」のが仕事である。動くためには熱を発しなければならない。熱くなると動きに狂いが生じる。コンピューターに話を絞ると、コンピューターは、1か0の二進法で情報を処理する。1か0という仕組みを実現するためには、どんなにあがいても、何らかの移動、変化、反応という形態をとらざるをえない。分子、原子、電子、というナノの世界であっても、熱から逃れることはできない。

* 数学者も、論理学者も、哲学者も汗をかく。禅僧も、修道士も、修道女も、教祖も、聖人と呼ばれるヒトも、みんな汗をかく。囲碁の名人も、チェスの達人も、汗をかく。コンピューターも、あっちっち。ナノテクも、それなりに、あっちっち。バイオテクノロジーもDNAも、それなりに、あっちっち。理論物理学も粒子も、それなりに、あっちっち。ノーベル賞も、きわめて、あっちっち。

* 脳でも、事態は同じらしい。ヒトは生きている限り、熱を発する。食物を摂取し排泄をする存在である以上、必然である。沈黙思考、冷徹な思考などとは、嘘だったのだ。

* プリズムは、勝手にきらきら輝くのではない。そんな魔法なんてない。見る者が、動くからきらめくのだ。

* コンピューターはもちろんのこと、「運動」（※つまり、移動、変化、反応）するものは、

常に熱を発せざるを得ない。冷たいようで、実は熱い。死んだようで、実は生きている。比喻を用いれば、蓮實重彦氏の著作のタイトル『批評あるいは仮死の祭典』にある「仮死の祭典」と言える。死んだふりをして、熱い。死を装っても、うごめいている。

以上です。

*

どうですか？

*熱

と

*動く

という文字がいくつも散りばめてありますね。

実は、これが、このシリーズをまとめる=束ねるキーワードなのです。当ブログは、支離滅裂=出まかせ=でたらめにはちがいないのですが、それなりに「流れ」みたいなものがありまして、個人的な書きものですから、当たり前と言え、それまでなのですが、とにかく、「つながっている」のです。

で、結論から申しますと、ここに来て、またその流れのなかで1つの節みたいなものが出てきまして、それが

*熱=動き=然=燃 (≒ ノイズ)

なのです。

*

では、説明させてください。

このシリーズでは、偶然性と必然性について、一貫して考え続けてきました。そのさいに手掛かりとしたのが「かく・かける」という大和言葉系の言葉の多重性＝多層性でした。これは、送り仮名を添えて「漢字+ひらがな」と表記することで、確認できます。

また、その作業の過程において、「当てられている」漢字の語義や「解字」を漢和辞典で調べることで、思いがけない発見もありました。で、ふと、「かく・かける」に当てる漢字だけでなく、

*偶然・必然

も「ついでに」調べてみたのです。で、びっくりしました。瓢箪（ひょうたん）から駒（こま）が出る。鳶（とび）が鷹（たか）を生む。という感じで、

*偶然に偶然出合って＝出会って＝出遭って＝出逢ってしまった

のです。

それまで出そうで出ない感じだったものが、一気に出ってしまった、と言ってもいいです。もよおすことなく出ってしまった。つまり、漏れ出ってしまった。お漏らしをしてしまった。粗相をしてしまった、とも、似ています。とにかく、

*偶然に、偶然に遭遇してしまった

のです。こういう時に、言霊の気配を感じちゃうのです。あれ一つ、という感じ。とにかく、結果を箇条書きします。

*偶然=遇+然

*遇：「あう」「遭遇=ひょっこりと思いがけずにあう」「もてなすことで、相手と関係し合う」「CHANCE」「たまたま=おととと=ひょっこり=あら、まあ」「似たもの同士が出あってペアを組む」「符号=符合=付合」「合体・ドッキング・性交（※比喩）・交尾（※比喩）・つがう（※比喩）」「熱い！ やばい！ 間違いない！」（※ご不快なお気持ちをいだかれた関係者の方々に、お詫び申し上げます。でも、すごく言ってるんです）

*然：「イエス」「OK」「それしかない」「.....みたいよ」「でもねー」「でもさあ、でもさあ」「.....だとしたら」「でね」「熱くなる」「燃える」「似てると思うけど、『燃』って字の親戚」「ジュージュー肉を焼く」「脂身を焼く」「『難』っていう字が意味する自然発火とも親戚」

*必然=必+然

*必：「ぜったいに（or きっと）.....になる／間違いない！」「あたりめーよー」「何が何でも.....するわ」「目じるしの棒くい（？）を、両側から当て木をして締めつけて（？）、動くことのないように、ずれることのないように、しっかり固定する（※なんのこっちゃ？ とにかく、力づくで動けない状態=「ほぼテゴメ」にするらしい）」

複数の漢和辞典で調べた結果、以上のような意味のことが書いてあったのです。

個人的には、びっくりしました。さきほど、ちらりと見ていただいた、2つの記事に出てくる

*熱

という言葉が、どうして気に掛かって仕方がないのかが、ぼんやりと分かってきたからです。

*

さて、ここからは、飛躍します。

めちやくちやくじつけます。まず、チャート化=図式化=カンニングペーパー利用=見える化します。

┌──────────┐

| 森羅万象=宇宙

| ↓ ↑

偶然性=遭遇=であう ↔ | 宇宙の揺れ=動き=膨張?

| ↓ ↑

| 熱の発生 (≡ ノイズの発生?)

└──────────┘

(知覚という枠内) (知覚という枠外)

┌──────────┐

必然性=人為=ヒトの意思・意志 |

↓ ↑ | =自由=不自由

人工物=機械・器械・機具・言語 |

_____」

以上のチャートを説明すると、以下のようになります。

*偶然性とは、絆（きずな）で結ばれた森羅万象のかけら同士が「であう」場＝可能性である。

*偶然性とは、森羅万象のかけらである割符の片割れ同士が符合する場＝可能性である。

*必然性とは、ヒトが偶然性を装った＝真似た結果として、作られた規則性＝整合性である。この前提には、ヒトが偶然性に必然性を見ている＝錯視しているという状況がある。この人為的な必然性の有効性は、ヒトが製作し操作している機械・器械類、およびそれらを利用するの諸システムにおいて、顕著に観察される。

*ヒトが自らに備わった知覚、特に狭義の言語を通して見た（＝錯視した）場合には、必然性と偶然性とは相反する＝矛盾するものとして知覚＝認識される。

*森羅万象＝宇宙が、常に、揺らぎ動いている（＝膨張している？）結果＝原因として、熱が遍在している。

*森羅万象＝宇宙が、常に、揺らぎ動いている（＝膨張している？）結果＝原因として、遍在している熱と、やはり遍在しているノイズとが、同じものである、あるいは、同じ特性を備えているかは不明。

*熱とノイズとには、ニュートラル＝匿名的＝特性を特定できない、という共通点のみ

られるのではないか？

以上が、偶然性と必然性についての個人的考察＝妄察です。以下は、「書く・書ける・賭ける」についての個人的考察＝妄察です。

1) 森羅万象である、「表象」たち or 「トリトメのない記号＝まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちの「間（※ま・あいだ・あわい）」に、ヒトは「何か」を見る＝錯視する＝知覚する。その「何か」は個人としてのヒト、あるいは、特定の集団としてのヒトによって異なる。

2) ヒトは、1) の過程において、見る＝錯視する＝知覚する「何か」に対し、自らの所有物である「しるし」を「しるす」習性がある。これを「書く」という行為の源泉とみなすこともできる。

3) ヒトは、2) の過程の次の段階として、見る＝錯視する＝知覚する「何か」を「分かるもの」に転じる。ここで、知覚だけでなく、言語が重要な役割を果たす。多くの場合には、知覚器官を用いた知覚よりも、脳内に深くつながりを持つ言語のほうが、より優勢になり、脳を中核とした認識作用を促進させることになる。また、言語のうちの話し言葉よりも、文字を用いた書き言葉のほうが優勢な道具として機能することになる。それは、文字の物質性、つまり、文字が保存＝記録、携帯＝流通＝運搬＝伝達＝通信、複製（※筆写 or 印刷）される特性を備えていることが、大きく寄与していると考えられる。「かく」は、「搔く」あるいは「描く」を経て「書く」へと発展し、特権化されたたと考えられる。

4) ヒトは、3) の段階において、2) の段階において学習＝獲得した習性を、具体的な行動に移す。

5) ヒトは、3) の段階において、「表象」の認知と「表象作用＝代理・代行の仕組み」を無意識に、あるいは、意識的に学習＝獲得する。

6) ヒトは、3) の段階において、4) と 5) でみた、言語を中核とした劇的な学習能力＝情報処理能力の獲得によって、テリトリーの発生と成長、集団行動の洗練化、およ

び、コミュニケーションの高度化を急速に前進＝発展＝発達させる。

7) 6) での急激な変化＝発達は、特定のテリトリー内の「であい」とその深化を加速化するのみならず、複数のテリトリー間での「であい」を加速化させる。

8) 7) の結果として、ヒトは「理・必然性・法・業・因果・意味・条理・有意味・有・在」という概念をいただくようになる。これにより、ヒトは、自らがこの惑星でもっとも優れ＝進化した存在であるという自信を得る。

9) 8) は、あくまでもヒトの幻想＝想像であり、ヒトが森羅万象の一部として、「表象」たち or 「トリトメのない記号＝まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちになり得る状況は変わらない。

10) ヒトは、森羅万象だけでなく、自らもまた森羅万象の一部として、知覚＝認識する。その結果、森羅万象と自らの両方を、1) で述べた、「表象」たち or 「トリトメのない記号＝まぼろし」たち or 「ニュートラルな信号」たちの「間（※ま・あいだ・あわい）」に、ヒトは「何か」を見る＝錯視する＝知覚する対象として扱うようになる。その「何か」は個人としてのヒト、あるいは、特定の集団としてのヒトによって異なることは、1) でみた通りである。

*

以上の1) から10) は、「かく・かける (6)」2009-05-18 にある、めまいを誘うほど長たらしい図表をご覧になりながら読むと、理解しやすいかと思います。いや、あの図はご覧にならないほうが、よろしいかとも思います。

ここまで、辛抱してお付き合いくださった方に、こころより感謝いたします。

なお、今回の記事で、テーマが一段落ついたので、あすは、「こんなことを書きました (その7)」の続きの「こんなことを書きました (その8)」を書く予定です。

09.05.23 こんなことを書きました（その8）

◆こんなことを書きました（その8）

2009-05-23 08:33:47 | 言葉

前回の「こんなことを書きました（その7）」2009-05-04 から 2009-05-12 の続きです。今回は、2009-05-13 から 2009-05-22 に掲載した記事のダイジェスト版です。短い解説とキーワードが書いてあります。

*「こんなことを書きました（その7）」2009-05-13：2009-05-04 から 2009-05-12 に書いた記事のダイジェスト版です。

*「かく・かける（1）」2009-05-14：「賭け・賭ける」と「占い・占う」に伴う「後ろめたさ」の根底には、「圧倒的なパワーに対する全面降伏」＝「負ける」＝「任せる」の心理があるのではないかと問いかけています。そのパワーの代理人としての占い師＝シャーマン＝まつりごとの主宰者と、その代理人の委託された＝でっち上げたパワーの機能を、紙芝居的に描いた過去の記事を引用しています。歴史的視点からヒトの成長のレベルへと、話を移し、赤ちゃんが「賭ける」および「占う」存在であることにも、読者の注意を喚起しています。このブログでよく使う「表象」「トリトメのない記号＝まぼろし」「ニュートラルな信号」を新しい切り口で、説明しています。キーワードは、「超越者」「代理＝代行」「表象作用」「シャーマニズム」「ネオテニー（＝幼形成熟）」「欲求」「生存率」「確率」「ノイズ」「熱」「偶然」「マラルメ」「ゲイ・サイエンス」です。

*「かく・かける（2）」2009-05-15：自分がギャンブルに縁遠いことを告白しています。そのため、個別の賭け事ではなく、「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」という立場から話を進める、との見通しを語っています。「かく・かける」を「漢字+ひらがな」に置換え、その意味の多重性＝多層性を紹介しています。また、その際に用いられている漢字の「解字」を調べた結果を報告しています。そうした過程から得た「かく・かける」のイメージを、「宙ぶらりん」と総括しています。「かく」と深い関係がある言葉として、「しるし・しるす・しるべ」について考察しています。このブログでよく使う「表象」「トリ

トメのない記号＝まぼろし」「ニュートラルな信号」を具体例を示して説明しています。キーワードは、「文字変換」「芥川龍之介」「『蜘蛛の糸』」「web」「net」「text」「印鑑」「スタンプ」「採点」「成績」「通知表」「落書き」「文字」です。

* 「かく・かける (3)」2009-05-16：この日の前編。国際関係・国際政治という分野が、文字通り「際＝あいだ」という空間で多種多様＝雑多な「信号」をやりとりする、あるいは、やりすぎず、きわめて混沌とした場であることを指摘しています。そこから、「間(＝あいだ・あわい)」という考え方に話を移し、それが「さい・際」であることから、マラルメの「さい・さいころ」へと言葉遊びによって飛躍し、その言葉の身ぶり＝運動によって、「信号」同士が出合う「偶然性」を読者に体感してもらおうという実験をしています。読者にそれが通じたかは不明です。混乱させるだけに終わったという感じがします。必然と偶然とを対立したものとする見方に懐疑的になっている点が、その後のシリーズの展開の萌芽ともみなせませす。キーワードは、「ポル・ポト」「カンボジア」「植民地」「仏印」「留学」「ホメイニ」「亡命」「シアヌーク」「中国共産党」「フランス共和国憲法」「基本的人権」「アルゼンチン」「サルゴジ大統領」「ハンガリー」「インテリジェンス＝intelligence」「情報＝information」「符号(※ふごう)」「符合(※ふごう)」「割符(※わりふ)」です。

* 「かく・かける (4)」2009-05-16：この日の後編。「書く」という行為の歴史の変遷を観察しています。このブログにおけるスタンスが「ブリコラージュ」であることを確認し、読者に理解を求めています。「しるす・しるし」へと話を進め、「しる・知る・領る」という言葉との関係を指摘し、「しる」が生物の「マーキング行動」にほかならないことに、読者の注意を喚起しています。ここで、ヒトの身勝手な行動を風刺しています。話は、再び「間(＝あいだ・あわい)」「際」に移り、この記事を書いている行為自体が、「あいだ」で「宙ぶらりん」の状態に身をさらす「賭ける」＝「書ける」ことであるということ、言葉の身ぶりによる、読者への「ほのめかし」として提示しようという、言葉の遊びによる実験をしています。本人としては私家版マラルメのパロディのつもりでしたが、今、再読すると、この試みも、読者に全然「受けず」＝「受信されず」に終わっていると思います。キーワードは、「クロード・レヴィ＝ストロース」「ブランド＝商標＝焼印＝烙印」「リーバイ・ストラウス」「リーバイス」「テリトリー」「おしっこ」「mark」「『ゴドーを待ちながら』」「サミュエル・ベケット」「I i / Y y」「inter-」「国語辞典」「イ・ビョンホン」「オールイン」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャック・デリダ」「モーリス・ブランショ」「蓮實重彦」「渡部直己」です。

* 「かく・かける (5)」2009-05-17：マラルメをゴドーのように待ち続けながら、訪れている気配が感じられないので、ややへこみ気味です。本人は本気なのですが、それを「オカルト的」と取られるのを懸念しています。日本という土壌＝風土において、「マラルメ

する」試みとして、日本語の韻文である俳句を取り上げています。俳句が、偶然性と即興性にいかに依存しているかを訴え、その源である連歌と俳諧に、読者の注意を喚起しています。連歌について、お勉強をしていたさいに「付合（※つけあい）」という「符号（※ふごう）・符合（※ふごう）」に似た語に遭遇した「符合（※ふごう）」に驚くと同時に喜んでしまいます。その「符合」に、マラルメの気配を感じたと自己満足しています。キーワードは、「表記」「思索＝詩作＝試作」「定型詩」「音節」「拍」「モーラ」「でまかせ」「アドリブ」「ジャズ」です。

*「かく・かける（6）」2009-05-18：偶然性の根っこにある、「丁（＝偶数）か半（＝奇数）か」という「単純な賭け」である2項対立の「うさん臭さ」をやんわりと指弾しています。ここで、これまでの調べものの結果を一覧するために、コピーペーストを利用し、長々としたリスト＝図表を作成しています。その最初と最後の部分だけを利用し、文学理論の1つである「読んだから書ける」という原則を紹介しています。また、俳句の不条理性についても、ノンセンスという言葉を使って考察しています。ここでも、読者に、言葉の内容で「説く」のではなく、言葉の身ぶりで「ほのめかす」という実験をしています。キーワードは、「いないいないばあ」「fort / da」「フロイト」「ジャック・ラカン」「読む／詠む」「定型詩」「吉田戦車」「不条理演劇」「ウジェーヌ・イヨネスコ」「ハロルド・ピンター」「サミュエル・ベケット」「松鶴家千とせ」「シュール」「高山宏」「高橋康也」「『エクスタシーの系譜』」「種村季弘」「『ナンセンス詩人の肖像』」「グスタフ・ルネ・ホッケ」「『文学におけるマニエリスム』」「sense」「nonsense」「古池や蛙飛びこむ水の音」「松尾芭蕉」「爆笑問題」「松尾伴内」です。

*「かく・かける（7）」2009-05-19：この日の前編。異形とも言える文字の表記の具体例を挙げて、ヒトがテリトリーにこだわり、異質なものを、よそのものを排除する習性があることを論じています。また、異質なものを思考停止により、排除する傾向に対して批判しています。幼いころに聞いて現在も覚えているある歌の歌詞が掛詞（※かけことば）だったらしいことに、今になって気づいた時の戸惑いを自己分析しています。自分を含め、ヒトがいかに忘れやすく、鈍感であるかを反省しています。また、当たり前だと思いついて入っていることが、いかに多いかについて警戒すべきだと訴えています。また、ある読者の方からメールをいただき、このブログの読みにくさを指摘されたことへの、返答を書いています。このシリーズでも、実験的に試みている、「言葉の内容ではなく、その身ぶりによって、テーマを示す」という方法、「意味の方向付けを故意に乱してずらす」という戦略について、直接的にいわば「種明かし」をしています。この部分は、再読すると、ギャグの説明のようで恥ずかしいです。実際、そうなのでしょうけど……。キーワードは、「ブルガリ」「BVLGARI」「トイザラス」「TOYS R US」「アンフィニ」「『あ』に濁点」「人権」「思いやる」「偶然性」「有楽町で逢いましょう」「フランク永井」「こぬか雨」「雨の御堂筋」「欧陽菲菲（※オウヤン・フェイフェイ）」「アルファベット」です。直接書かなかったキーワードは、「渡部直己」です。

* 「かく・かける (8)」2009-05-19：この日の後編。自分が知っている限りでのヨーロッパの言語のアルファベットについて触れ、その中で「I i / Y y」「U u / V v」「W w」の関係を説明し、「BVLGARI」が「BULGARI」でなくても、「変」ではないと指摘しています。実は「異形なもの」なのに、普段は「当たり前なもの」だと思ひ込み、思考停止状態になっている自分を反省する過程で、アルファベットと「あいうえお表」を例に挙げています。個人的には非常に愛着のある「カジノ人間主義」2009-01-30から、重要だと思われる部分を引用しています。連日、マラルメや偶然性について考え続けていたために、悪夢にうなされ、よく眠れなかったことを告白しています。キーワードは、「ブリコラージュ」「NHK」「外国語講座」「ロシア文字＝キリル文字」「歴史的仮名遣い」「丸谷才一」「ポル・ポト」「猛毒」です。直接書かなかったキーワードは、「比較言語学」です。

* 「占い・占う」2009-05-20：「かく・かける」シリーズ (1) ～ (8) の補遺としての記事、第1弾です。「占い・占う」の歴史的経緯のお勉強をしています。また、英語で「占い・占う」に相当する語についても、触れています。「予言」と「預言」の違いにこだわり、「予」「預」の中心となるイメージを漢和辞典で調べた結果を報告しています。真面目＝本気で、こじつけもしています。「かく・かける (1)」で引用した「紙芝居」を、再度、引用しています。宗教や占いにからむ問題なので、関係方面への気遣いを示しています。かつてテレビで見た、靈感占いについての思い出を語っています。次に、「予言・預言」の「言」にこだわって、かなり詳細な分析をしています。キーワードは、「幻想」「錯覚」「うらかた・占形・占象・ト兆」「fortune teller」「diviner」「予・余」「代理」「シャーマニズム」「まつりごと」「リチャード・ニクソン」「クリントン」「ブッシュ父子」「カーター」「レーガン」「フォード」「しるし・きざし・あらわれ」です。直接書かなかったキーワードは、「藤田小女姫」「言霊」「聖書」です。

* 「賭け・賭ける」2009-05-21：「かく・かける」シリーズ (1) ～ (8) の補遺としての記事、第2弾です。「賭け・賭ける」に必須の「確率・統計」が苦手で、扱えないことを恥じています。照れ隠しに、ケータイのダイヤルボタンを使ったオヤジギャグでお茶を濁しています。また、賭けやゲームが苦手であるという言い訳をしながら、旅行と音楽に縁遠いことも告白しています。ここでもまた、「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」と居直っています。英語で「賭け・賭ける」を意味する語を挙げて、体裁をつくろおうとしています。急にシリアスになり、金融危機と大不況についての個人的な見解を述べています。そこから出発して、偶然性について、突っ込んだ考察をしています。その考察の下敷きは、去年、ノーベル物理学賞を受賞した人たちの発見した、摩訶不思議な理論および現象です。その理論・現象についての解説を、新聞や雑誌で読んだ時に、理解はできないながらも、かなり大きな衝撃と影響を受けました。シリアスな話になったので、最後

は軽めの調子で記事を終えています。キーワードは、「gamble」「game」「bet」「venture」「chance」「金融工学」「証券化」「信用危機」「陰謀」「2進法」「2項対立」「機械・器械」「対称性の破れ」「クオーク世代の予言」「自発的対称性の破れ」「小林誠」「益川敏英」「南部陽一郎」「吉田戦車」「ビジネス書」「処世術」です。

*「書く・書ける(1)」2009-05-22:「かく・かける」シリーズ(1)～(8)の補遺としての記事、第3弾です。この日の前編。新しいもの、よそのもの、異形のもの、を、「思いやる」ことなく、ただ排除しようとするために、罵倒や悪態をつく一部の人たちに対する憤りの表明の1つとして、ケータイ小説への批判とも言えない言葉を発する人たちを、風刺しています。結果的に、ケータイ小説擁護論になっています。「ろくに本を読んでもいないのに」といった決まり文句の悪態のはらんでいる矛盾点を、文学理論を用いて批判しています。キーワードは、特にありません。

*「書く・書ける(2)」2009-05-22:この日の後編。「今、ここにあるものやことや現象と、手持の知識と記憶を総動員する」という、このブログのスタンスを説明しています。したがって、マラルメという固有名詞を使っても、それは歴史上存在したマラルメとは関係なく、単なる「記号」＝「信号」＝「言葉」＝「書くことを促す触媒」＝言霊であると主張しています。そのマラルメという言葉に、「おそらく」促されて、「偶然・必然」という言葉の「遇」と「然」と「必」を複数の漢和辞典で調べる気に「何げなく」なったことを述べ、その調べものの結果を報告しています。個人的には、大きな発見でした。「偶然性」と「熱」と「動き」とが、自分の中で「つながった」のです。ただし、ノイズについては、依然として不明です。その発見に促されて、「書く・書ける・賭ける」のつながりについても、自分なりに「とりあえず」意見＝感想を述べることができました。キーワードは、「オリジナリティ」「クリエイティビティ」「パッチワーク」「であう・であい」「間・ま・あいだ・あわい」「しるし・しるす」「わかる・わける」「表象作用」「代理＝代行」「言葉・言語」「理・必然性・法・業・因果・意味・条理・有意味・有・在」です。

以上です。

第 2 部 09.05.24～09.06.02

09.05.24 と、いうわけです (1)

◆と、いうわけです (1)

2009-05-24 08:54:52 | 言葉

トンデモ本というものに興味があります。トンデモ本に関する本を本屋さんで立ち読みしたくらいで、その詳しい定義は知りませんが、トンデモ本たちの紹介を読んでいて、わくわくぞくぞくするような、久しぶりに覚える複雑な皮膚感覚とでもいうべき「何か」を経験したのです。

この「何だか」分からない、わくわくぞくぞく感には、多分に性的なニュアンスも含まれています。妙に甘く懐かしいのです。性という「何だか」わけの分からないものに、本格的に興味を持ち始めた頃の、皮膚的+器官的むずがゆさに似ています。

そういえば、最近、いつだったか、

*このブログも一種のトンデモブログではないか

みたいなことを書きました。「えっ？ わたしって〇〇だったの？」という感じです。実際、そのようでございます。

で、トンデモブログという言葉がつかわれているのかを、グーグルで“トンデモブログ”という形で、ちゃんと“〇〇”式に括弧でくくって検索してみましたところ、約472件のヒット数が表示され、驚きました。もっとも、トンデモとブログがくっついていないケースもあるみたいなのですが、ヒトは同じようなことを考えるのだなあ、とあらためて実感しました。ただ、その検索結果に、何となくきな臭い=物騒な気配を感じたので、個々のサイトを覗くのはやめました。

振り返ると、小学校高学年から中学・高校という時期には、さきほど申しました、

*わくわくぞくぞく感=皮膚的+器官的むずがゆさ=下半身に生温かいお湯をかけられたような気分

を頻繁に感じました。ちょっと間違えると犯罪に走りそうな、

*衝動=欲求=「どうやって、自分を制したらいいのかわからない」気分

なのですが、これが男女に共通する感覚なのかどうかは分かりません。というか、恥ずかしくて他人様に尋ねたことはありません。

高校生の時、生まれて初めて「詩」を1編だけ書きました。短歌や俳句といった定型詩ではないのですから、自由詩とでもいうのでしょうか。その詩は破り捨てましたが、一部だけははっきりと記憶しています。

コンクリートを貼り付けた灼熱の地面に蜃気楼の立つこの都市は昼間からもう欲情している。

東京をテーマにした詩だったのですが、「欲情」していたのは、10代の後半に入って間もない頃の自分だったにちがいありません。誤解のないように、申し添えておきますが、トンデモ本にはいわゆるエロ本や猟奇的な内容の本ばかりが含まれているわけではありません。

あるにはありますが、それだけではありません。もっと多種多様=豊かみたいです。「トンデモ本」とは、レッテルです。単なる、あだ名です。それ以上でも、それ以下でもありません。念のため、このことは強調しておきます。

*

きょうは、なぜ、トンデモ本の話をしているのかと申しますと、

*「と」

について、考えているうちに、おととつという感じで、とんでもない方向にすべって行きまして、ふと気づいたところ、トンデモ本のほうにまで飛んでしまったのです。とんだお笑い話です、しゃれにもなりません。

と、いうわけです。

ジル・ドゥルーズという、もう、お亡くなりになったフランスの哲学者がいました。ピエール=フェリックス・ガタリという人とよく著作を書いていた。かつて、そのドゥルーズとよく並んで評された、ミシェル・フーコーやジャック・デリダに比べると、個人的にはあまり興味を引かれなかった人です。

興味が引かれなかったというより、何を言っているのか、何を考えているのかが、さっぱりとっていいほど分からなかったのです。自分の貧困なフランス語力を棚にあげて、邦訳に問題があるのかと思い、原文にも当たってみたのですが、フーコーやデリダと比較すると、やっぱり、分からないのです。

「波長が合わない」という、あやしげな言い訳がありますが、そんなフレーズを持ち出しなくなるほど、分からないのです。ただ、比較的良心的で、また良質だと思われるドゥルーズの解説書が何冊かありまして、それを読みました。

解説書ですから、分かりやすく書かれています。でも、ピンと来ない部分が多かった記憶があります。今では、そうした解説書は手元にありません。ただ、1つだけ、すごく印象深い解説の一節を覚えているのです。

* ドゥルーズは「と」の人だ

みたいな意味のことが、書いてあったのです。で、この1週間くらい、

* 「かく・かける (1) ~ (8)」シリーズ (2009-05-14~2009-05-19)

と

* 補遺＝おまけ＝付録＝追加である3種類の記事

を、誰に頼まれたわけでもないのに、せっせと書いていたのですが、そのなかで

* 「間 (=ま・あいだ・あわい)」

と

* 「際 (=さい・きわ)」

ということについても、ずいぶん、いろいろと考えていました。

話をもどしますが、トンデモ本と呼ばれている本たちの紹介文に目を通していたところ、

* トンデモ本とは、人が「ふつう」考えたり、観察したり、知覚する、いわゆるメジャーな部分ではなく、ちょっと、あるいは、とほうもなく、ずれた視点から、いわゆるマイナーな部分に光を当てている本たちである。

らしい、という感想を持ちました。

だから、比較的ネガティブな目で見られているようですし、「正しい」「正しくない」という、ヒト特有の傲慢な2項対立から見れば、どちらかと言えば「正しくない」とみなされていたり、いわゆる世間＝世の中＝社会という「曖昧模糊とした」＝「テキトーな定義しかできない」とした集団からは蔑視されたり、危険視されたり、無視されたり、規制されたりする存在であるみたいです。簡単に言うと、

*変

だと思われている本たちらしいのです。

個人的には「変」が好きなので、トンデモ本に興味を引かれているのだと思っております。また、自分自身、「変」だと言われたことが数知れずあります。また「偏」屈だとも、よく言われます。変な話ですけど、「変」と「偏」って、変に＝妙に似ていませんか？

トンデモ本というのは、隙間＝ニッチ（※隙間市場＝ニッチ・マーケットの、隙間＝ニッチです）をついているとも言えそうだし、「存在の大いなる連鎖」＝「森羅万象がつながる」＝「何でもかんでもがむすびついている」とも通じる部分があるし、「たとえ」＝「広義の比喩」＝「こじつけ」という仕掛け＝メカニズムを強引に追及＝深化している本も見受けられるし、とにかく、紹介文を見ているだけで、わくわくぞくぞくしてくるのです。つまり、

*いったい、何が書いてあるんだろう？

*いったい、何に取り付かれているのだろう？

*いったい、何がそんなに快＝「気持ちがいい」のだろう？

*いったい、何にそんな引きつける魅力があるのだろう？

*いったい、どこへ連れて行ってくれるのだろう？

と、いう感じです。あやういですね。

*

さきほど触れた「間（＝ま・あいだ・あわい）」と「際（＝さい・きわ）」という話ですが、これを「と」と言い換えることができるなあ、と思い、そういえば、ジル・ドゥルロー

ズという人についての解説書に、「と」の話が書いてあったなあ、と思い出したのです。

このブログは、あくまでも素人が誰に頼まれたわけでもなく、好きなようにやっている楽問＝ゲイ・サイエンスの場であり、学問や学術や研究とは関係ありません。ですの
で、

* ジル・ドゥルーズにおける「と」

などと、肩に力を入れた文章を書くつもりはないです。

で、「と」なのですが、ジル・ドゥルーズの場合には、正確にいうと、「et」なのです。フランス語では、「エ」にみたいに発音しますね。えっ？「t」はどこに消えたの？ と不思議に思われている方のために説明いたしますと、とても大雑把な言い方になりますが、フランス語では、「c, f, l, r」以外の子音が語尾に置かれた時には、発音しないのです。たとえば、Pas mal. (英語で言えば Not bad. = 悪くないね=いいね) は「パ・マル」みたいに発音します。s は読まない。l は読む。ということです。

で、et は英語の and と、とてもよく似たつかい方をします。すごく簡単に言うと、

* 「単語A et 単語B」なら、「AとB」

* 「語句A or 文A et 語句B or 文B」なら、「A、そして、B」

のように、つかわれます。

* 「と」と「そして」の意味がある

と考えていただいて、かまいません。

大切なことは、いわゆる接続詞であり、

* AとB、またはそれ以上の複数のものを「つなぐ」役割がある

ということです。このことだけは、つかんでおいてくださいね。

で、この

* 「つなぐ」

ということですが、「つながる」、あるいは、「つなげる」からには、AとBのあいだには、何か

* 「関係」

があるわけです。ここで、整理しましょう。

* 「間 (=ま・あいだ・あわい)」「際 (=さい・きわ)」「と」「そして」「関係=関・係」

以上の言葉たちに共通するのは、

* 「つなぐ・つなげる・つながる・つながり」

という意味=仕組み=働き=メカニズム=運動=表情=仕草です。

世の中、または、大きく言って、宇宙には、いろいろな、もの、こと、現象、がありますね。そうしたものを、言葉という道具をつかって、ヒトはつなぐことをしょっちゅうしています。想像力=創造力=騒々カってやつです。知性=痴性=稚性ってやつです。

だから、コンピューターをこしらえたり、月に仲間を送り込んだり、ベルリンの壁を破壊したり、2000年問題を乗り切ったり、ノストラダムスの大予言をぶつつぶしたりして、この21世紀を迎えているのです。

もっとも、世界中でお金が足りなくなっていて、どんどんお札を刷ったり、まだ5月だというのに、真夏のような暑さのなかで、マスクをして外を歩いているという異様な風景も見られます。でも、人間様が「大したもの」=「退したもの」だということだけは、確かなようです。

まちがっても、

* 人類が「トンデモ本」化している。

なんて暴言=妄言=名言=迷言を吐いてはなりません。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「と、いうわけです (2)」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしく願い申し上げます】

09.05.24 と、いうわけです (2)

◆と、いうわけです (2)

2009-05-24 10:21:08 | 言葉

【※以下は、本日掲載の「と、いうわけです (1)」の続きです。】

ところで、ここまで書いてきた記事のなかで、「と」と「そして」に当たる意味の言葉をどれだけ見つかったでしょう。たくさん見つかったはずですが。このブログでよく出てくる、

*で、

というのも、場合によっては、「そして」に近いつかい方をしていますね。

これ、癖なんです。「それで」なんかと比べると、ちょっと失礼で軽薄な響きのある言葉ですけど、愛着があって、つい、つかってしまいます。ごめんなさい。

で、「つなげる」のはいいのですが、どういう具合につながっているのかは、きわめて「曖昧=テキトー=あんまり考えていない」場合が多いですね。結論から申しますと、

*「AとB」に真ん中にある「と」は、「何でもありー」だ。

と言えそうなんです。

ややこしい言葉をつかうと、順接(=「それで」「だから」)あり、逆接(=「しかし」「だが」)あり、並列(=「と」「そして」)、理由(=「というのは」「なぜなら」)あり、等値(=「つまり」「言い換えると」)あり、例示(=「たとえば」「例を挙げれば」)あり・・・という具合です。

で、それを、さきほど述べたことと「つなげて」書くと、

* 「AとB」に真ん中にある「と」は、「何でもありー」＝「間（＝ま・あいだ・あわい）」＝「際（＝さい・きわ）」＝「関係＝関・係」という、「つなぐ・つなげる・つながる・つながり」という運動＝作用が、働いている＝機能している「場＝空間」である。

と、言えるように思います。

*

さらに、ややこしい言い方を紹介することになって恐縮ですが、一昨日まで、このブログで、シリーズでやっていて、「とりあえず」の「結論」とした部分から、ちょっとだけコピペをさせていただきます。

*偶然性とは、絆（きずな）で結ばれた森羅万象のかけら同士が「であう」場＝可能性である。

*偶然性とは、森羅万象のかけらである割符の片割れ同士が符合する場＝可能性である。

*必然性とは、ヒトが偶然性を装った＝真似た結果として、作られた規則性＝整合性である。この前提には、ヒトが偶然性に必然性を見ている＝錯視しているという状況がある。この人為的な必然性の有効性は、ヒトが製作し操作している機械・器械類、およびそれらを利用しての諸システムにおいて、顕著に観察される。

以上の3ケの文は、「書く・書ける（2）」2009-05-22 から、引用したものです。こうした視点から見ると、

*トンデモ本という存在たちが、偶然性に満ちた宇宙において、「正しい」vs.「正しくない」とか、「まっとうな」vs.「いかがわしい」とかいう、人為的な＝捏造（ねつぞう）された＝「でっちあげられた」整合性である「必然性」の支配する、「言語界」＝「想像界」＝「（ヒトの）知覚という枠内」のなかで、「偶然性」と戯れながら、人為的な整合性に逆らい、あるいは、人為的な整合性にずれるという形で、森羅万象のかけら同士を「であわせ」「つなごう」としている。

ようにも思えてくるのです。

その意味では、

*トンデモ本たちは、トンデモ本とは呼ばれていない本たちと、同じ資格と条件のもとに、「トリトメのない記号＝まぼろし」として、消費され、あるいは保存され、最後には廃棄される運命をたどり、「ニュートラルな信号」として、めくばせを交し合っている。

と言えそうです。言い換えれば、

*トンデモ本たちは、かつて異端の書や偽書とも呼ばれ焼かれた書物に似て、神「と」悪魔、本物「と」偽物、真実「と」虚偽、正「と」偽、正「と」負.....といった人為的な2項対立とは無縁であるかにみえる、現代物理学におけるある種の理論に似た、トリトメのない=不条理とも思える言葉の戯れと「似た」仕草や動作や表情を演じている。

とも考えられるのです。

とはいえ、きょうのこの記事が、

*トンデモ本擁護

と、とられることは本意ではありません。かといって、別にトンデモ本が悪い、と言っているわけでもありません。ただ、このブログは楽問=ゲイ・サイエンスをやっているので、何かを擁護するといったスタンスは似合いません。

あくまでも、楽しく、時にはくだらないギャグを飛ばしながら、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもあるごっこ、をしているだけです。その点をご理解いただければ、幸いです。

*

ところで、トンデモ本を研究する人たちが「と学会」という集団をつくっているらしいですね。ということは、類似品の「ト学会」も含めて、「と」について、ああでもないこうでもないとか、ああでもありこうでもあると話し合う、

*「と学」or「ト学」

という言葉=お部屋=トイレは、もうテナント締め切り=使用中= occupied = 「入ってます」状態だということになります。残念。

でも、「学問」があって「楽問=ゲイ・サイエンス」もあるくらいですから、「ト楽」とか「と楽」があってもいいかとも思いますが、そこまで「と」には思い入れが深くないので、とっとと引き下がります。とはいうものの、とってつけたような言い方になりますけど、

*と(=ト)って、とって不思議

です。例を挙げますね。

*「と」をひっくり返すとカタカナの「ス」に似ていっます。サッカーの試合の前なんか
にコインを放り投げて先攻後攻を決めますね。あれって、英語では、toss = 「トスをす
る」です。偶然性に任せる行為です。投げたコインが、ひっくり返ることもあるでしょ
う。そこに、トとスですよ。不思議じゃありませんか？ 偶然だよ、でたらの結果だよ、
と言われそうですが、まさにその点を問題にしているのですけど.....。

*上で書いたサッカーの儀式って、どこか「占い」=「ト」に似てませんか？ コインの表が
出るか、裏が出るかで、縁起をかつぐ人もいそうです。疑い深い人がいて、「このコイン、
作り物の偽物じゃないか？」なんてケチをつけて、相手が「裏 (= 仕掛け) なんてない
よ。うらない。そんな裏切りはしないぞ」なんて言ったりして.....。失礼しました。

*ところで、今つかっているワープロソフトで「けいせん (= 罫線)」って入力して、い
ろいろな形の罫線をみているうちに、「ト」「ト」なんて出てきちゃいました。

*そうそう、上の文で書いた罫線の「罫」にも「ト」があります。それもそのはず、「罫」
は、「け」とも読んで、易 (えき) = 易経、つまり、「当たるも八卦 (はっけ) 当たらぬも
八卦」でおなじみの、中国から伝わった占いと関係があります。だから、「卦 (け)」が
出てきちゃうのです。算木 (さんぎ) とかいうパーツに形として現れるものらしいです。
詳しいことは知りません。ごめんなさい。

*ちなみに、ハングルにも、日本語のカタカナの「ト」に似た「ト」みたいな形のパーツ
があって、子音を表す一部のパーツと組み合わせて「あ」「か」「さ」みたいな音を表す
母音の役割をしているようです。でも、そのつかい方などは、知りません。残念ながら
ら、ハングルでの「たちつてと」の「と」に当たる文字には、日本語のひらがなの「と」
に似たパーツも、「ト」みたいなパーツもないです。でも、しぶとく、めちゃくちゃこじ
つけようとするば、ハングルの「と」に相当する文字には「と」と「ヒ」に、ちょっとだ
け形が似たパーツが見えます。ちょっとだけ、嬉しいです。

*で、本屋さんでハングルの辞書や入門書を読んでいたところ、なんと「AとB」の「と」
(= 英語の and) に当たる語に「ト」に似たパーツがありました。何だか、ほっ「ト」しま
した (※この辺の、こだわりには、自分でもやや尋常でないものを感じております)。

*それはそうと、ひらがなの「と」は「止」の草体から、カタカナの「ト」は「止」の最
初の2画からつくられたそうです。自分は長いあいだ「外」からとったのだと思ったり
しました (変なところで訛ってすみません)。

*訛るといえば、「訛」のなかに見える「イ」。これも、見方によっては、かなり無理が

ありますが、「ト」の鏡像に見えないこともないです。えっ？ 見えませんか？ 見えることにしてくださいよー。で、不思議ではありませんか、「ほぼ日刊イトイ新聞」を主宰なさっているイトイさん？ そして、かつて「老人と子供のポルカ」(※老人「と」子供のポルカ)を、ひまわりキティーズ(※キテ「ィー」ズ)と一緒に歌っていた、故・左ト全(ひだりぼくぜん)(※左「ト」全)さん？ えっ？ もう、やめてケレ〜！ ですか？

何だか、「と」と「ス」と「ト」と「ト」と、それに「イ」までに、はまってしまい、ますますあやうくなってきましたので、このあたりで「と」めておきます。ご高齢の方から、やめてケレ〜！ なんて、叫ばれちゃったことですし……。

*

「と」は「イ」え、

今、考えて「イ」るのですが、上で、

「と」をひっくり返して「ス」にしたこ「ト」から始まり、その挙句には「イ」が「ト」の鏡像に見えるなど書いて「イ」るうちに、ヤバそうだと「スト」ップしなければ、自主的に「スト」ラ「イ」キしなければ、「ト」歯止めをかけよう「ト」したあたりから、逆に「ト」チクル「イ」がさらに悪化し、エ「ス」カレ「イ」「ト」し出したらし「イ」気配を感じるのです。

で、今、あたまのなかを駆けめぐっているのは、

*ノ「イ」「ズ」

「ト」「イ」言葉なのです。

ちょっと、ここで、コピペをさせてください。自分にトっては、トても大切なトなのです。

*「賭け・賭ける」2009-05-21:「かく・かける」シリーズ(1)～(8)の補遺としての記事、第2弾です。「賭け・賭ける」に必須の「確率・統計」が苦手、扱えないことを恥じています。照れ隠しに、ケータイのダイヤルボタンを使ったオヤジギャグでお茶を濁しています。また、賭けやゲームが苦手であるという言い訳をしながら、旅行と音楽に縁遠いことも告白しています。ここでもまた、「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」と居直っています。英語で「賭け・賭ける」を意味する語を挙げて、体裁をつくろうとしています。急にシリアスになり、金融危機と大不況についての個人的な見解を述べています。そこから出発して、偶然性について、突っ込んだ考察をしています。その考察の下敷きは、去年、ノーベル物理学賞を受賞した人たちの発見した、摩訶不思議な理論および

現象です。その理論・現象についての解説を、新聞や雑誌で読んだ時に、理解はできないながらも、かなり大きな衝撃と影響を受けました。シリアスな話になったので、最後は軽めの調子で記事を終えています。キーワードは、「gamble」「game」「bet」「venture」「chance」「金融工学」「証券化」「信用危機」「陰謀」「2進法」「2項対立」「機械・器械」「対称性の破れ」「クオーク世代の予言」「自発的対称性の破れ」「小林誠」「益川敏英」「南部陽一郎」「吉田戦車」「ビジネス書」「処世術」です。

以上は、きのう書いたばかりの記事「こんなことを書きました（その8）」2009-05-23から引用しました。

注目していただきたいのは、「摩訶不思議な理論および現象」というフレーズの前後です。キーワードに挙げられている、そのフレーズと関係しているらしき言葉にも、目を通してください。素人である、あるアホ＝自分が、物理学の最先端の話を読んだと、不思議な気持ちになった。それだけのことなのですが、個人的には只事ではなかったのです。

「かく・かける」シリーズ（1）～（8）というものを連日書いていて、「ノイズ」だけが、自分のなかでしっくり来なくて悩んでいました。シリーズは、一段落させて、「ノイズ」だけは「保留」しておこうと決めたのですが、今になって、その「ノイズ」が再びあたまのなかで蠢（うごめ）きはじめてたのです。

*

結論から申します。

*ノイズとは、出合う＝出会う＝出遭う＝出逢うべきペアの片割れを欠いた、「不幸で不遇な符号」である。

と、いう気がし始めたのです。

上で引用した文章の最後に並べてあるキーワードの1つ、

*「対称性の破れ」

という考え方とは、まったく関係がないのですが、その言葉の表面＝表情＝めくばせに触発されて、「ノイズ」という言葉が、自分のあたまのなかで、蠢き出したとでも言いましょうか。そんな感じなのです。なぜかは分かりません。ただ、さきほどの、

*と・ス・ト・イ・「ト」

と遊び始めたあたりから、妙な予感がありました。

* 出合う＝出会う＝出遭う＝出逢うべきペアの片割れを欠いた、「不幸で不遇な符号」たちは、破れて＝敗れて＝藪の中に紛れてしまっている。それが、不意にノイズとして立ち現れる。

というような気もします。やはり、これが、例＝霊＝零＝隸＝レ「イ」の、言霊になりきれないでいる＝成仏（じょうぶつ）できそこなままの、野異徒＝埜異頭＝ノ「イズ」＝

* ノイズ

なのではないでしょうか。

* 「ニュートラルな信号」にもなりきれないという意味では、憐れ＝哀れでありながらも、同時に、おどろおどろしく奇怪だとも感じられる「何か」たちを、「不幸で不遇な符号」＝ノイズとでも、名づけようか？「いや、名を与えてはならない」という声が空耳のように、それでいてはっきりと響く。その声は、たぶん、言霊の発したものではないか。

「かく・かける」シリーズ(1)～(8)で、片がつかなかったノ「イ」「ズ」が、気にかかりま「ス」。こぬか雨のように、木にかかりま「ス」。「イ」つか来て、その姿をあらわしてください「イ」。待って「イ」ま「ス」。「ト」願うしか、な「イ」ようで「ス」。

*

さて、きょうの結論です。

このブログは、やっぱり、「ト」ちくるっ「ト」るこ「ト」ばのフェテ「イ」シ「ス」「ト」のはしくれがやっ「ト」る、「ト」ンデモブログで「ス」。確信犯的＝意図（※イト）的＝本気＝ヤバ「イト」感じておりま「ス」。もう「イ」「イ」加減、くど「イ」「ト」も感じておりま「ス」。「ト」は「イ」え、

もし、よろしければ、また、このサ「イト」に遊びに来ませんか？ お待ちしております。今回は、この種のマジやべえオヤジギャグは自粛＝自重いたしますので、よろしくご願ひ申し上げます。

と、いうわけです。

09.05.25 あらわれる・あらわす (1)

◆あらわれる・あらわす (1)

2009-05-25 08:56:45 | 言葉

やっぱり見えます。人の顔です。似た人を知っています。何を見ているのかと申しますと、天井の染みなのです。20年以上前から、そこにあります。何度見たか知りません。やっぱり見えます。見ないつもりでも、見てしまいます。

人面〇〇については、「1カ月早い、ひな祭り」2009-02-03、「ひとかたならぬお世話になっております」2009-02-07、「人面管から人面壁へ」2009-02-10でも書きました。ご興味のある方だけ、ご一読願います。面倒な方は、もちろん、ご覧になるにはおよびません。このままお読み続けください。

よく考えれば、テレビも、映画も、写真も、絵も、パソコンのモニターも、「それ」そのもの」ではないにもかかわらず、「それ」を見てしまうという錯覚を利用したものです。でも、それは意図的にそうなっているのであって、

*不意に、出あってしまう。

という体験をしているわけではありません。

それなのに、出あってしまう。出あってしまった。出あってしまうだろう。出あってしまうかもしれない。そんなことがあります。ヒトをやっている以上は、あります。何かに何かを見る。これって、ヒトである限り、仕方がないみたいです。ネガティブに＝マイナス思考で、とられえることはないのです。

たとえ、不意をつかれたとしても、

*正々堂々と、出あってしまえばいい

のです。

そういう体験の恥ずかしさ＝後ろめたさ＝かっこ悪さを、薄めるためのいい言葉＝お

まじないの言葉があります。それは、

*あらわれる

です。

*〇〇が見える or 見えた

の代わりに

*〇〇があらわれる or あらわれた

と、するだけでいいのです。「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく、

*責任を転嫁する。

それだけで、だいぶ、気が楽になりませんか？

このように言葉は、時として、ヒトを助けて=救ってくれます。あの天井の染みのなかに見えるヒトの顔は、あらわれているのだ。そう思うと、気持ちがいくぶん、やわらぎます。

ところが、同時に、

*ぞくっとくる

のです。こっちに落ち度はない。責任はない。そこまではいいです。じゃあ、なぜ？ でも、なぜ？

*なぜ、あらわれるの？

責任だか何だか分からないものを転嫁=押し付けたのはいいけれど、その「押し付けられたもの」or「押し付けたこと」が気になってくるのです。なぜ？ どうしてなの？ 何が起こって、そうなっているわけ？

こういうことは、深く考えることではなさそうです。考えてみても、いいことなど、これっぽっちもないみたいだからです。

*

あとでもどりますが、話を変えましょう。

*あらっ！

って、言葉というか感動詞＝間投詞がありますね。あれって、どんな時につかいますか？
驚いた時につかうのが一般的だと思います。

*あれっ！ ありゃ！ ありー！ あっ！ あー！ あ！ あ"

なんてバリエーションもあります。

とにかく、「あ」というのは、ヒトにとってきわめて基本的な発声みたいです。あらゆる言語、あらゆる民族、あらゆる個人にとってなんていう大風呂敷は広げませんが、あつとうてきに、「あ」が優勢であることは確かな気がします。「あいうえお表」も、複数のヨーロッパの言語の「アルファベット」も、「あ」か「あ」の兄弟姉妹が先頭に来ますね。

対照的なのが、完全に口を閉じる「む」＝「m」や、少し口を開け気味にして発音する「ん」＝「n」です。

*あむ＝「am」

*あん＝「an」

と発音してみてください。

個人的な感想ですが、気が休まります。呼吸法でも、これに似たものがありますね。「あ」をいくぶん長めに発音すると、さらに気が落ち着く感じがします。どうですか？ そんな気がしませんか？ 何をやっているのか、あるいは、何を言いたいのかと申しますと、

*「言葉＝声＝音声」にはヒトのところに働きかける力＝パワーがある。

という、いつかどこかで聞いたような＝手垢の付いた＝紋切り型＝ステレオタイプ化された考え方です。でも、言えてませんか？ そうだなあ、と自分は納得しています。

で、ここで、めちゃくちゃなこじつけをさせてください。

*声を出す（※この時点で何かを見ている）⇒自分以外のもの（＝見てしまった対象）に働きかけようとする＝何かに出あうことを期待する or 予想する or 心構えをする（＝実

際には、既に見てしまった対象を頭の中で事後処理する) = ところを静める ⇒ 何かに出あってしまう

というメカニズム=仕組みがあるのではないのでしょうか。

長々と書きましたが、「ほとんど一瞬の出来事」ですよ。一方、上記のプロセスの順序をほぼ逆にして、

*何かに出あってしまう ⇒ その「何か=自分以外のもの」に働きかけようとする = その「何か=自分以外のもの」に出あうことを期待していた or 予想していたと自分に言い聞かす = ショックをやわらげる ⇒ 声を出す

というメカニズム=仕組みがあるのではないのでしょうか。

これも、瞬間的な出来事です。ところを静めたり、ショックをやわらげるのですから、たいていは、「出あって困るもの」に出あうのだと思われます。でも、「たった1人で出あう」よりは、ましなのではないのでしょうか。だから、声を出す=何かを呼ぶ=何かに働きかけようとする=何かを巻き込もうとする=何かを巻き添えにしようとする。

もっとも、「出あったもの」が「出あって困るもの」であるかどうかは、事後=出あったあとの話です。ただし、「出あい」の現場では、その出来事を処理する余裕はありません。この問題は、ここでは考えないことにしましょう。ややこしくなりそう、だからです。後日に回します。きょうは、なるべく簡単な話をしましょう。

*

で、話をもどします。

うちの天井の染みの話です。染みにヒトの顔に見えるものを目にした場合には、自分は、

*あらっ、こんにちは。

とか、

*あれっ、こんばんは。

とか口に出すようにしています。おまじないですね。

小心者なので、そうやって自分をごまかして=だましているのです。さもなきゃ、不

気味で仕方ないんです。何だか分からないものですけど、いちおう、挨拶をしておけば、何とかなるんじゃないか。臆病のなかに、そんな小ズルさ＝姑息（こそく）さも、ちらちらと見え隠れしていますね。

みなさん、以上述べたことや、それに似たようなことを、日頃経験していらっしゃるいませんか？ 別に、天井やトイレの壁の染みではなくてもかまいません。ちょっと飛躍して、お人形さんでも、小さなキャラクターグッズでも同じです。ミッキー、おはよう！とか、プーさん、きょうは元気かなあ、とか、モリゾーちゃん、ずいぶん色が褪せてきたねーとか、声を掛けてあげたり、しません？ 声は掛けないけれど、お気に入りの座布団や、帽子や、愛車のボディにそっと手をやったり、撫でる、なんていう仕草をすることがありませんか？

または、大好きなタレントがテレビに映った時に、思わず、こころのなかで声にならない声を発していることはないでしょうか？ 極端な言い方になりますが、もしも、そのタレントさんに、直接会って長く話をしたことがないとか、テレビを通してしか知らない間柄であれば、それって、立派な「天井の染みのなかのヒトの顔」ではないでしょうか。だって、映像＝イメージでしか見たことがないんです。そうそう、英語に、

* idol = アイドル = 偶像・偶像神・邪神（※偽りの神）・崇拜の対象

という便利な言葉があります。

面識のない有名人やタレントというのは、広い意味で、みな偶像（＝アイドル）と言えます。特に、現在は、偶像（※広い意味でとってください）たちが、テレビの映像、新聞や雑誌や巨大広告の写真、ケータイを含むネット空間での映像としてあふれています。それだけに、親近感が大きくなりすぎて、つい、現実の人物を見ているとか、場合によっては、知り合いの間柄にあるとか、付き合っているような気持ちになっているヒトも多いと思われれます。

ここで、このブログでよくつかうツールを、紹介させてください。以下に挙げる3語は、別個のものであるというより、森羅万象（＝「ありとあらゆる物、事、現象」）を対象にした「切り口」＝「切り分け方」みたいなものです。

1) 「表象」：「Aの代わりに「Aでないもの」を用いる」という代理＝代行という働き＝仕組みを利用したい場合に使用する。森羅万象が「表象」になり得る。

2) 「トリトメのない記号＝まぼろし」 or 「記号」：「そっくりなものがずらりと並んでいる」 and 「そっくりなものが他の場所にも数多く存在する可能性がある」 and 「お母さんのコピーとして生まれたものの、お母さんの権威や支配とは無縁で、いわばコピーのコピーとして存在している」という特性を強調したい場合に使用する。森羅万象が「記号」

になり得る。

3) 「ニュートラルな信号」 or 「匿名的な信号」 or 「信号」: 「ノイズと熱が常に存在する環境において、「まなざし=合図」の発信と受信が、一方的、または双方向的に行われる」というメカニズムを問題にしたい場合に用いる。森羅万象が「信号」になり得る。

以上の3つは、あらゆるものについてこじつける時につかいますので、トイレの壁の染みも、タレントやアイドルも、キャラクターやキャラクターグッズも、この3つを切り口に説明する=こじつけることが可能です。

たとえば、〇〇というタレントは、

1) ある人にとっては、神様の表象であったり、

2) ある時に芸能界に登場して、しばらく活躍し、いつか消えていくという意味では「記号」であり、

3) ある時期には「△△」というテレビドラマの□□ちゃん、同時に CEE というブランドのイメージキャラクター、また、政府主催のあるキャンペーンでは「**撲滅」のメッセージを送る役割を果たす「信号」だったり

するわけです。

*わたしの〇〇ちゃんと、トイレの壁の染みをいっしょにしないでちょうだい！

と不快なお気持ちをいただいた方がいらっしゃれば、謝ります。ごめんなさい。別に、批判をしているとか、ケチをつけているとか、悪気はありませんので、許してください。

さて、

*相貌的知覚

という言葉があるそうです。心理学のうちでも、発達心理学とかいう分野でよくつかわれる用語で、発達途上 or 未発達な段階にいる「幼児」や、「未開人」(※何と差別的な言葉なのでしょう)が、いろいろな事物に、ヒト・動物の顔や表情や動作を知覚する現象を指しているとのこと。大きな本屋さんで、この手の分野の教科書や辞典の記述を読んでもみると、今述べたのとだいたい同じようなことが書かれています。

個人的に、変だなあ、と思ったのが、

*発達途上 or 未発達な段階にいる「幼児」や、「未開人」

に、話が限定されていることです。また、「原始的」「未分化」という言葉も、頻繁に用いられています。この現象って、「オトナ」や非「未開人」でも、それこそ毎日経験していることじゃないでしょうか。ただ、ヒト一般に共通した、

*比喻＝たとえ＝こじつけ

くらいの言葉で片付ければいいのに、と思います。

勘違い＝思い込みをもとに、学者たちが大騒動をやっているような気がします。で、このブログは、学問ではなく、楽問をして遊んでいる場なので、「相貌的知覚」という学問的な定義は無視して、ヒトであれば誰もが（※視覚に著しい障害をもった方は別です。関係者の方々に、不快なお気持ちをいだかれた向きがありましたら、お詫び申し上げます）、

*トイレの壁や、天井の染みなどに、「何か」を見る

とか、

*トイレの壁や、天井の染みなどに、「何か」があらわれる

という現象について話を進めたいと思います。つまり、

*「幼児」＋「未開人」vs.「オトナ」＋非「未開人」

という嘘くさい＝子供だましの＝幼稚な（※ああ、こうやって無意識にコドモを差別してしまいます、反省）区別はしません。

で、思うのですが、どうやら、

*ヒトには、森羅万象をヒトにたとえて知覚する習性がある。

らしいのです。

*

ここで、でっかい話をしましょう。

*天体

という言葉がありますね。勘ですが、あれは、英語で言う

* heavenly bodies = celestial bodies (※ bodies は body の複数形ですね)

を訳したものではないでしょうか。明治以降、特に学問の分野で、さまざまな専門用語が、漢語にある語をそのまま拝借して新しい意味を担わせたり、漢字を組み合わせて新しい言葉をつくるという形で、日本語に取り入れられました。そして、現在にまで至っています。

もっとも、第2次世界大戦後は、ヨーロッパの言語である原語の発音やスペリングを、カタカナ化する方法が、流行＝一般化したもようです。

* body

の語源は、「胴・胸」で、もっと古くは「樽(たる)」だったと辞書に書いてあります。現在では、「身体、からだ、肉体」のほかに、何かの「主要な部分・本体」なんて意味もあります。できれば、辞書でちょっと覗いてみてください。意外な意味もありますよ。そういえば、

* 「スタンド・バイ・ミー」

がありますよね。あの映画の原題は「Stand by Me」で、同じタイトルの歌が流れます。原作はスティーヴン・キングの「The Body」という中編小説で、そのタイトルの意味を直訳すると「死体」ということになります。body は、英語をつかうさいには、ちょっと注意を要する語です。

たとえば、「彼の姿を庭で見かけた」という意味のつもりで「I saw his body in the yard.」と誰かに言ったとすれば、相手はびっくりするでしょう。「庭にて彼の死体発見」と取られる可能性が高いです。「I saw him in the yard.」なら、問題はありません。また、「ちらりと彼を見かけた」と言いたい時に、「part of his body」というフレーズをつかうのもヤバいです。「死体の一部」という意味に取られかねません。

で、もしも、天体という言葉が heavenly bodies = celestial bodies を訳したものであれば、ヨーロッパの「学問＝広義のサイエンス」の一部を成していた、錬金術の発想に基づくものだと思います。

詳しいことは知りませんが、錬金術は昔々のヨーロッパでは、キリスト教的な考え方とは対立するとはいっても、「ほぼれっきとした学問」であり、科学、とりわけ化学の発達を促したと言われていています。で、錬金術では、ミクロコスモス(＝小宇宙)は人間や

人間社会、いわゆる宇宙はマクロコスモス（＝大宇宙）と考えられていたようです。

ヒトを宇宙とダブらせて＝重ねて＝かぶせて考える。これは、ヒトを宇宙にたとえる、逆に言えば、宇宙をヒトにたとえる、ということです。宇宙というでっかいレベルから、ちっちゃなレベルに話をおとしましょう。

*

ヒトが2人集まると、最小の集団になります。相棒同士とか、コンビです。そのさいに、「この人は、わたしの片腕です」みたいな言い方をすることがあります。「手と足になって働いてくれている」「手助けをしてくれている」「アッシーです（※もう、死語ですけど）」などという表現もありますね。

もう少しヒトが増えてグループをつくると、「うちの社長のブレーンだ」、「暴走族の頭（※あたま＝かしら）」、「この部署は、われわれの組織の心臓部にあたる」、「前の会社の遺伝子を受け継いでいる」、「うちの部の面（※つら＝顔）汚しだ」、「この分野には足を踏み入れたばかりです」、「部の中で頭角をあわわす」……のように、ヒトのからだやその一部を、コンビや集団について語るさいに、たとえて用いることはよくあります。

ヒトの集まりだけでなく、まわりのさまざまな物や事や現象に、ヒトの身体をダブらせて＝重ねて＝かぶせるという言葉のつかい方は、あらゆる言語に共通しているのではないのでしょうか。1例を挙げれば、さきほどの「暴走族の頭（※あたま＝かしら）」のように、トップのヒトを captain＝キャプテンと英語で言いますが、cap は帽子のキャップと同じで、「頭」に由来します。フタや覆いを意味するキャップも同じですね。

無生物の例を挙げてみます。日本列島のおへそ。台風の目。テーブルの脚。椅子の背。車体（※ボディとも言いますね）。船体。路肩。関東と関西を結ぶ大動脈。広い口の瓶。パンの耳。ドアの取っ手。山の中腹。建物の骨組み。論文の骨子。本の背。船首。この催しの目玉。日本経済のアキレス腱……。

*

きょうのまとめをさせてください。

*ヒトは、何かに何かを見る。

*ヒトは、何かに何かがあらわれているとも考える。

*ヒトは、不意に、「何かを見た時に」＝「何かがあられた時に」、声を発することによって、その「何か」を手なづけようとし、同時に、自分の気持ちを安定させようとする。

る。

*ヒトの知覚する森羅万象を、このブログでは「表象」「記号」「信号」という切り口で説明することがある。

*ヒトは、ヒト以外の物や事や現象に、ヒトをダブらせて＝重ねて＝かぶせて考える習性がある。その時には、ヒトの視覚と視覚的イメージ、そして、言語の使用が大きな役割を果たす。

以上です。

今回から、数回にわたって、「あらわれる・あらわす」をタイトル、および「キーワード」にしながら、ヒトのいろいろな行為について、楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しいお勉強ごっこ」をしていくつもりです。

ところで、あなたの身近に、人面○○みたいなものはありますか？ もし、あれば、

*それが、実際には何で、何に見えるのか

を、よーく観察しておいてください。そして、時間の余裕があれば、それは「見える」のか、それとも「あらわれている」のか、ぜひ考えてみてください。それが、次回のテーマになる予定です。

また、あす、遊びに来てくだされば、嬉しいです。

09.05.26 あらわれる・あらわす (2)

◆あらわれる・あらわす (2)

2009-05-26 08:33:18 | 言葉

赤ちゃんって、生まれた時には、きっとびっくりしているでしょうね。

何なんだ～！ どうなっているんだ～！ なんて。

多分にオトナの視点から見た考えですが、「自分のまわり＝世界」と、たぶん心の準備もなく出あうわけです。「何か」というしかない「自分のまわり＝世界」が突然あらわれるのです。

そう思うと、ヒトは、ある日、わけもわからず不意に「何か＝自分のまわり＝世界」と出あい、そのヒトの一生をかけて、その「何か」を少しずつ習得していくのでしょうか。習得というより、その「何か」の一部になっていく＝同化していく＝染まっていく。

目線が合う、目線を合わせる、目線を交わす、めくばせする、笑みを交わす、触れる、飲む、しゃぶる、食べる、咬む、叩く、真似る、学習、獲得、発見、理解、アイデンティティ、気づき、悟り、喪失、オーラ、気、スピリチュアリティ、希望、絶望、期待、諦め、自分探し、コミュニケーション、交感、愛、暴力、祈り――さまざまな形で、「何か」との出あいを徐々に深めていく。

そして、いつか、わけもわからないまま不意に「何か＝自分のまわり＝世界」に別れを告げる時が来る。「何か」との出あいは、赤ちゃんが産声を上げた時から始まる。

ここで確認しておきたいのですが、「赤ちゃんを赤ちゃん扱いする＝言葉で馬鹿にする」ことはやめましょう。特に専門家と称する方に多いのですが、「未分化」「未成熟」「未発達」「未熟」「発達途上」「原始的」といった、

*** 当たり前を思えて当たり前ではないかもしれないこと**

を、オトナの視点から見た＝見下したような言葉で表現するのは、やめましょうよ。

少なくとも、このブログでは、やめたいと思っています。うっかり使用してしまった場合には、謝り、反省します。できるだけ、不用意に使用しないように気をつけます。

オトナは赤ちゃんや子どもに返ることはできません。つまり、赤ちゃんや子どものことは、勝手に想像するなり、かつての自分の体験の記憶を必死でたどるしかありません。

だから、決めつけるのはよみましょう。とはいえ、専門でご研究されている方々は、それなりの推論を結論として提出したり発表したりするのがお仕事です。それは百も承知です。難しいことを申しているではありません。

*** 赤ちゃんを、言葉で馬鹿にするのはやめましょう。**

これだけです。

*

で、赤ちゃんって、生まれた時には、きっとびっくりしているでしょうね。これは、単なる素人のオジサンである自分が、勝手に想像しているわけですけど、「びっくり」なんて言葉で言いあらわしていいのかと、気が引け、及び腰になるほど、「すごい」体験だと想像＝妄想しています。

きのう、「見える」と「あらわれる」について書きましたが、「見える」を広い意味で取りましょう。五感、そして、もしそんなものがあるとすれば、第六感を総動員しての「いとなみ」です。そこで、場合に応じて「見える＝知覚する」と表記するつもりです。

*赤ちゃんが生まれて、「まわり＝世界」を見た＝知覚した時には、赤ちゃんにとって、「まわり＝世界」は「あわられている」。

のではないかと思うのです。

赤ちゃんには失礼ですけど、

*何なんだ～！ どうなっているんだ～！

という感じでしょうか？ で、

*おぎゃーっ、うげーっ、うぎゃーっ、

とか、表記不能な大声で叫ぶ。そして、手足をばたばたさせる。唾液や汗を含む、さまざまな体液や、気体＝ガス（※音声も含んでいいのかもしれませんが）を放出＝「内から外へ出す」＝分泌＝排泄＝排出する。もちろん、そうした行為＝行動をしている意識＝自覚はないでしょう。でも、そうしている。そうやっている。そうやって生きて＝息している。

*意識 vs. 無意識といった、捏造された＝でっち上げられた2項対立とは無縁な状況に投げ込まれている。

とでも言いましょうか。

きのうの記事を書いたから、家事と親の介護の合間に、「見える」と「あらわれる」について考えていました。そのうちに、もう1つ「ある・いる」も加えて考えるようになりました。

*見える＝知覚する／あらわれる／いる・ある

というわけです。この3つ（※3グループ）は、言葉でしかありません。残念ながら、その実体を、厳密な意味で、知覚あるいは認識あるいは体感することは、どうやらヒトには無理みたいなのです。「厳密な意味で」というのは、「その仕組み＝メカニズムを理解する」という意味です。だから、言葉として扱うしかありません。少なくとも、自分にはそれしかできません。とはいえ、言葉には

*綾（あや）

というものがあります。実に曖昧模糊とした言葉です。よくつかいますが、辞書で調べるとその語義に違和感を覚える。そんな言葉の1つです。

*綾（あや）・いろいろな線や形が織り合わさった模様・あや＝ああ＝あら・あやういようす・あやしげなようす

という具合に、言葉で遊んでみたほうが、何となくしっくりくる言葉です。要するに、

*言葉は、ヒトを翻弄する＝もてあそぶ＝振りまわす＝揺らがせる。

ようなのです。

こんなふうなのですから、ヒトは戦略上、受動的に「もてそばれた」振りを装い、言葉を不意打ちする以外、なす術（すべ）はなさそうにも思えます。で、もてあそばれてみます。赤ちゃんのことは、あとで考えましょう。それより、きのう、書いた「天井の染み」や「トイレの壁の染み」関連のお話をしましょう。

*

*ヒトは、何かに何かを見る＝知覚する。

*ヒトは、何かに何かがあらわれているとも考える。

と言えそうだ、という話でしたね。

*ヒトは、何かに何かが「いる」あるいは「ある」とも考える。

を付け加えましょう。

*「見える・見る＝知覚する／あらわれる／いる・ある」という3グループの「間（＝

ま・あいだ・あわい) = 際 (= さい・きわ) 」

には、何かあるのでしょうか？

それらの「間 (= ま・あいだ・あわい)」を、さらにまた知覚することを目的とするなら、これは至難の業 (わざ) だという気がしませんか？ まさに、言葉の綾にもてあそばされるしかありません。「戦略的にもてあそばれてみる」などと、威勢のいいことを言ったものの、「もてあそばれているという確認」で終わってしまいそうです。

あっちに揺れ、こっちに揺れです。宙ぶらりんです。これじゃ、先週ずっとやっていた「偶然性」 = 「かく・かける (1) ~ (8)」 + 補遺 = おまけ」の話と、そっくりじゃありませんか。一昨日は、そのまた「おまけ」みたいに、保留 = 置き去りにしたはずの「ノイズ」までが、ゾンビのように追いかけてきたのです。

誰に頼まれたわけでもない独り相撲ですから、他人様に、自分の右往左往を笑われるのは覚悟していますが、その最後の味方であるはずの自分自身にまで、嘲笑されたのでは、洒落 (しゃれ) にもなりません。いや、駄洒落 = 墮洒落 = 惰洒落とすべきでしょうか。

で、思ったのですが、こういう時には、やっぱり、肩に力を入れたり、頑張ったりしては精神衛生上よくありません。そもそも、抑うつ対策ではじめたブログです。ブログと心中する気などないです。

いつものように、大雑把 = テキトー = 出まかせにいきます。お食事中、あるいは、その前後の方には、申し訳ないのですが、介護を必要とする親の排泄する姿を、きのうの午後に見守っていて、そのさいに考えていたこととお話します。赤ちゃんに話をもどすことになります。

*

赤ちゃんが裸でいて、うんちをしたとします。その時の赤ちゃんは、うんちを見て = 知覚して、「出た (= 内から出た)」あるいは「出した (= 自分が出した)」と思う = 感じるのでしょうか？ それとも、「あらわれた (= 突然、見えた or どこからか来た or 何か知らないけど、そこにある)」と思う = 感じるのでしょうか？

残念ながら、コドモをもうけた、あるいは、育てた経験がないので、そういう場面を詳細に観察したことはありません。ちらりと他人様の赤ちゃんが、オムツを換えてもらっているさまは目撃したことはあります。

生後2、3カ月になる女の子でした。その時の記憶を呼び覚まそうとしているのです

が、はっきりとは覚えておらず、役に立ちそうでもありません。というわけで、これから出まかせで書いていきます。そんなことはない。というお叱りの言葉は、覚悟のうえで申し上げます。

で、出まかせですけど、生後あまり経過していない赤ちゃんが、固形に近いんちを、ほぼ初めて、しかも裸で排泄した場合を想定しています。たぶん、

*あれっ？

って感じで、見る＝知覚するのではないのでしょうか？ そう思う根拠が、1つだけあります。知り合いの赤ちゃんで、よくおならをして、自分でびっくりしている女の子を知っているのです。生まれて半年も経っていない、とってもかわいい子です。おならは、気体＝ガスですよ。出る時に音もします。気体が出るのにお供するわけです。

それと、強引にこじつけた想像なのですが、

*あれっ？ = 出た = 何だろう？ = どこから来たのだろう？ = あらわれた

という感じではないのでしょうか？ ここで疑問があります。赤ちゃんは、自分という存在を意識しているかどうかです。「未分化」という言葉がキーワードになりそうです。

誤解を招くといけないので、再び触れますが、このように、冒頭に挙げた「未分化」「未成熟」「未発達」「未熟」「発達途上」「原始的」といった、赤ちゃんの発達段階を示す言葉をつかわずには、話ができない場合があります。

そのさいに、ちょっと考えてほしいのです。その言葉が自分に対して投げかけられた時に、嫌な思いをするかどうか。もし、するなら、「ごめんね」という思いやりの気持ちでつかう。そうした心がけ＝視点があるかないかでは、研究をするにあたっての態度や、論文を書くさいの展開や趣旨や結論に差が出てくるように思うのです。

それだけです。別に、専門の方々に、ケチをつけているわけではないことをご理解いただければ、幸いです。

さて、ここで、「いないいないばあ」という赤ちゃんを対象とした遊びが、赤ちゃんにとって「いる／いない」、「ある／ない」、「あらわれる」という現象を体感する象徴的な体験であるらしい、という説を思い出しましょう。それを前提に、話を進めます。

ある赤ちゃんが、「未分化」というか、自分と他者とを意識していない「段階＝時期＝状態」であれば、

*あれっ？ = 出た = 何だろう？ = どこから来たのだろうか？ = あらわれた

であり、自分と他者との区別ができ始めた「段階＝時期＝状態」であれば、

*あれっ？ = 出た = 何だろう？ = 自分から出たのかなあ？ or 自分が出したのかなあ？ (=ほぼ「あわれたのではない」)

という具合になるような気がします。

もしも、こんなことがあるとすれば、これって、赤ちゃんにとっては大発見だと思います。言い換えると、

*「あられたのではない」(否定)を知覚＝意識＝思考するのは、同時に、「あられる」(肯定)を、知覚＝意識＝思考することでもある。

からです。

もう少し正確に言うと、

*「いきなり、あられる」＝「不意の出あい」＝「遭遇」(肯定も否定もない or 肯定も否定もできる余裕はない)が生じた＝起きたのではなく、「自分の中から外へ出た」＝「どこからかではなく、自分から出た」＝『『ない』が『ある』になった』＝「ほぼ『いないいないばあ』が生じた＝起きた。

です。

自と他の区別の萌芽 or 誕生、自己意識の萌芽 or 誕生、自他未分化からの離脱の始まり、自我の目覚め……という感じでしょうか？ でも、やはり、ここで強調しておきたいのは、さきほどの、

*赤ちゃんを、言葉で馬鹿にするのはやめましょう。

です。さらに、言わせてもらいますと、

*赤ちゃんを、言葉で馬鹿にするのはやめましょう。＝オトナである自分を、棚に上げるのはやめましょう。＝自分にだって、まだコドモの部分が多分にあるはず。＝ぶっちゃけた話、オトナとコドモを分けるのは、とっても変(※女性と男性、「仲間＝うちの者」とよそ者についても、言えることかもしれません)。

です。

*

というわけで、

* 発達段階

という言葉の意味や、その言葉をつかいたい気持ちはよく分かるのですが、素人として、あるいは1匹のヒトとしての実感は、

* ヒトは、階段を1段1段上るように成長していくのではない。

ということなのです。

言葉の綾という言葉で、上でも触れましたように、言葉には、ヒトをもてあそぶ＝振りまわす特性があります。うっかりと言葉の罟（わな）にはまってしまい、思考が言葉によって思いもしない方向へと暴走する場合をよく経験します。

いちばん多いケースが、「比喩＝たとえ」です。段階（＝stage, step, grade, phase）という言葉は、「階段・階」に由来したり、そのイメージがまつわりついています（※ただし、phase は本来は「様相・局面」というイメージらしいです）。「階段・階」というイメージに引かれてしまって＝釣られてしまって＝もてあそばれてしまって、

* 1つ上るごとに卒業式

みたいな発想をしてしまうわけです。

でも、よく考えてみてください。自分自身、あるいは、身近な人、あるいは、身近でなくても見聞きした人の話でもいいです。いちおうオトナと呼ばれている人で、確固たる「自と他の区別」や「自己意識」を持ち、「自他未分化からの離脱」の卒業式を晴れて終えているらしき人って、いますか？

個人的には、そんな人は、直接的にも間接的にも会ったことも見たこともありません。そもそも、発達や成長や成熟なんて、幻想ではないのでしょうか。言葉の綾なのではないのでしょうか。「幻想」や「言葉の綾」という限界性を承知しての、「これって、ほぼギャグ」＝「仕事だと割り切っています」＝「本当は違うみたいなんだけど、ま、いっか」という意識があれば、まだましです。

妙にマジな点が、不気味なのです。

全部とは言いませんが、発達心理学の教科書や専門辞典を読んでいると、何か、「発達心理学」なのだから、何が何でも「発達しなければならない」といった、強迫観念めいた性急さ＝杜撰（ずさん）さ＝大雑把さ＝テキトーさ＝でたらめ、を感じるのです。

*連続的变化

を指摘する視点もないわけではありませんが、きわめて希薄です。「階段の比喻」に引きずられすぎです。

粗雑な一般論になって恐縮ですが、以前と比較すると、

*ヒトは成熟なんてしない。成長もなし。大人になるなんてことはない。大人になる必要はない。

とか、

*親になるんじゃなくて、親は子どもに育てられるのだ。子どもを持つことで、だんだんと親になっていく。大人と子どもの境なんてあるの？ 大人にだって子どもの部分はたくさんある。子どもも1個の人間だ。

みたいなことを言う人が、増えてきた感じがします。とても、誠実で、思いやりのある、正確な考え方だと思うだけでなく、そういう意見を口にする人たちが増えてきて嬉しいです。

*

で、いきなり、天井の染みやトイレの壁の染みに人面を見てしまう話に、飛びます。

*見える＝知覚する／あらわれる／いる・ある

のうち、どれなのか？

結論から申しますと、

*あら、われる＝あらっ、我る＝あらっ、割れる＝洗われる

だと思います。

以下に、詳しく述べます。

1) 「何かに何かを見る＝知覚する」とは、「我＝自分を意識する」ことが大前提になる。だから、「あらっ、我る」。

2) 「何かに何かを見る＝知覚する」とは、「自他の区別のない意識＝ふつう、ぼけっとしていた時の意識」が、「何かがあらわれる」という突然の出来事によって、「我＝自分」と「何か＝おそらく他者」に割れる。だから、「あらっ、割れる」。

3) 「何かに何かを見る＝知覚する」とは、「わけのわかんないもの or 天井の模様とか木目など or トイレの壁の模様とか木目など」＝「ノイズみたいなもの」＝「意識を乱し、整合性・規則性を妨げるもの」に、「何かがあらわれる」ことによって、その天井の「表面」や壁の「表面」が洗われて、ノイズみたいなものが消えてきれいになり、その代わりに「何か」(※ヒトによって異なる)が見える＝知覚できるようになる。だから、「洗われる」。

以上の1)から3)が、ダジャレ＝オヤジギャグの、まことに苦しい＝見苦しい説明になっていることに注目してください。そうした上に並ぶ言葉たちの、苦しげで、照れくさそうで、危うそうで、うさんくさそうで、いけしゃあしゃあとした表情、面構え、身ぶり、仕草を、よく見てやってください。

* 「偶然性＝無作為＝無意味」のなかに、「何か＝必然性＝整合性＝有意味」を見ようとする＝求める。

とか、

「何かに何かを見る＝知覚する」

というのは、そうした、いかがわしい仕組み＝錯覚＝錯視なのです。

こんなことを書いているブログは、あやういとか、あやしいとか、お思いの方も多くと存じます。でも、この惑星でいちばん、あやうく、あやしいのがヒトなのです。そういう種(しゅ)なのです。居直りましょう。居直るしか選択肢はなさそうです。ですから、ヒトをやめちゃいけません。人間をやめては、だめです。何か話がずれてきました。

*別にまっとうでなくてもいい。ヒトをまっとうしよう。

実は、たった今書いたフレーズは、抑うつが激しくて、つらいときに、自分に言い聞かせるおまじないの言葉なのです。実は、きょうは少しつらいのです。ヒトをやめたいと、ふと思いやすい状態なのです。

*

「何かに何かを見る＝知覚する」に話をもどします。たとえば、テレビの画面、それが高画質のものであっても、しょせん、走査線や画素の集まりでしかないことを思い出しましょう。錯覚するから、その画面に、「ちびまる子ちゃん」や、「紅白歌合戦」や、メジャーリーグで活躍するイチローの姿が、「あらわれる」＝「見える・見る＝知覚する」のです。

たぶん、あれって、オカメインコちゃんや、トンボさんや、コビトカバさんたちには、「わけのわかんないもの or 天井の模様とか木目など or トイレの壁の模様とか木目など」＝「ノイズみたいなもの」＝「意識を乱し、整合性・規則性を妨げるもの」のようなものにしか見えないでしょう。

そんなふうを考えています。でも、ヒトはヒト、ジンベイザメさんや、イリオモテヤマネコさんや、スナメリちゃんや、ウズラさんたちとは違います。ですから、きのうの記事でも書きましたように、たとえば、トイレの壁の染みを見ていて、何かに出あってしまったら、

* 正々堂々と、出あってしまえばいい

のです。

自分の体感を偽る必要はありません。何かが、見えてもいいのです。見てもいいのです。「あらわれた」と思えば、それは、「あらわれた」ってことなんです。あくまでも、たぶん、ですけど、たぶんでいいと思います。

* 「△△の、あそこところが、〇〇に見えるんだけど、わたし、だいじょうぶかしら？」

とご心配の方、いらっしゃいませんか？

* 「だいじょうぶです。あなたが人間様だっていう証拠です。たぶん」

と、いうわけです。

あすは、ちょっとお勉強的なことをやって少々あやうくあやしいと思えてきた、このあたまを冷やすつもりです。

ところで、「かく・かける (1)」2009-05-14 の最後のほうに書いた、ツバメさんちの赤ちゃんたちは、無事、みんな巣立ちしました。顔が見られなくなったのは寂しいですけど、嬉しいです。赤ちゃんのいらっしゃる方、赤ちゃんによろしく。

つばくろの早い巢立ちに空眩し

09.05.27 あらわれる・あらわす (3)

◆あらわれる・あらわす (3)

2009-05-27 09:27:22 | 言葉

米国の金融の中心は、今やニューヨークではなくワシントンです。という意味のことを、きのうのニュースで聞きました。アイロニックですが、うまい表現だと思いました。言えてます。1つ間違うと、ブラックジョークですけど。要するに、政府が printing money (お札を刷る) をせっせと行って、民間企業に多量に注入しているという、米国にとっての非常事態なのですから。ということは、世界にとっての非常事態です。

ところで、お金はヒトがつくっているものです。それなのに、「給料 (ボーナス、退職金) が出た」、「定額給付金 (補助金、奨励金、助成金) が出た」、「分配金 (or 配当金) が出る」、「保険金 (or 補償金、還付金) が出る」、「懸賞金が出る」のように言います。この「出る」というのは「あらわれる」の親戚みたいですが、「給料 (or 保険金) があらわれる」とは言いません。どうやら、ちょっとお勉強をする必要があるようです。辞書をつかって、調べてみました。

まず、気になる言葉は、

* 「あらわれる・あらわれ・あらわす・あらわ・ある・あり」「でる・いづ・いずる」「いる」「おる」

です。

たくさんありますので、少しずつ、見ていきましょう。

* あらわれる・表れる・現れる・顕れる・洗われる

* あらわれ・表れ・現れ・顕れ

*あらわす・表す・現す・著す・顕す

*あらわ・露・顕

*ある・有る・在る・或る・生る・荒る・離る・散る

*あり・有り・在り

*でる・出る・デルフォイ

*いづ・出づ

*いずる・出

*いる・居る・入る・射る・要る

*おる・居る・下る・降る・折る・織る・愚る・オルガスムス・オルガニズム・オルグ

以上、概観しました。なかには、どうして？ とお思いになるものが混じっていると思います。気になったので、いっしょにして並べただけで、語源とか、「ただしい」vs.「正しくない」だけを基準にしているわけではないので、ご容赦ください。

こうして大和言葉系の「ひらがなだけ」で書かれた言葉を、分光するように「漢字＝感字＋ひらがな」で表記しなおして見ると、また、違った感慨を覚えます。現われ、表れ、洗われてくるような気がします。あらあら、居る、入る。在った、会った、遇った、生った、散った。そんな感じ、勘じ、間じ、観じです。

*言葉が、森羅万象＝宇宙の圧倒的な偶然性を、懸命に真似ている。模倣している。その結果として、言葉たちは、人為的＝でっち上げられた必然性＝整合性など無視して、素知らぬ顔をして、そこに居る＝入る。そこに在る＝散る＝生る。おそらく、この現象は、人為を超えて起こっている。

きのうの記事で、「間（＝ま・あいだ・あわい）＝際（＝さい・きわ）」という言葉をつかいましたが、上の言葉の羅列を見ていると、まさに言葉たちの「間（＝ま・あいだ・あわい）＝際（＝さい・きわ）」を目にしている思いがします。ヒトは、言葉＝言語を獲得して以来、洗練させていく過程で、森羅万象に言葉を重ねる＝こじつける＝たとえろという作業をしてきたはずで

それは不自由を自由と錯覚しなければ成し遂げることができない、ほぼ不可能とも言

える難業だったはずですが。そのはずなのに、言葉というものが、いとも簡単につかうことができるといった気持ちになっている。変です。少なくとも、自分は、その「錯覚＝変なこと」に敏感でありたいと思っています。

*

さて、もう少し、細かく具体的に見ていきましょう。

*あらわれる・表れる・現れる・顕れる・洗われる：表に出る・隠れていたものが出てくる・隠されていたものが出てくる・「いないいないばあ」・「ねえ、見て見て」・「見よ！」・「こんなに出ましたけど」・「ぐにょ」・「実は、……です」・「よかった。やっとで出られたよ」・「びっくりした？」・「ばれちゃった」・「ごしごし、さぶさぶ、きれいになりましたねー」・「すっきり、くっきり」・「隅から隅まで、とことん見せてもらいます」

*あらわす・表す・現す・著す・顕す：「見よ！ 参ったか？ 怖れ入ったか？」・「思い切っけて打ち明けます」・「こうすれば、わかってくれる？」・「こういうことです」・「こんなことを書きましたので、読んでください」・「世の中のみんなに知ってほしいのです」・「ねえねえ、わたしってすごいんですよー」

*あらわ・露・顕：「あら、見えちゃったのね」・「丸見え」・「丸出し」・「すっぽんぽん」・「なるほどねー」・「もう隠すところなし」・「包み隠さず」・「おおっぴら」・「そこまでやるの？ or そこまで言うの？」

*ある・有る・在る・或る・生る・荒る・離る・散る：『『0／1』の『1』』（※2進）・『『□／■』の『■』』・「えっへん（※咳払い）」・「入ってまーす（※ノックに対する返事）」・「どかん」・「どっしり」・「生きてるよー」・「ここは、うちのテリトリーです」・「えっへん（※威張っている）」・「またまた来ました」・「あれよあれよ」・「It's mine.」・「誰にも渡さない」・「これで決まり」・「……ということです」・「もう、そんな時間？」・「……なのだ」・「ずっといつまでも」・「あっ、出ました」・「まあ、こんなになっちゃって」・「バイバイ」・「ばらばらになる」・「おーい、げんきかー！」

*でる・出る&いづ・出づ&いづる・出：「ああ、どうも、こんにちは」「はじめまして」・「来ました」「来ましたね」・「やあ」「やあ」・「よろしく」・「はじめます」・「こういうお話です」・「こんなところにあったのか」・「では、失礼いたします」・「おあとが、よろしいようで」・「バイバイ」・「ちらり」・「ちょこっと」・「ちょっとだけよ」・「♪仰げば尊し……」・「あれよあれよと」・「ここのは、おいしいんですよ」・「ああ、あそこからいらしたのですか」・「ほら、くれてやる」・「パチパチ（※拍手の音）」

*いる・居る・入る・射る・要る：『『0／1』の『1』』（※2進法）・『『□／■』の『■』』・「えっへん（※咳払い）」・「入ってまーす（※ノックに対する返事）」・「どかん」・「どっし

り・「生きてるよー」・「ここは、うちのテリトリーです」・「ちょこちょこ、うろうろ、おろおろ、ばたばた、さーっ、ひゅーっ、びゅんびゅん」・「によきによき」・「ここは、うちのテリトリーです」・「えっへん（※威張っている）」・「ふうーっ」・「こうしていると落ち着くなあ」・「おじゃまします」・「びゅーん」・「さっと……」・「大当たりい〜」・「これがなきやだめなのよー」

*おる・居る・下る・降る・折る・織る・愚る：『0／1』の『1』（※2進法）・『□／■』の『■』・「えっへん（※咳払い）」・「入ってまーす（※ノックに対する返事）」・「まだあ？」・「悪いけど、そろそろ」・「ちえっ」・「そんなこと、わかっているって」・「ぼとり」・「ひゅーっ、ぼとり or ぼた or ぼたり」・「どっこいしょ」・「では、このへんで失礼します」・「もう、いいです」・「あきらめました」・「ありがたく頂戴いたします」・「びちびち」・「ぐにやり」・「ぼきっ」・「こっちとこっちを合わせて重ねます」・「こっちとこっちを合わせて重ねたら、次は、そっちとそっちを合わせて……」・「への字」・「まいりました、ご勘弁を願います」・「ああ、しんど」・「糸を使って、がったんごっとなん」・「あれをこっちに、これをあっちに」・「ぼけーっ or ぼーっとなる」

以上です。

つかわれている個々の漢字についても、お勉強したいのですが、機会をあらためます。

*

ところで、きのうの「あらわれる・あらわす (2)」2009-05-26 という記事のなかで、「いないいないばあ」について、次のように書きました。

*さて、ここで、「いないいないばあ」という赤ちゃんを対象とした遊びが、赤ちゃんにとって「いる／いない」「ある／ない」「あらわれる」という現象を体感する象徴的な体験であるらしい、という説を思い出しましょう。

上のように書きましたが、あとで読み返して補足したくなりました。違った視点から、説明し直します。

中上健次という、もう亡くなった作家と、蓮實重彦という文芸評論家との対談集を、かつて読んだことがあります。その本はもう、手元がないので、うろ覚えの内容を書くしかなのですが、次のような発言を中上がしていた記憶があります。

*テレビのアニメを見ていて、幼い娘が物語の主人公に同情して涙を流すことがある。まだ幼いのに既に物語の定型が身に付いているのだと思うと、物語の恐ろしさ＝強さに驚きを感じる。

そんな意味の話だったと思います。対談のほかの部分、すっかり忘れていて、その個所だけが印象に残っているのは、

* 物語＝フィクションの定型

という図式に興味を引かれたからだと思います。当時、「いったいフィクションって、なんだろう？」という疑問＝関心を持っていたのです。今の自分にとっても、興味深いテーマです。何を言いたいのかと申しますと、

* 「いないいないばあ」は、あくまでもフィクションである。

という点です。

言い換えれば、「お遊び」＝「……ごっこ」なのであって、実体験というより、括弧にくくられた「実体験」というか、

* 本当を装った「本当」である。

ということです。

*

「いないいないばあ」については、以前、フロイトが注目した「fort / da」というお遊びといっしょに引き合いに出しました。もっとも、「fort (いないいない) / da (ばあ)」は、糸巻きを投げる遊びだということで、具体的にどんなふうにしてやるのかは知りません。フロイトは自分の孫がその遊びをするのを見ていて、何やら深遠な解釈をしたらしいのですが、その学説も知りません。なお、そのお孫さんも、赤ちゃんというより、もう少し年長さんだったようです。

ですので、ここでは、赤ちゃんを対象にして、手で顔を隠したり、その手を開いて顔を出して遊ぶ、例の日本式「いないいないばあ」だけに絞って、フロイトの学説も抜きに話を進めます。また、赤ちゃんは生後6カ月未満と限定します。まず、

* 「いないいないばあ」は、赤ちゃんにとって、自己と他者の区別を意識するきっかけとなる、きわめて重要な意味を持つ「実体験」ではない。

という前提に立ちましょう。もし、そうした「実体験」があるとすれば、赤ちゃんの目の前から、実際に、誰かがその場を離れて

* 「いなくなる」

という体験でしょう。その体験において、赤ちゃんは、恐怖 and/or 不安 and/or 「よるべなさ」を感じるだろうと思われます。逆に、誰かがそばに、

* 「あらわれる」

ことによって、喜び and/or 安心感 and/or 「守られているという気持ち」を感じるだろうと思われます。この場合に、「自己と他者の区別を意識」しているかどうかは、YES vs. NOといった2項対立で処理できる問題であるとは、個人的には考えていません。でするので、保留しておきましょう。

一方の、「いないいないばあ」ですが、これは明らかに「遊び」です。おそらく、赤ちゃんも、それが「お遊び」＝「.....ごっこ」であると、言葉ではなく、体感していると思います。つまり、

* フィクションであると体感している。

という意味です。

「いないいないばあ」という遊びにおける、赤ちゃんとその遊び相手のヒトそれぞれの状況、動作、表情、気持ち（＝機嫌）などのさまざまな要素によって、「いないいないばあ」が、赤ちゃんにとってどのような体験となるのかは、ケースバイケースでしょう。赤ちゃんのご機嫌の良し悪し、明るい所か薄暗い所か、相手となるヒトの表情を赤ちゃんが「快」「不快」のいずれのほうに近いものとして受けとめているかによっても、異なるにちがいありません。

いずれにせよ、

* 赤ちゃんにとって、「いないいないばあ」が、「お遊び」＝「.....ごっこ」＝フィクションである。

ことは、「ほぼ」認識されているものと考えていいのではないのでしょうか。

*

ここで、このブログでよくつかう、「広義の言葉」という言葉を紹介させてください。

* 広義の言葉＝言語とは、話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体

言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（※家庭だけで通じる断片的な手話）、音声（＝発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号など

この「広義の言葉」を「表象（＝「何かの代わりとして用いるもの）」として、使用しているヒトの子である赤ちゃんは、「いないいないばあ」という「遊び」のなかでは、

*この「遊び」を、「広義の言葉」を用いた「遊び」の1つとして、意識している。

のではないのでしょうか。おそらく、「自己と他者の区別を意識する」という作業＝行為＝「いとなみ」とは、異なるレベルの話であるような気がします。

以上の考え方が、たとえば発達心理学と呼ばれる分野において、似たような説として存在しているのか、あるいは、むしろ否定するような説が存在しているのか、あるいは、複数の学説が拮抗しているのかは知りません。あくまでも、素人の楽問での道草話です。強調したいことは1つだけです。

*目の見え始めた＝知覚が活発になり始めた時期の赤ちゃんは、「フィクション」を意識しているか、意識し始めている。

と言えそうな気がします。

ここでの「フィクション」とは、「戯れ」「遊び」に近い意味です。同時に、

*目の見え始めた＝知覚が活発になり始めた時期の赤ちゃんは、「広義の言葉」が「表象（＝「何かの代わりとして用いるもの）」として働いている＝機能しているという「仕組み＝メカニズム」を体感＝知覚し始めている。

とも言えそうな気がします。

赤ちゃんに表象作用の仕組みなんか分かるわけがないじゃん、アホか？とおっしゃるのは、よく理解できます。でも、表象作用などという難しい言葉をつかうから、そう思えるのであって、赤ちゃんでも、幼児でも、いわゆるコドモでも、

*何かの代わりに何か別のものをつかっている

という仕組みは体感できるし、実際に体感しているように思えます。

赤ちゃんや、幼児や、いわゆるコドモって、あなどれませんよ。馬鹿にしちゃ、だめだと思います。案外、オトナのほうが、知性と痴性がしゃしゃり出てくるため、表象が表象であることを、ころりと忘れて、ずいぶん、しっちゃんかめっちゃんかしているじゃありません。

せんか。この自分のやっていることを反省してみても、つくづくそう思います。お金、言葉、イメージ、レッテル、そうした表象たちにどれだけ、振りまわされていることか。

一方で、

*コドモたちは、遊び＝フィクションの大家

ですから、けっこう、さめていますよ。

*子どもは、現実と仮想現実を混同する。

なんて言う、オトナたちが一部いますが、まずご自身のことをお考えになれば、あのような暴言＝妄言は吐けないのではないか、と思います。オトナだって、現実と仮想現実を混同しています。それがヒトの習性なのです。きのう、

*赤ちゃんを、言葉で馬鹿にするのはやめましょう。

と書きましたが、きょうは、

*難しい言葉をつかって、赤ちゃんやコドモを馬鹿にするのはやめましょう。

と言いたいです。きのうも書きましたが、オトナとコドモって分かれているようで、分かれていない面がたくさんあるように感じられます。

*いわゆるオトナも、いわゆるコドモも、ゆるやかに＝連続的につながっている。

のです。

このテーマについては、いつか、整理して詳しく書いてみたいと思っています。

*

以上は、きのうの午後、インターネットで検索しまくり、赤ちゃんや幼児やいわゆるコドモに関する、いろいろなサイトを覗いてみているうちに感じたことが、かなり影響しています。したがって、さきほどの「いないいないばあ」について書いた部分も、実際に、赤ちゃんを観察して感じたことではありません。

はっきり申しまして、でまかせ＝思いつきです。楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくやろう、お勉強ごっこ」の戯言としてさっと目を通していただければ、それだけで嬉しいです。

で、少々話は脇にそれるのですが、言いたいことがあって、むずむずしてきたので、白状します。実は、きのう検索しまくっていたのには、別の理由があったのです。ちょっと恥ずかしいのですが、不思議というか、気になって仕方ないことがあったのです。今も気になっています。

これまた、きのうの記事で書いたことの蒸し返しなのですが、

*うんち

のことがあたまから離れないのです。

きのう書いたことくらいでは満足できないのです。アホなりに、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもあると考えて、納得したいのです。うんちについて検索して、蘊蓄（うんちく）を傾けた議論をしようとか、うんちをたれたり、いや、蘊蓄を垂れたりしよう、などという魂胆や野心なんてありません。

ただ、考えてみたいのです。検索をしても、大した満足が得られなかったので、自分流に、今ここにある物や事や現象を見つめ、手持の知識と記憶を総動員するやり方で、うんちと取り組んでみます。

先週までやっていた「かく・かける (1)～(8)」シリーズ (2009-05-14～2009-05-19) + 補遺＝おまけ＝付録＝追加では、テーマの性質上、マラルメ師の気配を感じていましたが、今回の「あらわれる・あらわす」シリーズでは、人面〇〇と赤ちゃんとのあいだで、話がうろうろしていて、テーマの性質上、フロイト師の気配というか影を感じます。

フロイト師は、幼年期にやたらこだわったヒトだったし、うんちや肛門の話もかなり好きそうでしたね。自分って、同化しやすいというか、感化されやすいところがあるようなので、この類の話題は看過したほうがいいのかもかもしれませんが、できそうもありません。

きょうは、このあと、家事をしながら、うんちのことを考えて走り書きメモをせっせとつくろうかと思っています。

ですので、あすは、そうしたメモを継ぎはぎして、うんちの話を書くことになりませんが、できるだけ不快な記事にならないように努力しますので、ぜひ、また遊びに来てくださいね。お待ちしております。

09.05.28 あらわれる・あらわす (4)

◆あらわれる・あらわす (4)

2009-05-28 08:57:53 | 言葉

うんちについて、考えていました。で、その兄弟姉妹である「うんこ」という言葉を何げなく広辞苑で引いていて、語源が載っているのにはびっくりしました。「うん」というのが「いきむ声=息む声」から来ているというのです。「うん」と素直にうなずけず、「うーん」と思わず息んでしまいました。いきむ=息むとは、息をつめてお腹に力を入れて、「うーん」と気張ることです。何だか、ますます、うんちに思い入れを深める結果となりました。

で、思ったのですが、

*「あらわれる」の中心的イメージ(=コア・イメージ)は、赤ちゃんとしてこの世界と「出あう」ことである。

そして、

*「出る」の中心的イメージ(=コア・イメージ)は、うんちをすることである。

と言えるのではないのでしょうか。

まず、前提として確認しておきたいのは、

*「あらわれる」と「出る」に先立って、「出あう・あう」という「出来事=事件=偶然性の生起」がある。その次に、あるいは並行して、「あらわれる・出る」という「知覚」が生じる。この「出来事=事件=偶然性の生起」と「知覚」は、通常、きわめて短期間=ほぼ瞬時に起きる。

ということです。

*

では、「あらわれる」の補足説明からしますと、

*「あらわれる」とは、「見る・見える＝知覚する」という能動的な自分の行為を、「まわりの世界」＝他者に責任を転嫁することにより、受動的な行為に転換する＝下手に出る＝恐怖感・不安感をやわらげる、という身体的な知恵が働いた結果としての言語上の操作である。

ように思えるのです。

簡単に言いますと、こっちの責任で「見ちゃった」のではなくて、「あら～、われの責任じゃないぞよ＝あんたが悪いのよ」という感じで、向こうが勝手に姿を「あらわした」ことにしてしまう、という意味です。ずるいと言えはずるいし、精神衛生上、自分を守るためなのだから、賢いと言え賢い。やっぱり、ヒトはたくましい。という感じでしょうか。

一方、

*「出る」とは、「見る・見える＝知覚する」という能動的な自分の行為を、「まわりの世界」＝他者に責任を転嫁することにより、受動的な行為に転換する＝下手に出る＝恐怖感・不安感をやわらげる、という身体的な知恵が働いた結果としての言語上の操作である。同時に、自分がつくった、あるいは、生じさせた＝起した現象を、「まわりの世界」＝他者に責任を転嫁することにより、まるで自然発生的な現象であるかのように装う、あるいは、故意に思い込むことにより、その現象との距離感を演出しようとする言語上の操作である。

ように思えます。

端的に言うなら、「あんたなんて、知らないよ＝はじめまして」と、とぼけるのです。なぜ、とぼけるのか＝距離感を演出するのか、については、ケースバイケースで多種多様な理由があるでしょう。きのう挙げた例から、選びます。

1)「給料(※ボーナス、退職金)」が出た(※「あらわれた」とは言いません)の場合には、自分が一生懸命働いた当然の報酬なのに、会社や役所に花を持たせているのでしょうか。ペイペイ時代からの宮づかいが身についてしまった結果だと推測されます。

2)「定額給付金(※補助金、奨励金、助成金)」が出た(※「あらわれた」とは言いません)の場合には、「お上」への配慮です。こういう感情を改めない限り、この国は良くなりませんね。もとは税金なのに。いや、あれだけ大量の国債を発行しているのですから、連帯保証人にされての大借金ですか。ああ、こわい。

3)「分配金(※配当金、保険金、補償金)が出た」の場合には、これも、受けとって当然なのに、「出る」と言うのは、謙虚さの「あらわれ」でしょうか。次の例とも、大いにかぶる面がありそうです。

4)「懸賞金(※一等賞)が出た」という場合には、これはヒトの力など到底歯が立たない「圧倒的な支配力を持つパワー」=超越者への畏怖が根底にあるのではないのでしょうか。3)の場合ともかぶる=重なるというのは、3)が「運(うん)」に多分に左右されるからです。

*

さて、

*「あらわれる」の中心的イメージ(=コア・イメージ)は、生まれたばかりのヒトが赤ちゃんとしてこの世界と「出あう」ことである。

とさきほど書きましたのは、上で補足説明いたしましように、ヒトにとって、

*「見る・見える=知覚する」という能動的な自分の行為を、「まわりの世界」=他者に責任を転嫁することにより、受動的な行為に転換する=下手に出る=恐怖感・不安感をやわらげる。

という「最初の」体験が、「誕生=母親から見れば出産=かっこうをつけると世界と出あうこと」だからなのです。

天井の染みやトイレの壁の染みに、何かが「あらわれている」。走査線か画素の集まりに、番組の映像が「あわられている」。化学繊維のかたまりである、くまのプーさんのお人形に、くまのプーさんが「あらわれている」。ケータイの液晶にお友達や好きなヒトの姿が「あらわれている」。

こうした、「あらわれ」の原体験が、

*おぎゃーっ！

なのです。まことに、おめでたい=祝福すべき=感動的な=驚嘆すべき話ではありませんか。

*

さて、本題に入ります。うんちです。

*「出る」の中心的イメージ（＝コア・イメージ）は、うんちをすることである。

に対して、

*なぜ、うんちなのか？

と疑問をお持ちの方が、たくさん、いらっしゃるにちがいありません。涙だって、よだれだって、おしっこだって、汗だって、おならだって、みんな「出る」って言うじゃないか？

*どうして、うんちだけが、特権化＝特別扱い＝「えこひいき」されなれば、ならないの？

ごもっともなご質問だと存じます。

でも、実は、これまた、まことに、おめでたい＝祝福すべき＝感動的な＝驚嘆すべき話なのです。赤ちゃんとうんちの出あいについて、「あらわれる・あらわす(2)」2009-05-26で書いた部分を、コピペさせてください。

★生後あまり経過していなくて、なるべく固形に近いうんちを、ほぼ初めて、しかも裸で排泄した場合を想定しています。たぶん、

*あれっ？

って感じで、見る＝知覚するのではないのでしょうか？【中略】

*あれっ？＝出た＝何だろう？＝どこから来たのだろうか？＝あらわれた

という感じではないのでしょうか？【中略】

さて、ここで、「いないいないばあ」という赤ちゃんを対象とした遊びが、赤ちゃんにとって「いる／いない」「ある／ない」「あらわれる」という現象を体感する象徴的な体験であるらしい、という説を思い出しましょう。それを前提に、話を進めます。

ある赤ちゃんが、「未分化」というか、自分と他者とを意識していない「段階＝時期＝状態」であれば、

*あれっ？＝出た＝何だろう？＝どこから来たのだろうか？＝あらわれた

であり、自分と他者との区別ができ始めた「段階＝時期＝状態」であれば、

*あれっ？＝出た＝何だろう？＝自分から出たのかなあ？ or 自分が出したのかなあ？（＝ほぼ「あわられたのではない」）

という具合になるような気がします。もしも、こんなことがあるとすれば、これって、赤ちゃんにとっては大発見だと思います。言い換えると、

*「あわられたのではない」（否定）を知覚＝意識＝思考するのは、同時に、「あわられる」（肯定）を、知覚＝意識＝思考することでもある。

からです。もう少し正確に言うと、

*「いきなり、あわられる」＝「不意の出会い」＝「遭遇」（肯定も否定もない or 肯定も否定もできる余裕はない）が生じた＝起きたのではなく、「自分の中から外へ出た」＝「どこからかではなく、自分から出た」＝『『ない』が『ある』になった』＝「ほぼ『いないいないばあ』が生じた＝起きた。

です。自と他の区別の萌芽 or 誕生、自己意識の萌芽 or 誕生、自他未分化からの離脱の始まり、自我の目覚め・・・という感じでしょうか？

★から以上までが引用部分です。

*

要約しますと、赤ちゃんにとって、うんちは、たとえ「うん」と息んだにしろ、漏れたにしろ、

*「出た（＝あれっ！？）」と「出した（＝やっぱり！）」の中間というよりも、むしろ、その両者の連続した意識のうちでは、「出した（＝やっぱり！）」寄りにある出来事である。

という気がします。

*「出した（＝やっぱり！）」を、あえて「出た」と引き戻す意識の働き

が、上で述べた、

*「まわりの世界」＝他者に責任を転嫁することにより、まるで自然発生的な現象であるかのように装う、あるいは、故意に思い込むことにより、その現象との距離感を演出

しようとする言語上の操作である。

という説明になるのです。

なぜ、そのような操作をするのかというと、うんちが、

*自分から離れる＝分離される or 分離する＝「まわりの世界」の一部になる

さまを「見る＝知覚する」からです。

断っておきますが、赤ちゃんにとって、自分と「まわりの世界」は分化されているような気もするし分化されていないような気もするという、きわめて曖昧な状況にあるということです。

さらに、強調しておきたいことは、これは赤ちゃんだけの状況ではなく、いわゆるオトナにとっても同じ状況＝意識であるという点です。

オトナは「自他未分化」という階段を晴れて卒業して、「自他分離」という階段に上ったというようなおとぎ話＝馬鹿話は、このブログでは嘘＝作り話＝方便＝「時にはつかうツール」として扱います。現に、引用部分の最後のほうでは、方便＝「時にはつかうツール」として、やや後ろめたそうにつかっています。

もし、「自己＝自我」と「他者＝世界」という別個のものが存在するならば、比喩的に言えば、それは固体のように存在するのではなく、液体か気体のように、時によって混じり合ったり、分離し合ったりする形で存在するのでしょうか。たとえば、ぼけーっとしている時、うとうとしている時、眠っている時、あるいは、動転している時、精神的にかなり動揺している時、ショックを受けた時、酔っ払っている（※たいていはオトナだけですが）時、あるいは、何かに夢中になっている時のオトナ、コドモ、赤ちゃんは、両者が混じり合った状態にあるはずです。

これは、何かに書いてあったことの引用ではなく、自分の実感でもあります。

で、うんちですが、今述べたような、

*「自己＝自我」と「他者＝世界」の「間（＝ま・あいだ・あわい＝際（＝さい・きわ）で、ぶかぶかと浮いている。

感じをイメージしてください。

*「出る」とは、「出た」のちには、「ぶかぶか浮いている」状態に落ち着く。

と言えそうな気もします。躍動感までは行かない

*浮揚感 (=運動)

つまり

*ぶかぶか

が非常に重要です。

*出たものは「静止」してはいない。

という点に、注目していただきたいのです。

いったん出たものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。比喻をつかえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、声も、にきびも、幽霊も (※「出る」という言葉の話をしていますので「出ました」)、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さん or お母さん or お子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

一方、「あられる」場合には、静止したまま、しつこく居座ることも、往々にしてありそうです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

で、うんちですが、以上ごたくを並べてきましたように、

*「あられる」の中心的イメージ (=コア・イメージ) は、生まれたばかりのヒトが赤ちゃんとしてこの世界と「出あう」ことである。

と上述したのと同様に、ヒトの原点である、

*初めてのうんち

というおめでたい体験を祝って、

*「出る」の中心的イメージ (=コア・イメージ) は、うんちをすることである。

としたいのです。

たった今書いた文に、赤ちゃんという言葉がないことに注目してください。ここでのうんちは、赤ちゃんも、いわゆるコドモも、いわゆるオトナもみんな含めての排便というきわめて重要な行為として、受けとっていただきたいのです。

赤ちゃんが初めて、自ら息んで外に「出して」おきながら、他人事みたいに「出た」と体感する、象徴的な意味については上で述べました。今度は、このブログを書いている1匹のアホも、そして、貴重な時間を割いてこのブログをお読みになっている、あなたも含めてのお話をさせてください。

*

ヒトである限り、誰もが、何かの形で、外から食物を体内に摂取し、その一部を自分の身体の一部と化し、残りのものを外へと返す＝出すという「いとなみ」を、毎日行っています。呼吸という形で、酸素を体内に取り入れることも、基本的には同じです。だって、ヒトは、1人1人が酸素と交換して、二酸化炭素を排出しているのです。ということは、ヒトは、

* 「自と他」

などと抽象論を言う以前に、生物＝生体としてのレベルにおいて、「まわりの世界＝他者」と同化、あるいは、混じり合って存在しているわけです。ゾウリムシさん、ギンバエさん、アサガオさん、キリンさんたちと同じです。さきほど、心理 or 精神 or 心のレベルで、「自己＝自我」と「他者＝世界」は、はっきり分けられるものではないという意味のことを書きましたが、

* 物理的 or 生物的レベルでも、「自」と「他」は、はっきり分けられるものではない。

ようです。

ところで、うんちって、自分でしょうか、自分の一部でしょうか、もう外に出たのだから他者 or 「関係のないもの」でしょうか？

個人的な話をしますと、排便のたびに、自分ほうんちをよく観察します。そのほうがいと、かかりつけのお医者さんに言われて、納得したからです。お医者さんの話では、「出る」うんちには、いろいろなものが「あらわれる」そうです。

さきほど述べましたように、「出る」ものに比べ、「あらわれる」ものはしつこい＝しぶとい＝下手をすところわい、のです。だから、うんちに「あらわれるもの」は、あなだれません。

よく考えてみると、そうですね。自分のなかから出たものですから、自分のなかのことを「知っている」わけです。たとえば、黒いとか、血が混じる、は危険「信号」だと、教わりました。もちろん、固い軟らかいも大切な「信号」です。沈むより、浮くほうがベターだとも教えてもらいました。理由は聞き損ねましたけど、本当らしいです。何かにも書いてありました。

どうやら、

* 「出る」ものに「あらわれる」ものを「見る＝知覚する」

ことが大切なようです。

これって、自分でもできる、いや、家でなら通常自分でしかできない、医療の基本の1つではないでしょうか。世界の衛生状態が悪い地域では、現在でも、

* 「出る」ものに「あらわれる」ものだけでなく、「いる」ものを「見る＝知覚する」

ことが大切だと聞きます。

回虫（カイチュウ）とかギョウチュウのことです。この国でも、そうした線虫たちを撲滅できたわけではないので、油断はできません。そう思うと、いろいろなことを教えてくれる、うんちって、愛（いと）おしく、健気（けなげ）な存在ではありませんか？

* 「生きる」

という言葉が「息・息をする」と語源的につながっているらしいことを思い出しましょう。息（いき）んで（＝気張って）出ただけのことはあります。ごくろうさま。ありがとうございます。さようなら。と声を掛けてやりたくなります。

実際、その日の気分で、そんな言葉を口にして、水で流してお別れする時もあります。ほぼ毎日（※ヒトによっては、不定期に）出あって、別れる、自分の一部。それが、うんちです。

というわけで、うんちに対して、鼻をつまむのではなく、花を持たせてやりたいのです。ですので、

* 「出る」の中心的イメージ（＝コア・イメージ）は、うんちをすることである。

という、このブログでのとりあえずの「定義」にご理解をいただければ、嬉しいです。

*

あっ、忘れるところでした。もう1つ、うんちに花を持たせてやりたい大切な理由があるんです。決定打みたいなものです。

どうやら、赤ちゃんや幼児は、うんちにとっても愛着を感じているみたいなんです。フロイトが、赤ちゃんがお乳と乳房 or 哺乳瓶の乳首に依存し愛着する時期を口唇期、その次を肛門期と名づけたのを、うさん臭く思っていたのですが、あながち出まかせとも言えないなあ、と感じています。

クレヨンしんちゃんの、うんちやお尻に対する愛着と執着なんて、幼児の気持ちをよく観察した結果みたいで、あなどれないです。オトナが、ばばっちい（※広辞苑によりますと「ばば」にはうんちの意味があるとのことです）とか、ばっちいと怒鳴りつけて、しつけ＝押し付け＝教育をしなければ、きっと赤ちゃんは、ずっとうんちと戯れていますよ。

ところで、フロイトにはシリアス（= serious ⇔ silly ass）なのか、おふざけなのか、決断（けつだん）に苦しむほどのお尻への執着がありますね。キリスト教の影響や、狩猟民族・騎馬民族の血を引く中央ヨーロッパの風土が関係しているのでしょうか？ それとも、ユニバーサルなものなのでしょうか？ それだけでなく、何かフロイト自身の幼児期のトラウマみたいなものも感じませんか？

おふざけで、以上のようなことを書いているわけではありません。その点についても、ご理解くだされば、幸いです。

さて、あすは、きのうの記事で「漢字+ひらがな」に「分光」（※この言葉が気に入ってしまいました）＝変換させた、

*「あらわれる・あらわれ・あらわす・あらわ・ある・あり」「でる・いづ・いずる」「いる」「おる」

に当てる漢字たちについて、少しお勉強をしてみたいです。たとえば、「表」と「現」と「顕」ってどう違うのでしょうか。家事の合間に漢和辞典で調べて、せっせとメモづくりをしてみます。

みなさんに、良きお通じが訪れますように。では。

09.05.29 あらわれる・あらわす (5)

◆あらわれる・あらわす (5)

2009-05-29 08:56:43 | 言葉

このところ、赤ちゃん関連の記事を書いていたので、赤ちゃんを見かけると、つい観察してしまいます。育児と子育ての経験がない自分にとって、赤ちゃんウォッチングが楽しみの1つになったようです。もっとも、今はコドモにとっていささか危ない時代なので、不審に思われないように、気をつけております。赤ちゃんの顔に視線を向けていると、にこっと笑みを返してくれる場合があります。最高に幸せな気分になりますね。

話はがらりと変わりますが、自分はどうやらワンちゃんとは相性が悪いようなのです。ネコ（※うちの猫の名前です）がいるので、猫ちゃんはもちろん好きです。ワンちゃんも好きなのですが、向こうがどうもこっちを好きになってくれないみたいなのです。そばに寄ったり、まして撫でてやろうなどとすると、うーっと唸られるか、吠えられます。昔からなんです。どうしてなのでしょう。

「うちの子は、あんまり他人（ひと）に吠えないんですけどねえ」なんて、飼い主さんが、愛犬を弁護するのですが、10匹いたらほぼ8匹に、吠えられてしまうんです。ある知り合いは、「あんたは愛想がないからね（※これって、「あんたってちょっと変だからね」の言い換えだと解釈しております）」とか、「（ワンちゃんが）殺気を感じるんじゃないの」なんて、こっちにしてみれば、こころがぐさりと傷つくようなことを言うんです。

殺気なんて、めっそももないです。どうして、頭くらい撫でさせてくれないんでしょう？ 匂いがからだに染み込んでネコ臭いのですかねえ。とにかく謎です。

でも、赤ちゃんに目を向けて、

わーん！

なんて泣かれないだけでも、感謝しなければならないと思っております。

で、赤ちゃんの顔を見る時に、赤ちゃんを連れている人の顔と比較するのも、楽しみになってしまいました。一緒にいるのは、たいていは、お母さんらしき人、時には、お父さ

んらしき人、おばあちゃんらしき人、おじいちゃんらしき人ですね（※もちろん、事情があって何らかの施設にいる赤ちゃんもいるでしょう）。似ているところを発見するのが楽しいのです。目がそっくり。口元が激似。お口はお父さん似かな？ おばあちゃんとおぼおなじじゃないの。おじいちゃんのミニチュア？ なんていろいろな発見があります。

この、

* 「似ている」

というという言葉、および、現象についても、いつか考えてみたいです。

*

で、きょうは、

* 「あらわれる・あらわれ・あらわす・あらわ・ある・あり」「でる・だす・いづ・いずる」「いる」「おる」

を「漢字+ひらがな=送り仮名」に分光=変換するさいにもちいられる漢字のうち、気になるものだけを、取り上げてみます。まず、漢字別に、「漢字+ひらがな=送り仮名」の使い方からみてみましょう。

* あらわれる・表れる／あらわす・表す：変化が表れる・効果が表れる・影響が表れる・成果が表れる・兆し（※兆候）が表れる・結果に表れる・成績に表れる・顔（or 顔色）に表れる／悲しみを表す・考えを表す・方針を表す・意思を表す・敬意を表す・赤は情熱を表す・名は体を表す・言い表す・言葉に表す・哀悼の意を文章に表す・怒りを態度に表す・数字に表す

* あらわれる・現われる／あらわす・現す：皮膚に湿疹が現われる・太陽が現われる・雲が現われる／真価を現す・馬脚を現す・姿を現す・正体を現す・本性を現す・才能を現す・頭角を現す

* あらわれる・現われる／あらわす・顕す：旧悪が顕れる・徳が顕れる／功績を顕す・功労を顕す・世に名を顕す

* あらわす・著す：書物を著す・小説を著す・名作を著す・自叙伝を著す

* あらわ・露わ／顕わ：露わな肌・感情を露わに言う・矛盾が露わになる・利害が露わになる・対立が露わになる・敵意を露わにする

*でる・出る／だす・出す：太陽が出る・月が出る・風が出る・火が出る・芽が出る・温泉が出る・結論が出る・答えが出る・賞金が出る・給料が出る・給付金が出る・賞金が出る・一等賞が出る・うんちが出る・汗が出る・おしっこが出る・にきびが出る・血が出る・会議に出る・テレビに出る・顔(or 顔色)に出る・会社に出る・選挙に出る・下手に出る・新聞に出る・旅に出る・東京に出る・ここをまっすぐに行くと駅に出る・本が出る・腹が出る・足が出る・高校を出る・玄関を出る・家を出る／うんちを出す・おしっこを出す・鼻血を出す・肌を出す・手紙を出す・届けを出す・意見を出す・注文を出す・お金を出す・本を出す・新聞を出す・食事を出す・お茶を出す・悲しみを顔に出す・窓から手を出す・車を出す・証拠を出す・入賞者を出す・店を出す・名前を出す・火事を出す・速度を出す・口に出す

以上、よく用いられるものを調べました。

*

「ある・いる・おる」まで扱う余裕は、ありませんでした。いつか、やってみたいです。

「表れる・表す」と「現れる・現す」については、自分でも区別してみようと思うものもあれば、

*どっちでもいいじゃんかー

と言いたくなるものがあります。

みなさん、どう思われますか？ こういう区別をするから、国語のテストが嫌いでしたし、実際、成績も悪かったです。夏目漱石の「当て字」のほうが、よほどおもしろいのにな……。

ぼやいても、仕方ないですね。このブログでは、「あらわれる」に、どのような字を当てるべきか迷うと、平気で「現れる＝表れる＝洗われる」なんて、「＝」をつかって平気で併記します。何も、国語＝日本語を破壊しようとか、乱そうとかいう物騒な心意気もないし、血の気も多くないのです。

結果的に、文章というか文体が、乱れてしまう＝壊れてしまう＝ずれてしまう＝とちくるってしまう。そんな感じです。実は、このブログのプロフィールに載せているメールアドレス宛に頂戴する読者の方からの、貴重なコメントのうち、

*「文章が読みにくいから、もっと分かりやすく書いてくれ」

みたいなご忠告が、いちばん多いです。

確かに、過去のブログ記事に目を通すと、最初の頃は、まだおとなしかったですね。だんだんエスカレート＝とちくるってきた、という印象は否定できません。折りにふれて、

*わざと＝故意に「乱している」のです。

という言い訳を書いてきましたが、このブログを初めてお読みになる方は、やはり「めちゃくちゃじゃないかー」とお思いになるでしょうね。実際、そうなんですから、返す言葉也没有ありません。

なお、言い訳は、「かく・かける (7)」2009-05-19 の最後のほうでしていますので、よろしければご一読願います。また、「こんなことを書きました (その8)」2009-05-23 のなかにある「かく・かける (3) ～ (7)」の短い解説でも、触れていますが、ややこしいと思われた方は、無視してください。

いずれにせよ、単なる「独り相撲の弁解＝酔っ払いのくだ」になっています。お恥ずかしい限りです。でも、そういうことが好きなんですよー。もう、こうなると「病気＝ビョーキ」です。逃げも隠れもいたしませんので、どうか勘弁してください。

*

かつて一種の売文業をしていた頃には、こんな独りよがりな文章では、お金がもらえませんので、それなりに「読みやすさ」を心掛けて書いておりました。表記については、『記者ハンドブック新聞用字用語集』（共同通信社刊）と『朝日新聞の用語の手引き』を標準にしろと指示されて、それこそ2冊がぼろぼろになるほど使い込みました。また、納期があるために、結果的に、文章を速く書く練習もさせていただきました。

うちは介護が必要な高齢の親がいるので、すごい早寝早起きをしております。その日によって違いはありますが、だいたい午後9時には就寝、午前4時半には起床しています。ただ、幸いにも介護を手伝ってくれている人がいますので、早朝に比較的時間の余裕があるのです。

ですから、前日に走り書きして溜めておいたメモを見ながら、一気に2時間くらいで毎日のブログ記事を書いております。もっとも、前日に家事の合間などに走り書きメモを用意している時間を合わせれば、通算で5、6時間は書いているかもしれません。ものを書くことは好きなので、苦にはなりません。

また、投稿してから、清書をする癖があるため、ところどころ細かい修正が加わる場合があります。その日のタイトルの下にある日付と投稿時刻以後に、文面が少し変わる

ことがあるのは、そのためです。このことも、ある読者の方から、質問と言うかクレームを受けたので、この場を借りて、弁解をさせていただきます。

ほかのブログ記事に比べると少々長めなので、以上のような書き方をしています。ご理解いただければ幸いです。

何だか、不具合品 or 不良品の謝罪広告みたいになってしまいました。実際、そうですけど.....。

*

とにかく、本題に入ります。きょうは、

*「あらわれる・あらわれ・あらわす・あらわ・ある・あり」「でる・だす・いづ・いづる」「いる」「おる」

を

「漢字+ひらがな=送り仮名」に置き換えたさいに、特に気になる漢字について、複数の国語辞典と漢和辞典で調べた結果も、書いてみたいのです。以下に並べます。

*

*表：表示・表明・表現・表出・表白・表決・表彰・公表・発表・意表・辞表・表記・表象・表音文字・表意文字・代表・表面・年表・図表・表情・表日本・表裏・表沙汰・表皮・表札・表具

【解字】「衣+毛」。毛皮のほうを外に出して着ること。外側に浮き出る。

【イメージ】浮き出る。

*

*現：現出・出現・示現・再現・具現・実現・表現・発現・顕現・体现・現像・現在・現代・現世・現存・現行・現役・現職・現業・現状・現況・現地・現場（※げんば・げんじょう）・現実・夢現（※ゆめうつつ）・現人（※うつせみ）・現象・現前・現金・現品・現人神（※あらひとがみ）

【解字】「玉+音符の見」。玉（※美しい石・宝石）が見えること。

【イメージ】おおっ、まぶしい、すばらしい。目が覚めるようだ。

*

* 顕：顕示・顕現・露顕・顕在・顕白・顕彰・彰顕・顕功・顕名・顕著・顕然・顕花植物
(⇨ 隠花植物)・顕界 (⇨ 幽界)・顕教 (⇨ 密教)・顕蜜・顕学・顕位・貴顕・顕揚・顕達・
顕微・顕微無間・顕微鏡

【解字】元の字は「顯」。左側は「日+糸」。絹糸を日光に当てること。頁は「頭」の意味。
頭部、つまり顔を日の当たる明るいところに出して、くっきりと見えるようにすること。

【イメージ】はっきり、くっきり。あっかるい。

*

* 著：著作・著書・名著・共著・拙著・著述・編著・著録・著者・着衣・着用・着服・着
手・落着・着眼・着意・着実・著著・着目・着色・著名・顕著・著績・著明・著聞

【解字】者は、柴 (※しば) の木を燃やして、火と熱を一カ所に集中する様子を示す。著
は、「艸 (= 草) + 音符の者」で、一カ所にくつつくという意味。のちに、著は、のちに
主に著者の意味で用いられるようになった。

【イメージ】いろいろあったけど、今では著者がらみ。

*

* 露：露見・露顕・露呈・暴露・発露・吐露・露骨・露天・露店・露出・露営・露台・露
地・露命・玉露・甘露・白露・夜露 (※よつゆ)・朝露

【解字】「雨+音符の路」で、雨のつぶや、つゆのように透明という意味。そこから、「透
けて見える」へ。

【イメージ】シースルーで丸見え。すけすけ。

*

* 出：放出・流出・出産・排出・噴出・選出・輸出・輩出・産出・提出・続出・演出・出
力・出火・出血・出版・出品・出荷・出費・出棺・出題・出願・出資・出金・思出 (※おも
いで)・露出・供出・検出・摘出・算出・出色・傑出・突出・抽出・呼出 (※よびだし)・
出来 (※しゅつらい・しゅつたい・でき)・出来心 (※できごころ)・出現・出生・出自・
出身・出典・出没・出欠・出入・出納 (※すいとう)・支出・貸出 (※かしだし)・歳出・
出口・出花 (※でばな)・出鼻 (※でばな)・出合 (※であい)・出土・進出・転出・船出
(※ふなで)・出発・出動・出立・出廷・出演・出頭・出勤・出社・出馬・門外不出・出稼
ぎ・出向・出張・出陣・出撃・出奔・買出 (※かいだし)・出家・出帆・出処進退・出所・
出獄・脱出・

【解字】足が線からはみ出る様子。

【イメージ】おととと。失礼、うっかりしました。

*

*兆・きざし・きざす：兆候・前兆・凶兆・吉兆・兆見・兆占（※ちょうぜん）【※「兆」は、予定外でしたが、ちょっと気になったので、おまけとして調べました。】

【解字】カメの甲羅や獣の骨を焼いてできた割れ（or ひび）の形。その形を、占いに用いたことに由来する。兆には、2つに割れる意味がある。

【イメージ】パンと割れたのはいいが、このひびの形は、これから先どうなるという意味なの？

*

以上の言葉＝漢字の羅列と、主要な漢字のつくり＝「解字」とイメージを眺めましょう。面倒な方は、イメージだけでも、読んでください。「あらわれる・あらわれ・あらわす・あらわ」「でる・だす」を、漢字として見ると、こんな「感じ」に「あわれます」＝「でます」。

*

でも、誤解しないでくださいね。以上の説明は、1つの考え方＝見方でしかありません。言葉という、ヒトがつくって、そして持ってしまったものについて、

*「正しい」vs.「正しくない」ごっこ

をするのは、あまり意味はないと思います。

どうしてかという、ヒトはきわめてテキトーな生き物であり、特に、

*飽きやすく諦めやすく忘れっぽい

のです。

大昔、中国の一部のヒトたちが象形文字をつくり、それを「いわゆる」表意文字だと呼ばれている漢字へとつくりかえていったわけですが、今つかっている漢字の元の意味とか作りをいちいち考えながら、読み書きしているという現実はありません。

*何となく

読み書きしているのが現実だと思います。さもないと、この忙しい21世紀を生きていくことはできないでしょう。したがって、21世紀を生きるヒトたちがとるべき言葉に対するスタンスは、

- 1) 何となくつかう、
- 2) 楽しくつかう、
- 3) 役に立つようにつかう、

以上の3つくらいに分けられると思います。このブログでは、ほぼ2)を心がけています。「ほぼ」が付くのは、「つかう」という感じでもないからです。

2) 楽しく遊ぶ

が正確な言い方かもしれません。

スポーツも含む各種のゲームを想像していただくと、お分かりになると思いますが、「遊ぶ」には、けっこう難しかったり、ややこしかったり、しんどかったりする面があります。面倒な規則＝ルール＝約束事があったり、テクニックやスキルが必要だったり、練習をしないと上達しなかったり、上手い下手があったり、素質や才能や向き不向きがあったり、事故や故障があったりしますね。

言葉で、遊ぶのも、まったく同じです。

「言葉遊び」という言葉があります。ダジャレ＝オヤジギャグも、そのなかに含まれます。「山本山」や「いかたべたかい」や「AKASAKA」みたいに上から読んでも下から読んでも同じというのは「回文（※かいぶん・かいもん）」なんて名前が付いています。英語でもあります。Madam, I'm Adam. なんていうのが有名ですね。

このブログでは、いろいろな言葉遊びをしています。書いているのがオヤジなので、オヤジギャグが圧倒的に多いですが、気づかれないように、ほかの遊びもやっていたりします。一貫して、かなりマジでやっている遊びに、

*「テーマ＝筋書き＝理屈」（※抽象的）を、「テーマに登場する言葉たちの身ぶり＝表情＝運動」（※具体的）に演じさせる。

というのがあります。

さきほど、

★なお、言い訳は、「かく・かける（7）」2009-05-19の最後のほうでしていますので、よろしければご一読願います。また、「こんなことを書きました（その8）」2009-05-23のなかにある「かく・かける（3）～（7）」の短い解説でも、触れています――

と書いたことと大いに関係あるのです。ちょっと説明させてください。

*

今、書いているシリーズには、「あらわれる・あらわす」というタイトルがついていますね。その親戚の「でる・だす」までが出てきて、きのうは、うんちの話になったりしています。いったい、何をやっているのかと疑問に思われるのも当然です。

よく読んでいただくと、たぶん、薄っすらと感じられると存じますが、「一種の言葉の遊び」をやっているのです。比喻をつかって説明します。

*○○というタレントを△△という物まね芸人が真似るのを、○○本人が真似る。

というケースがありますが、あれとちょっと似ています。ただ、物まね芸人がないだけです。つまり、

*○○というタレントが、○○自身を演じる。

という感じです。比喻を用いないで説明すると、さきほど紹介述べました、

*「テーマ＝筋書き＝理屈」(※抽象的)を、「テーマに登場する言葉たちの身ぶり＝表情＝運動」(※具体的)に演じさせる。

と言えます。

でも、これは多分に独り相撲的な遊びなので、

*オヤジギャグを言った本人だけが、1人で受けまくっている

という、「まことにみっともない＝恥ずかしいのきわみ」になっている可能性が非常に高いのです。でも、やっちゃうんですよー。さっき申しました、「病気」＝ビョーキです。

で、例の、

*「テーマ＝筋書き＝理屈」(※抽象的)を、「テーマに登場する言葉たちの身ぶり＝表情＝運動」(※具体的)に演じさせる。

を、今回のシリーズに当てはめると、次のようになります。

A) あう・であう ⇒ みる・ちかくする ⇒ あらわれる・でる

B) 合う・出合う・出遭う ⇒ 見る・知覚する・近くする ⇒ 現われる・洗われる・あら、割れる・出る

A) と B) は、基本的に同じです。違いは、上が「ひらがな」ばかりで、下は「漢字＝感字＋ひらがな＝送り仮名」で書かれていることだけです。A) も B) も、今、このシリーズでやっていること、つまり、「テーマ＝筋書き＝理屈」(※抽象的)であると同時に、シリーズで扱っている「テーマに登場する言葉たちの身ぶり＝表情＝運動」(※具体的)でもあるのです。もっと短く、次のようにも言えます。

* 「A) と B)」をつかって、「A) と B)」を演じている。

こんだけーです (※本当は、「こんだけー」じゃなくて、もっと「もっともらしい＝格好をつけた」説明の仕方もありますが、きょうは恥ずかしいので、やめておきます)。

でも、本気でやっています。正気とは言う勇氣はありませんが、本気です。で、「はあ？ アホか、こいつ？」とお思いになった方、

* 正解です。

アホをやっているんです。それ以上でもそれ以下でもありません。ふつう、こんなことやる人はいません。ということは、ふつうじゃない、尋常じゃない、つまり、アホ、ということですよ。

「アホがアホを演じる」まではいいのですが、このアホがほんまもんの場合には、「あんた、ほんまもんやから、こわいわー」になります。

*

でも、ふだんは、このことは隠しています。というか、本人は「隠している」つもりでいます。だから、周りの人の目からは、「変だぞ、こいつ」くらいで済んでいるのではないかと薄々感じておりますが、「薄々どころか、かなり、変だって、とっくに気づいているぞよ」と、お思いになっていらっしゃる方が大半かもしれません。そうなると、実際、

* バレバレ＝「あんた、ほんまもんやから、こわいわー」(※アホの坂田さんのわけの分からないギャグを拝借しております)

状態だということになります。

でも、このアホは、自分以外にも、もう1人、坂田利夫という、つよーい味方＝お仲間がいるので、めげずに続けていくつもりです。ところで、坂田さん、相棒さんの件、だいじょうぶなんですか？ よかったら、微力ながら……。やばいことを書きそうになりました。前言撤回します。言霊が怖いので、削除はしませんけど。

というわけで、きょうは、アホのバレバレ・カミングアウトをしちゃいました。あすは、アホを「薄々＝実はバレバレ」隠しながら、きょうお勉強したことを含め、シリーズを続ける予定です。

ですので、ぜひ、また、あすも、このサイトに遊びに来てくださいね。お待ちしております。

09.05.30 あらわれる・あらわす (6)

◆あらわれる・あらわす (6)

2009-05-30 08:51:11 | 言葉

きのうは坂田利夫さんについて書きましたので、きょうは、高倉健さんと、故・忌野清志郎さんのことを書いてみたいです。このお三方に共通するのは、自分が好きだという点だけです。誤解のないようお願い申し上げます。

同時に、タレントや有名人と呼ばれる人たちが、どのような役割を果たし、いかなる仕組みで社会において受けとめられているか、本人はどう自分自身を見ているのかについても、考えてみたいです。

以前、タレントは「トリトメのない記号＝まぼろし」として、消費され、いつかは消えていくという意味のことを書きました。

簡単に申しますと、タレントさんにはまことに失礼な言い方になりますが、タレントという存在は、スーパーに売られている商品に似ているということなのです。つまり、大量生産された、そっくりなものがずらりと並んでいる。それを人がお金と引換に入手し＝購入し、使用＝消費し、あるいは、保存し、いつか不要になった時点で、廃棄 or 処

分する、というイメージです。大臣も含む国会議員も同じような存在です。どれも大差なく取り換え可能だ、とも言えます。

そうした特徴をもつものを、「トリトメのない記号=まぼろし」と、このブログでは呼んでいます。

森羅万象が、「トリトメのない記号=まぼろし」になり得ます。ヨーグルト、パソコン、ケータイ、クルマ、ノートやペン、クルマ、キュウリやナスなど.....もそうです。このブログを書いているアホも含めて、ヒトである限り誰もが「トリトメのない記号=まぼろし」になり得ます。ただし、そういうふうにみなすことも可能だ、くらいの軽い意味で取ってくださいね。

そんな「トリトメのない記号=まぼろし」にも、晴れの舞台や脚光を浴びる時があります。コモディティ化=陳腐化に逆らって、差別化や特化をすればいいのです。

すると、廃棄 or 処分までのあいだが長くなります。珍重され、活躍の期間が延長されるわけです。次々と「出て or 現れて」「消えていく」ミュージシャン、タレント、俳優のなかで、忌野清志郎さん、高倉健さん、坂田利夫さんは、目覚ましい活躍をされています。忌野清志郎さんは、その半ばで亡くなったわけですから、ファンとしても残念でなりません。

*

きのうは坂田利夫さんが「アホ」を、

*演じて

いらっしゃることについて触れました。

さて、高倉健さんを映画作品で見ている、いつも感じるのは、個性が非常に強いということ。映画の登場人物と高倉健という俳優とがかぶる=重なる=ダブるという意味です。いろいろな役柄を演じ分けることができる、

*器用な

役者さんというより、

*ぶきっちょ=不器用な

ところが魅力である役者さんだと思います。その意味では、もう物故された俳優の笠智

衆（りゅうちしゅう）さんに通じる魅力を備えているように感じます。

忌野清志郎さんも、ほかのミュージシャンとは取り換えのできない存在感がありました。自分は中学生の頃、いわゆる和製のグループサウンズに熱中しましたが、GS時代が終わった以降の海外のロックや和製のロックの隆盛には興味がなく過ごしてきました。

それなのに、RCサクセションというより、忌野清志郎という存在に、なぜか興味を引かれていました。テレビでその歌っている姿を見ると、どういうわけか見入っていたという感じです。享年を聞き、びっくりしました。忌野清志郎さんも、

* 器用な

ミュージシャンというより、

* ぶきっちょ＝不器用な

魅力を持っていた方だと個人的に感じております。

その意味では、「差別化」「特化」していた、と言えるのではないのでしょうか。清志郎さんが亡くなったとき、日常生活では、いい意味で「常識人」だったと聞きましたが、単なる死者への儀礼の言葉とは受け取れませんでした。

*

坂田利夫さんも、アホを演じることで、「差別化」「特化」に成功しているお笑いタレント・ナンバーワンだと思います。

* 「アホ」

とか

* 「アホの」

とか口にした場合、この国で生まれ育った人の70%以上の方が（※関西では90%以上ではないでしょうか）、その言葉を聞いて、すかさず、

* 「坂田」

と声に出して言うか、あるいは、その固有名詞なり顔なり仕草をあたまたに浮かべるので

はないでしょうか。これって、すごいことです。このブログを書いているアホ以外に全国に多数いるはずのアホのなかで、巨星のようにきらめいているのです。アホの独り占めです。独禁法違反ですよ。

で、何を言いたいのかと申しますと、実は、きのうの話の蒸し返しなんです。きのうの記事の核心部分をコピペさせてください。

*

★で、例の、

*「テーマ＝筋書き＝理屈」（※抽象的）を、「テーマに登場する言葉たちの身ぶり＝表情＝運動」（※具体的）に演じさせる。

を、今回のシリーズに当てはめると、次のようになります。

A) あう・であう ⇒ みる・ちかくする ⇒ あらわれる・でる

B) 合う・出合う・出遭う ⇒ 見る・知覚する・近くする ⇒ 現われる・洗われる・あら、割れる・出る

A) と B) は、基本的に同じです。違いは、上が「ひらがな」ばかりで、下は「漢字＝感字＋ひらがな＝送り仮名」で書かれていることだけです。A) も B) も、今、このシリーズでやっていること、つまり、「テーマ＝筋書き＝理屈」（※抽象的）であると同時に、シリーズで扱っている「テーマに登場する言葉たちの身ぶり＝表情＝運動」（※具体的）でもあるのです。もっと短く、次のようにも言えます。

*「A) と B)」をつかって、「A) と B)」を演じている。

こんだけーです（※本当は、「こんだけー」じゃなくて、もっと「もっともらしい＝格好をつけた」説明の仕方もありますが、きょうは恥ずかしいので、やめておきます）。

*

★から以上までが、引用部分です。

で、最後に書いてある

*「もっともらしい＝格好をつけた」説明の仕方

というのを、きょう、やってみたいのです。アホが格好をつけても、格好をつけたアホでしかありませんが、やらせてください。

個性の強い、つまり、「差別化」「特化」に成功しているタレントというのは、

*意図的に=意識して=故意に=わざと=自ら or 所属事務所の方針で、

そうになっている場合もあれば、

*期せずして=なりゆきで=どういうわけか=自然に=無作為に or 作為的なのが普通になっちゃって、

そうになっているケースもあるように思いませんか？

いずれのケースでも、結果的に、そうなって、そこそこ成功しているのであれば、引き返すことはできないというか、たいていは、後戻りや路線変更やイメチェンはしません。ファンを裏切ることになるからです。また、収入が激減するリスクがあるからです。言い換えると、

*いったん、出来てしまった=現れてしまった=出てしまった自分自身のイメージ

とそのタレント自身とは、付き合っ=折り合っ=手なずけて=手なずけられて=共生・共存していかなければなりません。これって、ひょっとすると、しんどいことなのではないでしょうか。

かなり前のことですが、いつだったか、誰かがテレビで、

*アイドルは、うんこもおしっこもしません

なんて意味のことを言っていました。それを聞いて、アイドルって職業も、大変だなあ、と思ったことをはっきりと覚えています。だって、そうじゃありません？ 渋谷なんかをプライベート=お忍びで歩いていたら、突然、

*キャーという黄色い声や、

*ウォーなんていう、だみ声が、

飛んでくるかもしれない身なんですよ。

そんな人が、こっそり、デパートのトイレなんかに入れますか？ または、「そっと」だ

としても、公衆のなかで、おならなんてできますか？ そう思うと、しんどいと感じられません。ご同情申し上げます。いろいろ大変ですねー、なんて。

つまり、

*いったん、出来てしまった＝現れてしまった＝出てしまった自分自身のイメージ

というのは、諸刃（もろは）の剣（つるぎ）みたいなものです。公私共に行動には、慎重にならざるを得ません。ひとつ間違うと、大スキャンダルです。酒、クルマ、おクスリ＝ドラッグ、恋愛、家族、お金、交友関係.....何もかもがリスクな存在＝要因になり得ます。

週刊誌やテレビの芸能ニュースやネット関連の目が、常に光っているのです。虎視眈眈（こしたんたん）と狙う目がどこにあるのか、分かったものじゃありません。へたをすれば、さっそく、掲示板に書き込まれますよ。「証拠写真はこちらをクリック⇒「CECE」」なんて具合に。他人様のこととはいえ、想像しただけで、ぞっとします。1人で受けて立つ「監視社会」みたいなものです。

*

で、高倉健さんなんかの映画での演技と、映画以外の映像とを見比べていての印象＝感想なのですが、両者のイメージにあまり差がないように感じられませんか？ もっとも、私生活での健さんは、わりとおしゃべりになる方だと、ちらりと聞いた覚えがありますが、映像で見る限りは、朴訥（ぼくとつ）で寡黙な印象ですよ。

*健さんは、人前でも常に健さんを演じている。

と言えば、健さんに失礼でしょうか。個人的には、驚嘆しているというか、称賛しているつもりなのです。健さん、格好いい！ なんて。一方で、健さんにしてみれば、多少窮屈な思いもされているように想像＝妄想してしまいます。

*

で、当ブログ恒例の、こじつけ＝でまかせ＝アホ芸に入ります。タレントさんや有名人の、

*いったん、出来てしまった＝現れてしまった＝出てしまった自分自身のイメージ

は、まさに、

A) あう・であう ⇒ みる・ちかくする ⇒ あらわれる・でる

B) 合う・出合う・出遭う ⇒ 見る・知覚する・近くする ⇒ 現われる・洗われる・あら、割れる・出る

ではないでしょうか。

どういふことかと申しますと、故意であれ、なりゆき上であれ、自分自身のイメージというのは、

1) 「あう・であう・合う・出合う・出遭う」：自分自身ではコントロール＝制御できない状況で、出来上がる。たとえば、ある映画作品で演じた役にはまってしまう。ファンが、役と役者を同一視してしまう。

2) 「みる・ちかくする・見る・知覚する・近くする」：上での作品で出来上がったイメージを、本人が「あれって、誰？ ひょっとして、わたし？ なかなか決まっているじゃん」と知覚し、身近なもの＝ほぼ自分自身として受け入れる態勢が整いはじめる。

3) 「あらわれる・でる・現われる・洗われる・あら、割れる・出る」：ファンや社会が、「そのヒト＝そのイメージ」を認知＝消費し、流通＝普及させ、定着＝浸透＝深化＝長期化させる。本人および事務所が「しめた！」「よし、これでいこう」と決意したり、「ありゃりゃ」「ま、いっか」と半ばテキトーに、ファンと社会主導の流れ＝波＝勢いに乗ってしまう。スター出現。昔だったら、映画館の看板に水をかけて、先輩スターの姿＝イメージが「洗い」落とされ、新人のスターがペンキで新たに描かれる。打ち上げパーティーで祝い酒の樽が「割られ」、出席者に枡酒がふるまわれる。ついに「出た」ぞ、大型新人。パチパチ（※拍手）。

という感じです。

めっちゃくちゃこじつけました。でも、言えてませんか？ 言えてるって、言ってくださいよー。とアホの泣き落とし。

肝心なところは、

*いったん現れてしまう＝出てしまうと、なかなか引っ込みが付かなくなる。

点です。その「現れ」「出」が鮮烈で長続きしそうなものであればあるほど、その傾向は強まります。「熱い！ やばい！ 間違いない！」です（※再度、この文句を使用しましてすみません。なお、不快な思いをいだかれた元関係者の方々に、お詫び申し上げます）。

*

さて、タレントおよび有名人という具体例で検証をしたのちに、

A) あう・であう ⇒ みる・ちかくする ⇒ あらわれる・でる

B) 合う・出合う・出遭う ⇒ 見る・知覚する・近くする ⇒ 現われる・洗われる・あら、割れる・出る

について、上でコピペをした部分のうち、

A) も B) も、今、このシリーズでやっていること、つまり、「テーマ＝筋書き＝理屈」(※抽象的)であると同時に、シリーズで扱っている「テーマに登場する言葉たちの身ぶり＝表情＝運動」(※具体的)でもあるのです。もっと短く、次のようにも言えます。

* 「A) と B)」をつかって、「A) と B)」を演じている。

と書かれた個所を、説明させてください。きのう、少しやりかけたのですが、時間がなかったのと、間借りしているブログサイトの文字数制限にひっかかりそうだったのでやめてしまったのです。

* 「テーマ＝筋書き＝理屈」(※抽象的)を、「テーマに登場する言葉たちの身ぶり＝表情＝運動」(※具体的)をもちいて演じさせる。

とも言い換えられます。

これは、自分としては、ブログで記事を書き始めて以来、一貫して心がけているスタンスなのです。「何がスタンスだ、このオタンコナス！」などと、あきれ返らないでください。本気なんですよー。

きのうは恥ずかしいというか、失礼になると考えて、書くのを控えたことを、書かせてください。

ある文学作品、あるいは文学というもの、哲学の著作、あるいは哲学というものをテーマにして、論じようとするします。そのさいに、

* そのテーマについて＝関して論じる方法

が一般的です。

Aというテーマがあれば、Aそのものを書けば、引用・複製・コピーしただけになります。したがって、Aの代わりにBやCやD……をもってきて、継ぎはぎしたり、ちょっと変えたりして、Aそっくりにならないように気をつけながら、Aを論じる＝説明する＝批評する＝批判する or 賛同する、という作業をします。

学術論文であれば、自説と引用との区別をかなり厳密にし、引用した場合には出典を明記しないと、学会を追われる場合すらあります。本として売ればいいというスタンスで書くとなると、少くともテキトーでもかまいません。まして、素人が対象の啓蒙書（※もう、死語ですか？）やハウツー本の類であれば、きわめてテキトーでまかり通ります。しょせんビジネスですから、売ればいいのです。

*

一方、

*そのテーマを、そのテーマについて書くつもりで文章に登場する＝用いる言葉たちの表情・めくばせ・身ぶり・運動に、演じさせる＝模倣させる方法

を試みようとする場合もあり得ます。

具体例を挙げると、ノイズがテーマになれば、「と、いうわけです (2)」2009-05-24 のように、言葉たちにノイズを演じさせます。すると、とうぜん、読みにくくなります。また、「書く・書けることは賭けることだ」がテーマの場合には、「書く・書ける (2)」2009-05-22 のように書きます。正確に書こうとするあまり、文章がややこしくなっています。

さらに、自分の書いた文章の読み方を解説するという、まことにみっともない邪道をしている例が、「あう (4)」2009-04-30 と「あう (5)」2009-05-01 です。万が一、興味がおありでしたら、ご一読いただければ、嬉しいです。アホにはついていけないとお感じの方は、パスしちゃってください。

なぜ、こんな一種の言葉遊びをしているのかと申しますと、言葉は表象である。つまり、言葉は、言葉が指し示す「もの（＝形や動き）」の代わりでしかないからです。諦めと言ってもいいです。ですので、この言葉遊びは、

*言葉たちが「ある形や動き（＝実体＝不可能性）を描いている『振りをしている』（＝演技＝ほぼ可能性）だけ」にしかすぎないのなら、その言葉たちが描いている形や動き（＝実体＝不可能性）を追求することは放棄して、その「振り」（＝演技＝ほぼ可能性）自体を、鏡に映すように、その言葉たちが描いている形や動きの「振り」（＝演技＝ほぼ可能性）自体を言葉たちに再演（＝ほとんど可能性）させる。

ことを選ぼうという、方法＝戦略とも言えるみたいなのです。

ただし、この方法＝戦略は、このブログを書いているアホが勝手に思い込んでいる一人受けギャグである可能性が非常に高いのです。したがって、まことに失礼であると承知のうえで、あえて、そういう方法で書かれているのではないかと、勝手に想像＝妄想している他人様の著作の名を挙げてみたいと存じます。

なお、その著作のタイトルをご紹介するにあたっては、著者名はあえて省かせていただきます。なぜなら、著者は関係ないからです。著者名も、しょせん、固有名詞＝言葉ではあるといえ、生身の人間として実際にその著作を書いたのではないか。そう言われれば、はい、ごもっともです、と答えるしかないのですが、固有名詞のそなえているパワーというのは、とてつもなく強いのです。

この点については、初期のブログ記事「あえて、その名は挙げない」2008-12-24、「遠い所、遠い国」2008-12-25、「横たわる漱石」2008-12-26 で書きました。まだ、とちくるとい文体に染まっていく前の文章なので、比較的読みやすいと思います。お時間があれば、どうか、ご一読願います。

では、ご本を紹介いたします。

『批評あるいは仮死の祭典』、『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』、『泉鏡花論—幻影の杼機』、『谷崎潤一郎—擬態の誘惑』、『余白とその余白または幹のない接木』、『砂の顔』、『引用の織物』、『紙片と眼差のあいだに』

です。

残念なことに、現在、これらの本は手元にありません。でも、ある意味では、そのほうが自分には幸せなのです。夢のなかでしか出あうことができないからです。今は、読むことより書くことに専念しています。夢は、個人的な秘密＝謎＝空間＝イメージの詰まった箱です。書くという作業は、自分にとって、その夢を見ることと大差はないのです。さらに、妄言を申しますと、書くことは読むことと大差はないのです。

上記の本たちと再会できないのには、経済的余裕がないとか、図書館や古本屋に行こうとしても、家事と親の介護で長時間の外出ができないという、事情もあります。でも、そんな事情より、インプットはもういい、アウトプットするだけで精一杯だし、それで満足だ、という現在の心境のほうが強く働いています。だから、別に悔いはありません。

書くという作業は、事を書くと同時に事欠くこと、つまり、不自由さを実感する行為でもあります。きりがありません。息がこと切れるまで、「書く＝欠く＝読む＝詠む」こと

ができれば、自分にとってそれ以上の幸せはありません。

*

で、ご紹介した本たちに話をもどしますが、なかには大きな図書館でなければ、もう閲覧できない本があるかもしれません。比較的入手しやすいものもありそうです。検索をしたり、実際に本を手にとれば、著者名は目に入りますが、できれば、

*その本に書かれた言葉たちの表情・めくばせ・身ぶり・運動に身を任せて、じっくり読んでみる。

という作業を実践してほしいなあ、と思っております。

ところで、坂田利夫さん、高倉健さん、故・忌野清志郎さんは、自分自身という生身の存在として、有名人としての自分のイメージと、どうやって折り合っている(Or いらっしやった)のでしょうか？ でも、有名人に限らず、ヒトは誰もが、同じように、

*自分自身と、自分のイメージとの「間(=ま・あいだ・あわい) = 際(=さい・きわ)」で宙ぶらりんで、ぷかぷかと、揺れ動いている。

のではないのでしょうか。

だいいち、自分自身=自我とであれ、自分のイメージとであれ、本当に、

A) あう・であう ⇒ みる・ちかくする ⇒ あらわれる・でる

B) 合う・出合う・出遭う ⇒ 見る・知覚する・近くする ⇒ 現われる・洗われる・あら、割れる・出る

できているのか、と自問してみるなら、でてくる、

*答えそのものが、宙ぶらりんで、ぷかぷかと、揺れ動いている。

つまり、問いそのものを、

*模倣する=真似る=鏡に映った自分にまなざしを送るだけ

と、とりあえず and/or せいぜい、言葉にしてみるしかないのです。

あとは、

*全身で知覚する＝運動する＝生きる＝息るのみ

という状況を、素直に身に引き受ける。そんだけ一、ではないかと思います。ややこしいことを書きましたかもしれませんが、どうしても、書きたかったことなので、ご容赦いただければ、幸いです。

あすは、「あらわれる・あらわす・出る」につきまとう、幽霊のような、「イメージ」という言葉について、書いてみたいです。ぜひ、遊びに来てください。

清志郎 歌は祈りと 夢で言い

アホひとり 言葉は言葉 夢で書き

09-05-31 あらわれる・あらわす (7)

◆あらわれる・あらわす (7)

2009-05-31 08:55:30 | 言葉

想像してみてください。この地球上で、現時点に、あなたのことを想っているヒトは何人くらいいるのでしょうか。いるとすれば、誰でしょうか。常に、自分のことを見守ってくれる「存在」がいる。そうおっしゃる方もいるにちがいありません。ヒトではなく、「存在」がです。申し訳ありませんが、宗教やスピリチュアル関連のテーマは苦手なので、ヒトに限定して話を進めさせてください。

誰かが自分のことを想う。または、自分が誰かのことを想う。そういう場合に、

*イメージ

という言葉をつかうことがありますね。曖昧でとらえどころのない言葉です。その意味では、

*幽霊

に似ていませんか。「なんだ、宗教やスピリチュアルが苦手な者が、幽霊だって？」とおっしゃる声が聞こえるような気がします。ここでは、幽霊自体（※そのようなものが存在するかどうかは知りません）のことを論じてはいません。「幽霊」という言葉について話しているのです。

さて、「幽霊」だと「出る」と言います。「あらわれる」と言うかどうかは人によって差がありそうです。ただ、「霊」だとどちらかといえば、「あらわれる」のほうが優勢かな、という感じがします。これも個人差がありそうです。

*

*イメージ

という言葉の場合には、どうでしょう。「イメージが出る or あらわれる」は、個人的にはしっくり来ません。「をいやく」「がある」「をもつ」「がわく」「がうかぶ」「をつかむ」「をおもいうかべる」「する」「をおもいだす」「をここに、えがく」「がふくらむ」「が喚起される」「をかんじる」といったところでしょうか。

もっとも、イメージの「もと=元=素=本体・実体・本尊」はヒトとは限りません。森羅万象がなり得ます。今、あなたがあたまのなかに思い浮かべているものすべてが、イメージです。実在するかどうか、物体であるかどうか、も関係ありません。実在する物・事・現象、架空の物・事・現象.....何でもがイメージです。極端なことを言えば、今、手にしているものでさえ、イメージ。自分自身の身体と精神 or ころさえも、イメージ。そう考えている人もいます。

で、結論から申し上げますと、イメージって、

*きわめてテキトー

なものだ、と言えるような気がします。

たとえば、今、あなたのことを想っている複数の人がいるとします。その人たちのなかには、あなたに対して良いイメージをいただいている方も、どちらかという悪いイメージをいただいている方もいるわけです。そのどちらでもないイメージを思い描いている方もいるにちがいません。

言い換えると、きわめて不安定で、気まぐれで、信頼性に欠けるということです。短絡的で軽佻浮薄（けいちょうふはく）な表現になりますが、

*イメージとは、いかがわしくて、うさんくさくて、あてにならなくて、テキトーだ。

と言ってかまわないのではないのでしょうか。

人にたとえるなら、「要注意人物」＝「危険人物」＝「ヤベーやつ」＝「あやういやつ」です。はあ？「おまえと同じだ」ですか？返す言葉ありません。

*

きのうから、イメージについていろいろ考えていたら、寝不足になってしまいました。きょうの記事を書くために用意した、走り書きメモが、PCの横に盛り上がっています。8束に分けてクリップで止めておいたのを、整理しようとして、さっき外したところ、ネコ（※うちの猫の名前です）が部屋に入ってきたのに驚いて、思わず、デスクから落ちて散らばってしまったのです。ひとりで大騒ぎをしていると、ネコのほうがびっくりして、部屋から出て行っちゃいました。

メモは、いつもの5、6倍の数になります。夜中に、起きて書いたものもあり、自分の字なのに読めないものもあります。いつもは、メモを整理して、パッチワークのように継ぎはぎしながら、でまかせに記事を一気に書くのですが、きょうは無理みたいです。收拾がつかないのです。ですので、「イエス・アイ・キャン」2009-02-27で、試みたように、きょうはメモに少し手を加えて並べていくという、

*「断片集」

というか

*「つぶやき集」

のような形にします。七夕の短冊のように、宙ぶらりん、ひらひらと断片が舞う様子をご覧ください。こんな形で横着をしてみません。ただ、ある程度、テーマ別に、グループ分けをしておきました。それにしても、「イメージ」のトリトメのなさには、閉口しました。「イメージ」って、奥が深いなあ、とも感じました。

*

★イメージ

*ヒトは、「絶対他者」には出あえない。「絶対他者」の「影」とおぼしき「イメージ」＝「自分の知覚した結果を受けとめた、意識というスクリーンに映った像」だけに出あう。ヒトは、「自分自身」にも出あえない。したがって、生まれて間もない赤ちゃんが、まわ

りの世界＝他者に（を）、

A) あう・であう ⇒ みる・ちかくする ⇒ あらわれる・でる

B) 合う・出合う・出遭う ⇒ 見る・知覚する・近くする ⇒ 現われる・洗われる・あら、割れる・出る

というのは、フィクション＝作り話＝おとぎ話＝説明のための方便＝妥協の産物、である。

*イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味らしい。つまり、「にせもの＝偽もの」ということ。

*何かに「似ている」ということが、前に見た記憶があるという意味ならば、その「前」とはいつなのか？ どこで、なのか？「前世」だと考えるヒトもいるだろう。自分は「前世」を否定してはいない。肯定もしていない。ただ、分からないだけ。

ただし、イメージを「前」に見た「記憶」の、「断片」＝「一部」＝「残照」とするなら、その「前」とは「今」だと思う。「過去」＝「現在」という意味。

なぜなら、ヒトが、「他者＝外」を、(1) 知覚器官で「信号」として受信＝「知覚」し、(2) ニューロン＝経路を通して「伝達」し、(3) 脳において「情報＝データ＝信号」として「処理」したのちに、(4) その処理された「情報＝データ＝信号」を、「意識」＝スクリーン＝画面に「イメージ＝まぼろし」として、映し出す＝「受理」する、と考えられるからであり、(5) ここまでの過程のうち、(1) の「知覚」と (4) の「受理」のあいだに「タイムラグ＝遅れ」＋「ノイズ＝乱れ＝ずれ＝くるい」が生じると言われているからである。その「タイムラグ＝遅れ」が、1秒の何百、何千、何万分の1のかは知らない。ただ、ヒトの意識は、それをほぼ「同時」、つまり、「過去」＝「現在」として認識するのではないだろうか。

*

★意識

*脳の「情報処理」の速さに、「意識」はついていけないのではないか。その理由として、ヒトは1度に1台の「テレビ画面」＝「注意を集中することが可能な、意識のスクリーン」しか見る＝知覚することができないという、構造＝仕組み＝メカニズム＝限界性＝枠を想定してもいいのではないだろうか。

【※以上の点については、「人面管から人面壁へ」2009-02-10でも、触れました。】

以上の限界性は、「知覚器官」における「知覚」と、脳で処理された情報＝信号を、「意識」が「認識する」までのタイムラグ＝遅れを、著しく増大＝増幅すると考えられる。それだけでなく、「意識」といういわば「ぼけーっとした」＝「信頼性が乏しい」＝「テキトーな」＝「不安定な」存在 or 現象が、それ自体の特性か、あるいは、外的要因によるものか、または、その両者に起因するのか、定かではない「ノイズ＝乱れ＝ずれ＝くるい」の発生と組み合わせり、上記のタイムラグ＝遅れを、さらに増大＝助長させているとも考えられる。

以上述べた、タイムラグ、「意識」の不安定さ、ノイズの3者による、相乗作用によって、それ自体が信頼性に乏しい「意識」という存在 or 現象が、1秒の何百、何千、何万分の1のかは不明である時間内に、脳が処理した情報＝データ＝信号を、数分前、数時間前、数日前、数週間前、数カ月前、数年前、数十年前、あるいは、前世に生じたものとして「受理」＝「錯覚」することがあっても、不思議はないのではないか。

つまり、「意識」に備わっている、情報＝データ＝信号の「受理」能力は、そうとう鈍いのではないか。

*

★脳と意識

*ヒトの「脳」と「意識」とを、厳密に区別する必要があると思われる。「脳」の情報処理能力が、きわめて速く、また、優れている＝信頼性が高いのに対し、「意識」は、想像力＝想像力＝妄想力＝空想力＝夢想力＝幻想力＝思考力を肥大させていると考えられる。その「意識」の途方もない＝とんでもない＝すごい＝驚嘆すべき特性を、大いなる乱れ＝ずれ＝くるい＝錯覚の「常時産出態勢」と呼ぶことも可能であろう。

*「意識」に備わってと考えられる、上記の特性を前提とするならば、ヒトが、(1) 脳によって処理された情報を「意識」が「受理する」という形で、あるいは、(2) 「意識」が(1) で受理した情報を「受理しそこなう」という形で、または、(3) 「意識」が、(1) と(2) とは無関係に、『マトリックス＝元情報』を欠いたコピー＝「コピーのコピー」＝「意識自体による情報の産出＝ほぼ誤作動＝捏造」という形で、『認識』が生じたと『意識』が信じている＝思い込んでいる」という事態も、あり得るのではないか。

*上記の仕組み＝メカニズムを前提とするなら、上記の「認識」の産物＝結果として、日常生活において「現実＝他者＝外」および「現実＝自分自身＝内」を「認識」したり、あるいは、オーラ、スピリチュアリティ、〇〇様、前世、来世、予知、予言、預言、靈感、占い、賭け、投資、投機、自己改善、発想法、思考法、処世術、コーチング、心理療法、

霊、神、神々、仏、妖精、超常現象など、と呼ばれている「物・事・現象・言葉」を、「現実＝他者 or 自分自身＝外 or 内」の1部として、「認識」することも、あり得るのではないだろうか。

また、ヒトは、自分の「意識」が「認識」したものを、「錯覚 or 幻想 or でたらめ or 精神的病理現象」として疑うこともあるだろう。それは、ケースバイケースで行われていると考えられる。

【以上の補足として申し添えますが、ヒトの「意識」のネガティブな特性を、「飽きっぽさ・諦めやすさ・忘れっぽさ」という言葉で考察した、「おいしくない社会」2009-02-23、「あきらめない」2009-02-24 という記事を、合わせてお読みいただければ幸いです。】

*

★意識と整合性

*「意識」は、脳から受理した情報＝信号を、大量に蓄積し、改変し、組み替えると同時に、受理してもいない情報＝信号を偽造し、捏造し、複製している節がある。その結果、「意識」は、体よく言えば、「想像界」＝「思考界」、ぶっちゃけた話が「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃの玩具箱」＝「信頼性に欠けるイメージのアミューズメントパーク＝遊園地」を運営しているのではないだろうか。また、「意識」が主役となって「思考する」あるいは「認識する」という行為は、捏造された＝思い込まれた＝人為的な、整合性のパーツである「理・必然性・法・業・因果・意味・条理・有意味・有・在」という名のもとに、大混乱とカオスを展開することにほかならないのではないか。つまり、「意識」の想定＝信奉している整合性は、幻想ではないだろうか。ただし、そのヒトのいだいている幻想が、仲間を月に送り込む程度の有効性を備えていることは、言うまでもない。その程度の実効性が、ヒトに自信＝驕（おご）りを与えていることも、否定できない。

*

★イメージの力および効用

*おびただしい数のヒトたちが、オーラ、スピリチュアリティ、〇〇様、前世、来世、予知、予言、預言、靈感、占い、賭け、投資、投機、自己改善、発想法、思考法、処世術、コーチング、心理療法、霊、神、神々、仏、妖精、超常現象など、と呼ばれている「物・事・現象・言葉」をテーマ＝素材にした出版物、テレビ番組、映画、イベント、組織＝団体＝集団、個人、ウェブサイトなどに惹かれたり、購読 or 購入 or 視聴 or 参加 or 加入 or 崇拜 or 訪問するのは、ヒトの「意識」がそうした類のものを「欲求している＝欲している＝求めている」からだと考えられる。

また、実際、そうしたものによって、救済、癒やし、納得、娯楽、幸福感、全能感、エクスタシー＝忘我＝法悦、満足感、充実感、安らぎなどの感情を得るヒトたちが数多くいる。それとは、逆に、絶望、失望、こころの動揺、不安、恐怖、不快感、怒り、憤り、騙されたという感情などを得るヒトたちも数多くいる。

上記の「物・事・現象・言葉」をテーマ＝素材にした出版物、テレビ番組、映画、イベント、組織＝団体＝集団、個人、ウェブサイトなどが、1国あるいは1共同体において経済活動の一翼を担っていたり、グローバルな経済活動および社会運動を展開していることも事実である。その意味では、個人レベルのイメージが、集団レベルで共有されたイメージとして、肥大化＝増大化する可能性＝パワーがあることは無視できない。それを、ヒトが、必然的＝人為的＝本能的に生み出しているイメージの効用と、みなすこともできるであろう。

*

★謎＝疑問

*一般論として、ヒトという種（しゅ）が、オーラ、スピリチュアリティ、〇〇様、前世、来世、予知、予言、預言、靈感、占い、賭け、投資、投機、自己改善、発想法、思考法、処世術、コーチング、心理療法、霊、神、神々、仏、妖精、超常現象など、と呼ばれている「物・事・現象・言葉」に惹かれ、依存し、それらを基盤にして文化や文明や知と呼ばれている現象を築きあげているのは、そうした現象の最小単位＝最小レベルとしての、ヒト個人の「意識」に備わっている、これまで述べてきた特性を、遺伝子のレベルで持つヒト個人が、そうした遺伝子を持たないヒト個人に比較して、高い生存率を達成してきた＝生き延びてきた＝相対的に多くの子孫を残してきた、からではないか。

その結果として、そうした遺伝子を持つヒトの割合が多くなっている、と考えられるのではないだろうか。逆に言うと、そうした遺伝子を持たないヒト個人や、そうした遺伝子を持ちながら不遇な境遇にあるヒト個人の生存率は、低いと言えるのではないか。

*

★まとめ

*上の「★意識」で述べた「鈍い」「意識」＝「鈍感さ」と、「★脳と意識」で述べた「意識」の「大いなる乱れ＝ずれ＝くるい＝錯覚」とを、兼ね備えること、および、兼ね備えているヒトに注目しよう。それが兼ね備わっていない場合には、自分自身において、そういう状態が「実現する＝あらわれる＝でる」ように、専門家の助けを借りるなり、日々自力で努力することが、ヒト個人レベルで長生きをするコツ＝秘訣である、と言えるかもしれない。

*万が一、深刻化しつつあるかに見える地球温暖化、金融危機・信用危機に端を発するという現在の大不況、この惑星のリミットを超えた人口増加、ミツバチの世界的規模での激減などの、由々しき数々の予兆＝問題＝危機が、「★謎＝疑問」で述べた「文化や文明や知と呼ばれている現象」が招いた結果であるとするならば、上で述べた「ヒト個人レベルで長生きをするコツ＝秘訣」と、「ヒト＝人類」レベルでの「行く末＝未来」への対処＝対策とが、相反する方向を目指していることは言うまでもない。

* * * * *

なお、これもまた、言うまでもないことですが、以上の「断片」＝「つぶやき」に、いわゆる科学的根拠はまったくありません。でまかせと、勘＝観＝感＝瘡＝癩の産物です。「断片」のなかには、ある種の方々に、不快なお気持ちをいだかせるにちがいないものも含まれていたと存じます。

当ブログは、楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくやろう、お勉強ごっこ」の場です。したがって、この記事に書かれている事柄はすべて、理論的・実証的根拠の検証を経ない、個人の感想文＝意見にしかすぎませんので、ご理解とご容赦を願います。どうか、アホの戯言として、お笑ってください。

*

きょうは、「あらわれる・でる」につきまとう、幽霊のような、「イメージ」という言葉について、きのうから考え続けていたことを、「つぶやき」形式で書きました。ちょっと、脇にそれたような格好になりましたが、言うべきことは書いたと思っています。まだ、メモはだいぶ残っていますが、別の機会に利用するつもりです。

あすは、また、シリーズの続きを書く予定です。お待ちしておりますので、また、遊びに来てくださいね。

*

最後に少しだけ、お付き合いをお願いします。

前が出る 右往左往で 後戻り

鬼を見た 鏡に映るヒトは誰

あらわれた 出ぬ出ぬヒトに あらわれた

自分は俳句が詠めません。ぜんぶ、川柳もどきになってしまいます。ま、いっか。

詠む詠むと いきんだものの がんもどき

蜘蛛と雲 カレイとヒラメ 詠むと読む

あれとこれ どれがまずいか ネコに聞き

ネコにそっぽを向かれました。だめだ、こりゃ。ネコを見習って、もう一度、顔を洗って出直してきます。

では。

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

◆あらわれる・あらわす (8)

2009-06-01 08:44:21 | 言葉

本日は、とちくるわせていただいてよろしいでしょうか？ えっつ？ 勝手にとちくるえば～、ですか？ おありがとうございます。では、きょうは、ころおきなく、取り乱させていただきます。はあ？ いつものことだろう、ですか？ お励ましの言葉をいただき、感謝に耐えません。

いえいえ、決して皮肉などではなりません。おふざけにも、ころを込める。マジで乱れる。これが、当ブログのスタンスでございます。

先日、「と、いうわけです (2)」2009-05-24 という記事で、トンデモ本と、「と」という言葉について書いている最中のことです。その数日前まで続けていたシリーズで保留扱いにしておいた「ノイズ」というテーマが、いきなりゾンビのように追いかけてきて、ずいぶん怖い目にあいました。

*

きのうは、

*イメージ

という、これまた性質（たち）の悪そうなテーマを扱いまして、ある程度書いたところで、「ま、いっか」感覚で、あとは「ほぼ保留」みたいに放っておこうと決めこみました。ところが、その「イメージ」が、またまたゾンビのように追いかけてきたのです。ですので、きょうは、いちおうのケリをつけてやろうかと考えております。

で、このブログのスタンスというか、ワンパターンのやり方として、

*記事のテーマを、記事に登場する言葉たちに演じさせる。

という、少々けったいな演出を、きょうも行うつもりです。きょうのテーマは、「イメージ」ですので、まず、

*イメージとは、いかがわしくて、うさんくさくて、あてにならなくて、テキトーだ。

という特性を確認しておきます。実際、そうなんです。困ったもんなんですよー。手に負えません。ですから、当然のことながら、さきほどのスタンスでいくとなると、この記事に出てくる言葉たちの表情、身ぶり、仕草、やることなすこと全部が、

*いかがわしくて、うさんくさくて、あてにならなくて、テキトーだ。

になってしまいます。

なんで、そんなアホなことをするのか、と疑問に思われる方もいらっしゃるでしょう。アホだからなんです、こういうことが好きなんですよー、とお答えするしかありません。

イメージの悪口＝悪態については、きのう、書きました。ちょっとややこしい書き方をしてしまいましたので、きょうは、図にしてみます。

* * * * *

知覚器官 — 知覚する（超高速・正確）— 対象：「外イメージ」＝情報・データ・信号≠
森羅万象

↓

ニューロン — 伝達する（超高速・正確）— 対象：情報・データ・信号

↓

脳 — 情報処理する (超高速・正確) — 対象: 情報・データ・信号

↓

意識 —

- (1) 脳で処理された情報・データ・信号を受理する & 受理し損なう (超低速+「ノイズ=乱れ=ずれ=くるい」の発生)
- (2) 認識する = (1) をスクリーンに映す (超低速+「ノイズ=乱れ=ずれ=くるい」の発生)
- (3) (2) に加えて、脳で処理された情報・データ・信号を偽造=捏造する。(超低速+「ノイズ=乱れ=ずれ=くるい」の発生)
- (4) (1) (2) (3) の結果として、「大いなる乱れ=とほうもないずれ=とんでもないくるい」を常時産出する
- (5) 意識に備わった、ある程度の有効性=整合性により、(4) の状態=常態を、自らの「優秀さ」と信じる=驕(おご)る

↓

意識が、「内イメージ」を産出・蓄積・保存・放出する(「内イメージ」は、新たに、ヒトにとっての森羅万象の一部になる)

↓

(知覚器官)

以上です。

なお、「外イメージ」と「内イメージ」は、イメージの知覚から認識を経て放出されるまでの過程において便宜上用いただけなので、今後は、必要のある場合を除き、単に「イメージ」と表記します。上の図から言えることは、さきほど述べた、

*イメージとは、いかがわしくて、うさんくさくて、あてにならなくて、テキトーだ。

にほかなりません。

その点が、いちばん大切なところです。では、次に、上図および、たった今書きました「いちばん大切なところ」を、言葉たちによって演じてもらおうと思います。

*こりゃ、ついていけんわ、

とお感じになった方は、斜め読み or 飛ばし読みをしていただいて、いっこうにかまいません。では、まいります。

*

繰り返しますが、イメージって、とってもテキトーで、いかがわしくて、うさんくさくて、でたらめなんです。そんなイメージというものがテーマですので、この記事に登場させる＝用いる言葉たちにも、そうした

*いかがわしさとうさんくささとテキトーさを演じさせる

つもりでございます。

イルカショーのイルカさん、アシカショーのアシカさん、猿回しのおサルさんと、同じでございます。それなりに、一生懸命演技をしておりますので、どうか、大目に見てやり、おひねりなんかも多めに投げてやっていただければ、幸いです。時には、粗相をいたす可能性もありますが、そここのところは、どうかご寛大なお取りはからいを頂戴できればと存じます。

イメージとは、

*「いだく」

もので、

*「あらわれる」

とか、

*「でる」

とか、という言葉とは、あまり相性がよくないようです。「いだく」は、

*「抱く・擁く・懐く」

と「漢字＝感字＋ひらがな」で表記することもあります。赤ちゃんみたいに、抱かれてばかりいるので、あんなに

*わがままに育っちゃった

のでしょうか？ もっとも、「もつ」「えがく」「うかぶ」「かんじる」「する」なんかとも相性がいいことは、きのうの記事に書いたとおりです。

こうやって見てみると、やはり、「あらわれる」「でる」と相性のいいものたちと比べ

て、何だか、

*イメージは勝手にヒトがつくるもの

というイメージがありませんか？ そうです。

*「勝手に」

がキーワードです。「カラスの勝手にしょ〜」の「勝手に」です。かつて、そんな歌が流行りましたね。だから、「わがまま」なんです。納得しちゃいました。

ところで、イメージという言葉に、どんなイメージをお持ち=おいだき=お描き=お浮かべ=お感じになりますか？

*ヒトそれぞれ

ですよ。

そういうところが、イメージの「勝手さ」=「わがままさ」=「テキトーさ」=「いかがわしさ」なんです。

*イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味らしい。つまり、「にせもの=偽もの=偽物=偽者=贋物=贋者」ということ。

以上は、きのうの記事からの引用に、ちょっと手を加えたものです。やっぱり、いかにも柄が悪そうですね。image は、imagine (※イマジン)、imagination (※イマジネーション)、imitate (※イミテイト)、imitation (※イミテーション) なんかの親戚だということ。

フランス語だと、スペリングは image のままで、「イマージュ」みたいに発音するそうです。精神分析でつかう imago (※イマーゴ or イマゴ) といって、「子供時代の理想の愛の対象や理想像」を意味する用語がありますが、これも親戚だとのこと。

ちょっと、もよおしてきましたので、ダジャレをさせてください。お題は、イメージ、イメジ、イマジン、イマージュ、イマゴ、です。

*「夢路 (ゆめじ)」いとし、喜味こいし (※ちょっと古すぎるし、そうとう苦しいオヤジギャグですね)。

*「いじめ」はだめだよ「迷児 (めいじ)」くん (※だからー、あの、どつき漫才のコン

ビは一、正司敏江・「玲児（れいじ）」だっちゅーの。むぎゅ。

* 『『今語（いまご）』って流行語？』『さあ？ ちなみに『imago』って雑誌は、休刊中みたいですが、なかなかいい特集がありましたね。まだ、ときどき、バックナンバーの在庫フェア、やっているみたいですよ』

* まご、「ひまご」、やしやご。

* 「今、じゅ」わーって、こなかった？

* 「今人（いまじん）＝めっちゃチョーナウいヒト」、「暇人」、ワシのこと。

* 元暴れん坊のレノンちゃんの「イマジン」も、いったん、お金を儲けてしまえば、平和がいいから、ピース、アンド、ラブ、フォエバーで、あとは奥さん、財テクくるいで、2人の息子（※異母兄弟）に暖簾（ノレン）分けして、今はイン・ザ・ヘブン。合掌。

* 「imagine ス、売ってます？ ＝今、ギネス（ブック）売ってます？」（※現 Guinness World Records = 旧 The Guinness Book of (World) Records)

* 「imagine ス、売ってます？ ＝今、ギネス売ってます？」「いいえ、でも、クアーズとバドならあります」

* 「I'm Age. =ワシの名は英二ちゅうねん」

* 「I'm age. =ぼく、おあげだよ（※「あぶらあげくん」が主人公の童話より引用）」

* 「I'm Ago. =おれ、あご勇（※「あご・いさむ」さん、Where are you now?）」

* 「アイム・アゴ（＝顎＝jaw＝ジョー）」。「おじょうず、お上手」

* 「アイム・アゴ（＝顎＝chin＝チン）」。「『おら、ハードボイルドだど』の内藤陳（ないとう・ちん）さんじゃありませんかー、お懐かしーい」

* 「アイム・アゴ（＝顎＝chin＝チン）」。「ミスターちんさん、プロレスラーのミスター珍さんとは、ご親戚だったのですか」

* 「アイム・アゴ（＝顎＝chin＝チン）」。「ちんちんかもかも。仲がおよろしいですねえ」（※放送禁止用語では、ないみたいです。広辞苑に載っていますので、お調べ願います）

* 『今ご』ろになって、『イメ』チェン (=イメージ・チェンジ) して、猫をかぶったり、いい人ぶって、い『い孫』の振りをして、おばあちゃん、許しません。しょせん、あなたは『イミテーション』、『にせもの』、『まがいもの』なの。いつも、『マネ』一、『マネ』一じゃない？ わたしゃ、もう騙されませんからね」

* imagine のアナグラムは enigma (英語で、謎、謎の人) + i (虚数単位)。image のアナグラムは、magie (仏語で、魔法、魔術)。「マジ」で、あやしい。上述の imago のアナグラムは amigo となり、スペイン語で「(男の) 友達」となるが、いやになれなれしくて要注意。

以上、寸劇を演じました言葉たちの身ぶり・表情・仕草・めくばせから、お分かりいただけただけのように、イメージという言葉=現象=記号は、その身勝手さ、うさんくささ、テキトーさにもかかわらず、

* 思考=想像=妄想を、刺激=攪乱 (かくらん) し、錯乱させる

という意味では、貴重な働き=役割=機能を果たしていると考えられます。

*

さて、ここで原点にもどります。さきほど、きのうの記事からの引用という形で述べました、

* イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味らしい。つまり、「にせもの=偽もの=偽物=偽者=贗物=贗者」ということ。

と、やはり、きのうの記事で書いた、

* ヒトは、「絶対他者」には出あえない。「絶対他者」の「影」とおぼしき「イメージ」=「自分の知覚した結果を受けとめた、意識というスクリーンに映った像」だけに出あう。ヒトは、「自分自身」にも出あえない。したがって、生まれて間もない赤ちゃんが、まわりの世界=他者に (を)、

A) あう・であう ⇒ みる・ちかくする ⇒ あらわれる・でる

B) 合う・出合う・出遭う ⇒ 見る・知覚する・近くする ⇒ 現われる・洗われる・あら、割れる・出る

というのは、フィクション=作り話=おとぎ話=説明のための方便=妥協の産物、である。

という部分について、再度、考えてみます。で、

*イメージを対象として思考する

さいのキーワードは、

*似ている

と、

*フィクション

だと思えます。

「似ている」とは、ちょっと異なる＝違う＝ずれている、ということです。それは、ふつう、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚、つまり五感と呼ばれている知覚と、もしそのようなものがあればの話ですが、第六感というものを通して、知覚されます。「あれの味と似ているなあ」、「どこかで嗅いだことのある匂いだ」、「かもし出す雰囲気というか、何となく懐かしさを覚えるのよ」という感じですか。例のデジャ・ヴュという感覚も、「似ている」の仲間でしょうか。

*

「あらわれる・あらわす・でる」に相当する英語の単語のうち、気になる一部のものを挙げてみます。

* appear : 語源は「見えてくる・視野に入る」という感じだそうです。

* show (up) : 語源は「見る・見せる」らしいです。

* represent : re- + present で、「再び」 + 「示す・述べる・与える・差し出す」 = 「表示する」というイメージです。名詞形は representation で、例の presentation 「プレゼンテーション」の仲間。

以上のうちで、represent と present には、フランス語にもそれに相当する語の系列があり、現代フランス哲学、文学、文芸批評などで盛んに用いられてきました。多義的で興味深い語です。上記の3語と、「あらわれる・あらわす・でる」は、

*似ています。

ということは、当然のことながら、異なる部分もあるということです。

このブログでは、なるべく、日本語を使って話を進めたいので、「あらわれる・あらわす・でる」の英語バージョンの紹介は、ここでとどめておきます。ルプレゼンタシオンやプレゼンスといったフランス語にまで立ち入ることも、やめておきます。別に、そうした用語に、抵抗があるわけではありません。つかい慣れたツール=玩具で、遊びたいだけです。

ただ、イメージというレベルにおいては、母語 vs. 外国語、現代語 vs. 古語、口語 vs. 文語といった区別など、あまり意味を持たないというか、気まぐれなイメージ自体の抽象化作用が、今挙げた2項対立を具体的なものとして扱うことを無化する=阻害する=妨害する=嘲笑うだけです。その意味では、イメージは怖いです。危ういというより危ないです。

*

そんな話はいいとして、みなさん、まわりを見回してください。「似ている」「そっくり」なものが、あちこちにありませんか？ まず、パソコン、ケータイがありますね。それって、それとそっくりなものがほかの場所にも、たくさんあるということです。大量生産されているから、当然です。

次に、パソコンのモニターやスピーカー、ケータイの液晶やスピーカーに注目してください。そこに映ったり、そこから流れてくるものは、複製=コピーされたもので、ほかの場所にも、同時に恐るべき数の映像や音声として、存在しているはずですよ。

でも、錯覚しないでください。それらの映像や音声は、同一ではないのです。似ているだけなのです。同一であるものは、原則として=基本的に、ある特定の1ヶ所だけにしか存在し得ないのです。

このブログでよくつかうパーツである、「トリトメのない記号=まぼろし」と「そっくり」=とても「似ている」話になります。「トリトメのない記号=まぼろし」については、「あらわれる・あらわす (1)」2009-05-25 で、「表象」と「信号」と比較して説明しておきました。「トリトメのない記号=まぼろし」と「イメージ」を区別すべきなのかどうかに関しては、まだ考えが煮詰まっていません。ただ

* 「そっくり」=とても「似ている」

ことだけは、確かです。いつか、この「激似」状況について、考えてみたいです。

*

さて、

* 「似ている」が、あちこちにあふれている。

一方で、

* 「同一である」ということは、きわめて、まれな現象である。

と言えそうです。

なぜなら、「同一であるものは、原則として＝基本的に、ある特定の1ヶ所だけにしか存在し得ない」という屁理屈が理由であるだけでなく、「同一である」ことを、ヒトが知覚したり、知覚した結果を認識し、断言するに至るまでには、かなりの時間＝間（＝ま・あわい）と隔たり＝距離が必要だからです。

* ヒトにとって、「似ている」は「近い＝親しい」現象であるが、「同一である」は「ほぼ知覚不能」な現象である。

と言っても言いすぎではないような気がします。

厳密な意味で「同一である」を追求するとすれば、それは物理学の仕事ではないでしょうか。その領域において、ヒトが通常用いている知覚は、ほとんど役に立たず、機械＝計器に頼らざるを得ない。そう言ってもいいと思います。言い換えると、

* ヒトに備わっている限界性＝枠が、ヒトから「同一である」を遠ざけ、「似ている」を近い＝親しいものにしてている。

となります。

だから、

* 「似ている」が、あちこちにあふれている。

と、さきほど述べたことに、もどってしまうわけです。この

* 「似ている」は「イメージ」である。あるいは、「似ている」は「イメージ」の特性である。

と言えそうです。

*「似ている」は、フィクション＝作り話＝小説＝物語＝映画＝テレビ番組と、重なる＝かぶる＝からむ。

とも言いたいです。さらには、

*「似ている」は、ノンフィクション＝実話＝ドキュメンタリー＝ニュース＝報道＝報告と、重なる＝かぶる＝からむ。

とまで話を拡大したいです。

なぜかと申しますと、上で述べた

*フィクションもノンフィクションも、再演＝コピー＝複製としてしか、存在できない。

からです。

ある事件が起きたとします。その場に立ちあったヒトたち以外は、その事件についての映像・記録（＝文書・音声）を、現在では、ほとんどがデジタル化された情報＝データ＝信号として、機械を通して知覚するしか、知覚する方法がない。そんなふうに、言えそうです。

そうであるなら、フィクションか、ノンフィクションかの違いは、原則として＝基本的に、個人レベルのヒトには検証＝確認できないことになります。YouTube の映像が、演出されたもの＝フィクションか、演出されていないもの＝ノンフィクションかを、検証＝確認することは、ほぼ不可能でしょう。

それと似たことが、

*「似ている」が、あちこちにあふれている。

という現象として、この惑星に住むほとんどのヒトの「現実」となっているのです。その「現実」を言い換えると、

*いかがわしくて、うさんくさくて、あてにならなくて、テキトーな「イメージ」が、「現実」を侵して＝犯している。

となります。なぜ「犯している」のかというと、

*「イメージ」は、ヒトのまえに「あらわれる・あらわす・でる」ものではなく、ヒトが「いただく」ものである。

からなのです。

「あらわれる・あらわす・でる」に比べれば、圧倒的に、ヒトの内（部）の問題になってしまいます。完全にヒトの責任の話として論じることも可能なのです。ですから、

*いかがわしくて、うさんくさくて、あてにならなくて、テキトーなのは、「イメージ」自体ではなく、むしろ、「イメージ」を「いただく」ヒトである。

とも言えそうなのです。この言い方のほうに、説得力を感じ、加担したくなります。

*

マジで、とちくった話になってしまいましたね。この記事を書いているアホを責めないでください。責めるのなら、いかがわしくて、うさんくさくて、あてにならなくて、テキトーな「イメージ」を、せめて責めて攻めまくってやってください。

ヒトの責任は、とりあえず保留しておきましょう。以上が、きょうのまとめです。ややこしかったですね。ここまで読んでいただいた方に、こころより感謝いたします。

夢で見た 似ている人を 夢で待ち

*

話はがらりと変わりますが、このブログは「人気ブログランキング」に参加させてもらっています。どれくらいの人を読んでくれているのかなあ、と時々ランキングサイトに入り、目を通します。で、ちょっとびっくりしているのですが、あの「週間 IN」と「週間 OUT」ってどう違うのでしょうか？ 説明のサイトに入って文面を読んでも、さっぱり分からないのです。真剣に何度も読んだんですよ。でも、理解できませんでした。

というのも、このブログの「週間 IN」と「週間 OUT」とのアンバランスさって、変じゃありません？ たとえば、きのうの正午過ぎのある時点では、「週間 IN」が90で、「週間 OUT」が800でした。ほかの方々のブログの数字と比較すると

【注：この記事が書かれた当時は、「人気ブログランキング」の「エッセイ」に参加していました。今参加しているのは「現代小説」でジャンルが違うということもありますが、このブログも1年前はそれなりに受けていたのですね。】

*とちくるっている

としか思えないんですけど、あれ、どうしてなんですか？ どういう仕組みなんですか？ あの仕組みをご理解なさっている方がいらっしゃいましたら、プロフィールにあるメールアドレス宛に、ご一報願います。難解な説明文を読んで勝手に理解したのですが、面白くないから＝呆れたから＝あまりにも長いから、読むのをやめて途中で出て行った＝OUT という意味なのでしょうか？ それなら、納得できますけど。

いずれにせよ、いちばん下にある URL にクリックしてくださっている方々に、ここよりお礼を申し上げます。大変、励みになっております。毎度、長い文章を書いて、ごめんなさい。さぞかし、目が疲れることでしょう。申し訳ありません。アホなりに頑張っ
て書き続けますので、今後とも、よろしくお願い申し上げます。

09.06.02 こんなことを書きました（その9）

◆こんなことを書きました（その9）

2009-06-02 08:28:45 | 言葉

「あらわれる・あらわす」シリーズが一段落ついたもようなので、きょうは、シリーズを振り返り、あたまの整理をしておこうと思います。シリーズでは、最後のほうになって、「イメージ」という闖入者が「あらわれ＝で」ましたが、きのうの記事で、思う存分暴れさせることにより、何とか静めた＝鎮めた＝沈めたつもりです。いつぞやの「ノイズ」のように、再度不意にゾンビのようにしゃしゃり出てくる可能性もありますが、それはその時に善処いたしたいと思います。

さて、きょうの「こんなことを書きました（その9）」は、前回の「こんなことを書きました（その8）」2009-05-23（2009-05-13～2009-05-22）の続きです。今回は、2009-05-23から2009-06-02に掲載した記事のダイジェスト版です。短い解説とキーワードが書いてあります。

*「こんなことを書きました（その8）」2009-05-23：2009-05-13 から 2009-05-22 に書いた記事のダイジェスト版です。

*「と、いうわけです (1)」2009-05-24：この日の前編。トンデモ本と呼ばれている書物を紹介した本を立ち読みして、感動したことをきっかけに、若き日に頻繁に覚えた「わくわくぞくぞく感」を回想しています。「トンデモ」本の「ト＝と」に促されてか、ジル・ドゥルーズにおける「と」の話に移ります。接続詞の「と」を扱うことは、「間(＝ま・あいだ・あわい)」＝「際(＝さい・きわ)」＝「関係・関係性」を対象にした思考・考察に関わる＝係わる行為である、と指摘しています。キーワードは、「トンデモブログ」「皮膚感覚」「衝動」「欲求」「発情」「ピエール＝フェリックス・ガタリ」「ミシェル・フーコー」「ジャック・デリダ」「マイナー」「ネガティブ」「変」「ゲイ・サイエンス」「フランス語の表記と発音」「and」「et」「つなぐ・つながり」です。直接書かなかったキーワードは、『プルーストとシーニュ』『差異と反復』『千のプラトーン——資本主義と分裂症』『蓮實重彦』『批評あるいは仮死の祭典』『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』『マゾッホとサド』『豊崎光一』『リゾーム』です。

*「と、いうわけです (2)」2009-05-24：この日の後編。「トンデモ本」と接続詞「と」について、考えているうちに、「かく・かける (1)～(8)」とその補遺にあたる記事で保留扱いにしておいた「ノイズ」が、思いがけない形でテーマに割り込んできました。そこで、「と」という「接続詞」ではなく、「と」という「言葉＝文字・文字の形・音声」に、闖入したテーマである「ノイズ」を演じさせるという、このブログ恒例の儀式を実行しています。言葉に「ノイズ」を演じさせるために、文章が読みにくくなっています。これは、実際に文章を読んでいただく以外に、体感するのは無理かと思います。結論として、ノイズを「不幸で不遇な符号」と名づけようとしています。キーワードは、「とちくるう」「偶然性」「必然性」「2項対立」「現代物理学」「と学会」「罨線」「ハンブル」「ほぼ日刊イトイ新聞」「老人と子供のポルカ」「左ト全」「ひまわりキティーズ」「ノーベル物理学賞」「対称性の破れ」「自発性対称性の破れ」「クオーク世代の予言」「小林誠」「益川敏英」「南部陽一郎」「言霊」です。直接書かなかったキーワードは、「糸井重里」です。

*「あらわれる・あらわす (1)」2009-05-25：「あらわれる」という言葉に「あらわれる」を演じさせています。その言葉による「演技＝仕事＝運動＝めくばせ」が、「あらわれる」というテーマを体感する形で、読者が受けとめてくれることを願っています。ふざけているように思われそうですが、書いている本人は、いたって本気なのです。シリーズの第1回目なので、このブログでよく用いる「表象」「記号」「信号」について、具体的に説明しています。また、発達心理学の用語に対する疑問を表明しています。「見える」と「あらわれる」の違いを、読者に問いかけています。キーワードは、「人面〇〇」「であう」「idol」「相貌的知覚」「発達心理学」「未分化」「原始的」「body」「体」「天体』『スタンド・バイ・ミー』『スティーヴン・キング』『The Body』『錬金術』『宇宙』『マイクロコスモス』『マクロコスモス』『たとえ・たとえる』です。

*「あらわれる・あらわす (2)」2009-05-26：「あらわれる」について考えるにあたり、ヒトの誕生と、生後間もない赤ちゃんに焦点を当てようと決意しています。育児と子育て

ての経験がないので、大変な作業になるだろうと予感しています。調べ物をしているさいに、発達心理学関連のサイトを覗き、やはり、この分野の用語は変だ、と意見を述べています。うんちに対する赤ちゃんの親近感と愛着に注目し、「であう⇒ 見る＝知覚する ⇒ 出た≡ あらわれた」というプロセスを想定しています。「(発達) 段階」という考え方に、かみ付いています。キーワードは、「目線」「未分化」「未成熟」「未発達」「未熟」「発達途上」「原始的」「言葉の綾」「発達段階」「階段」「連続的变化」「自／他」「自我」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャン・ピアジェ」「レフ・ヴィゴツキー」「フロイト」です。

*「あらわれる・あらわす (3)」2009-05-27:「あわわれる」「でる」とその兄弟姉妹の言葉たちのイメージを、複数の国語辞典、漢和辞典、用語用字集、表記の手引きを参照して、整理し、まとめています。赤ちゃんを対象とした「いないいないばあ」という遊びに「フィクション」の芽ばえを見えています。赤ちゃんを論じる場合に、「意識」や「認識」という言葉を使っていいのか、迷っています。苦しまぎれに「体感」「知覚」という言葉で、お茶を濁しています。赤ちゃんやコドモについて考えたり、述べる場合に、自分を含めたオトナが上からの目線で眺めがちである点を反省しています。キーワードは、「偶然性」「必然性」「整合性」「本当」「装う」「fort / da」「・・・ごっこ」「戯れ」「中上健次」「蓮實重彦』『事件の現場』『広義の言葉』『表象(作用)』『発達心理学』『現実／仮想現実』『ゲイ・サイエンス』『フロイト』『肛門』『うんち』です。

*「あらわれる・あらわす (4)」2009-05-28: 広辞苑に、「うんこ」という言葉の語源が記載されていたことに驚いています。それに触発されて、「あらわれる」と「でる」のイメージの違いを、詳細に分析しています。そこから、『出る』の中心的イメージは、「うんちである」という結論に至っています。なぜ、うんちを特権化するのかについて、熱弁を振っています。結果的に、うんち擁護論となっています。めちやくちやなこじつけで、うんちを擁護しています。個人的には、愛着のある記事です。キーワードは、「息む」「コア・イメージ」「自他未分化」「自他分離」「自我」「他者」「コドモ／オトナ」「浮遊感」「ぶかぶか」「不安定」「フロイト」「口唇期」「肛門期」「クレヨンしんちゃん」「お尻」です。

*「あらわれる・あらわす (5)」2009-05-29: このシリーズを書き始めて以来、赤ちゃんウォッチングが身についたことに触れ、赤ちゃんと、その付き添いの人とが「似ている」か、どうか注目するようになった、と報告しています。「あらわれる・あらわす・あらわ・でる・だす」を「漢字+ひらがな」に表記した場合のバリエーションを、比較しています。また、そのさいに用いられる漢字の使用例と、「解字」と、イメージを調べた結果を、報告しています。また、毎日、どのようにして、ブログを書いているかも、話題にしています。このブログで一貫して行っている、「記事のテーマを、記事で使用する言葉に演じさせる」という「言葉の遊び」について、読者に理解してほしいために、その説明に悪戦苦闘しています。アホの坂田さんに登場してもらい、手伝ってもらっています。キーワードは、『記者ハンドブック新聞用字用語集』『朝日新聞の用語の手引き』『読みや

すい／読みにくい」です。

*「あらわれる・あらわす (6)」2009-05-30：坂田利夫さん、高倉健さん、忌野清志郎さんを例に取り、他人やファンがいただいている自分についてのイメージに、有名人が、どのように対処しているかを論じています。そのメカニズムを説明することで、このブログで一貫して行っている「テーマを言葉に演じさせる」という方法＝戦略を説明しようと努めています。ややこしい話なので、軟らかめの例を用いて論じようと工夫していますが、話が読者に通じたかは自信がありません。こうした方法＝戦略を用いる理由についても、触れています。そのなかで、自分を啓発＝触発した、4人の人による8冊の書物のタイトルを紹介しています。ブログ記事で使用している方法＝戦略が、自分の一方的な誤解と思い込みの産物である可能性が高いと、断っています。キーワードは、「トリトメのない記号＝まぼろし」「差別化」「特化」「アイドル」「自分自身を演じる」「表象」「蓮實重彦』『批評あるいは仮死の祭典』『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』『渡部直己』『泉鏡花論－幻影の杼機』『谷崎潤一郎－擬態の誘惑』『豊崎光一』『余白とその余白または幹のない接木』『砂の顔』『宮川淳』『引用の織物』『紙片と眼差のあいだに』です。

*「あらわれる・あらわす (7)」2009-05-31：イメージに備わっている「テキトーさ」を、読者に体感してもらおうと努めています。前日から書き溜めていた、この日の記事用の走り書きメモの量が、いつもの数倍になり、しかも内容的にまとまらず、收拾がつかない状態であると告白しています。そこで、「断片集」＝「つぶやき集」の形式で、テーマごとにメモを継ぎはぎし加筆するという方法を取っています。サブテーマのタイトルは「イメージ」、「意識」、「脳と意識」、「意識と整合性」、「イメージの力および効用」、「謎＝疑問」、「まとめ」です。よく読んでいただくと分かりますが、ヒトという種（しゅ）への批判となっています。このままで、いいのだろうか？ という危機感をいただいています。キーワードは、絞りきれません。

*「あらわれる・あらわす (8)」2009-06-01：「いかがわしくテキトーであるイメージ」というテーマを、記事で使用する言葉に演じさせようとしています。そのため、文章が「とちくるう」という結果になっています。前日の、ややこしかった「断片集」を図式化して、読者の理解に役立つようにと工夫をしています。イメージのいかがわしさとテキトーさの原因を、「イメージはヒトが『勝手にいただくもの』」という点に見ています。imageという言葉の兄弟姉妹を使って、めちゃくちゃなこじつけとオヤジギャグの連発を、箇条書きにしています。あとで読み返すと、恥ずかしいです。そうとう、あやういです。イメージの奥深さに触れ、イメージを思考の対象とするさいには、「似ている」と「フィクション」が重要な鍵になると訴えています。「似ている」の説明に、かなり字数を費やしています。この記事を書き終えた時点で、そろそろ次のシリーズに移るべきだと感じています。記事の最後で、「人気プログラムランキング」における、このブログの「週間IN」と「週間OUT」が、「とちくるったように」アンバランスな点が気になっている、と告白しています。その仕組みが分かっていないので、動揺しています。仕組みを理解したいので、読者に助けを求めています。キーワードは、「真似たもの・似せたもの・にせもの」

「imagine」「imagination」「imitate」「imitation」「imago」「イマーゴ」「appear」「show」「show up」「represent」「representation」「presentation」「present」「ルプレゼンタション」「プレゼンス」「イメージ」「再演＝複製＝コピー」「そっくり」「同一（である）」「トリトメのない記号＝まぼろし」「フィクション／ノンフィクション」「演出」「YouTube」です。直接書かなかったキーワードは、「青土社」です。

以上です。

★追記：きのうの記事で書きました、「人気ブログランキング」の「週間 IN」と「週間 OUT」についての疑問に対し、読者の方からメールで説明をいただきました。こちらの理解が、誤解であったことが分かりました。友達のいない孤独ブログが、仲間票や組織票もなく健闘しているらしいことを知り、とても嬉しかったです。丁寧な説明をありがとうございました。中・高生時代に、苦手な数学の公式を何とか理解したものの、どうしてそういう公式が存在するのか、また、なぜ必要なかが分からない、という経験をしたのを思い出しました。なんで、あのような IN と OUT の区別があるのでしょうかね。いずれにせよ、お便りをくださった方のご好意に、再度感謝いたします。今後とも、この愚ブログをよろしく願い申し上げます。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係ない。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」＝「代理の仕組み」——「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いるという仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

- 09.04.29 あう (3)
- 09.04.30 あう (4)
- 09.05.01 あう (5)
- 09.05.02 あう (6)
- 09.05.03 あう (7)
- 09.05.04 こんなことを書きました (その6)
- 09.05.05 スポーツの信号学 (1)
- 09.05.06 ドラマ信号論 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (2)
- 09.05.08 信号学的視線論 (1)
- 09.05.09 信号学的視線論 (2)
- 09.05.10 信号論 (1)
- 09.05.11 もくじをつくりました
- 09.05.12 信号論 (2)
- 09.05.12 信号論 (3)
- 09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

- 09.05.14 かく・かける (1)

09.05.15 かく・かける (2)

09.05.16 かく・かける (3)

09.05.16 かく・かける (4)

09.05.17 かく・かける (5)

09.05.18 かく・かける (6)

09.05.19 かく・かける (7)

09.05.19 かく・かける (8)

09.05.20 占い・占う

09.05.21 賭け・賭ける

09.05.22 書く・書ける (1)

09.05.22 書く・書ける (2)

09.05.23 こんなことを書きました (その8)

09.05.24 と、いうわけです (1)

09.05.24 と、いうわけです (2)

09.05.25 あられる・あらず (1)

09.05.26 あられる・あらず (2)

09.05.27 あられる・あらず (3)

09.05.28 あられる・あらず (4)

09.05.29 あられる・あらず (5)

09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 卷

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12 07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました (その 20)

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第5巻

<https://puboo.jp/book/15091>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/15091>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/15091>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第5巻

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
